

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第171集

飯能市

栗屋／屋測／中台

県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



栗屋・屋淵・中台遺跡航空写真



屋淵遺跡出土石器



屋瀨遺跡出土石器



中台遺跡出土石器

序

埼玉県は、高速道路網の整備促進、国道や主要県道のバイパス整備などにより、県内1時間道路網構想を目標とした道路整備を行っています。

飯能市を起点とし寄居町に至る主要地方道、飯能寄居線は、管内の既成市街地を南北に縦断するため、近年の交通量の増加に伴い慢性的な交通渋滞が発生しており、地域間交通の円滑化を図るためバイパスの整備が推進されているところです。

道路建設予定地には遺跡の存在が知られており、これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、どうしても避けることのできない遺跡については、当事業団が発掘調査を行い、記録保存の処置をとることになりました。今回報告いたします栗屋遺跡、屋淵遺跡、中台遺跡は、飯能市域で発掘調査を実施した遺跡です。

埼玉県の南西部に位置する飯能市は、県内の市として最も広い行政域を有しており、自然景観にも恵まれています。古くから先人の足跡が認められ、数多くの文化遺産をのこしております。

栗屋遺跡からは縄文時代中期の集落跡が¹、屋淵遺跡、中台遺跡からは旧石器時代の石器集中箇所が発見されました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県土木部道路建設課、飯能土木事務所及び飯能市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成8年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

例言

1 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。

遺跡名：栗屋遺跡（KRY）

所在地：飯能市下加治134番地他

文化庁指示通知

平成6年1月10日付け 委保第5の1901号

遺跡コード番号：21-009

遺跡名：屋淵遺跡（YBT）

所在地：飯能市下加治300-2番地他

文化庁指示通知

平成5年12月8日付け 委保第5の1594号

遺跡コード番号：21-084

遺跡名：中台遺跡（NKDI）

所在地：飯能市双柳1325-2番地他

文化庁指示通知

平成5年12月8日付け 委保第5の1595号

遺跡コード番号：21-008

2 発掘調査は県道飯能寄居線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は当事業団の新屋雅明、福田聖が担当して、平成5年10月31日から平成6年3月31日まで実施

した。

整理報告書作成作業は新屋雅明が担当し、平成7年8月1日から平成7年11月30日まで行った。

4 遺跡の基準点測量は株式会社パスコ、航空写真は精進測量設計株式会社、土壌の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。

5 写真撮影は発掘調査時の撮影を新屋、福田が行い、遺物写真を新屋、大屋道則が行った。

6 出土品の整理および図版の作成は新屋、西井幸雄が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、II、III、IV-1・3・4、V-1・3・4を新屋が、IV-2、V-2、VIを西井が行った。

7 本書の編集は、資料部資料整理第1課の新屋が行った。

8 本書にかかる資料は平成7年以降県立埋蔵文化財センターが保管する。

9 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。

伊藤 健 大塚達朗 窪田恵一 熊澤孝之 柴田 徹
鈴木美保 曾根原裕明 富元久美子 柳戸伸吾 飯能市教育委員会

凡例

1 X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。各遺跡におけるA1グリッド南東隅の座標値は栗屋遺跡が $X=-15110$ ・ $Y=-44630$ 、屋淵遺跡が $X=-15500$ ・ $Y=-44600$ 、中台遺跡が $X=-15850$ ・ $Y=-44570$ である。

2 縮尺は全測図を1:400、土壙を1:60、溝を1:100、縄文土器実測図を1:4、拓影図を1:3、石器を2:3、1:3で示した。

3 全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。土壙=SK 溝=SD

目次

口絵		IV 屋瀨遺跡	16
序		1 概略	16
例言		2 先土器時代の遺構と遺物	16
凡例		3 縄文時代の遺物	37
I 調査の概要	1	4 その他の遺構	37
1 調査に至る経過	1	V 中台遺跡	40
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	1 概略	40
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	2 先土器時代の遺構と遺物	40
II 立地と環境	4	3 縄文時代の遺構と遺物	44
III 栗屋遺跡	8	4 その他の遺構	46
1 概略	8	VI 結語	48
2 縄文時代の遺構と遺物	10	付編 屋瀨遺跡・中台遺跡のローム層序	61

表 目 次

—栗屋遺跡—	第3表 出土石器一覧……………34
第1表 石器観察表……………15	第4表 土壙一覧……………37
—屋洲遺跡—	—中台遺跡—
第2表 器種・石材組成……………16	第5表 出土石器一覧……………43

挿 図 目 次

第1図 埼玉の地形……………4	第24図 母岩別資料(2)……………33
第2図 周辺の遺跡……………5	第25図 その他の石器……………33
第3図 遺跡位置図……………7	第26図 縄文時代の遺物……………37
—栗屋遺跡—	第27図 遺構全体図……………38
第4図 遺構全体図(1)……………8	第28図 その他の遺構……………39
第5図 遺構全体図(2)……………9	—中台遺跡—
第6図 土壙……………11	第29図 先土器時代の調査……………40
第7図 土壙出土遺物……………12	第30図 土層断面図……………41
第8図 遺構外出土遺物(1)……………13	第31図 石器集中1……………41
第9図 遺構外出土遺物(2)……………14	第32図 出土石器(1)……………42
第10図 遺構外出土遺物(3)……………15	第33図 出土石器(2)……………43
—屋洲遺跡—	第34図 遺構全体図……………44
第11図 先土器時代の調査……………17	第35図 縄文時代の土壙……………45
第12図 土層断面図……………18	第36図 縄文時代の遺物……………45
第13図 石器集中1……………20	第37図 その他の遺構(1)溝……………46
第14図 礫の分布……………21	第38図 その他の遺構(2)土壙……………47
第15図 出土石器(1)……………23	第39図 砂川期の遺跡……………50
第16図 出土石器(2)……………24	第40図 屋洲遺跡・坂東山東遺跡……………52
第17図 出土石器(3)……………25	第41図 西武蔵野遺跡……………53
第18図 出土石器(4)……………27	第42図 砂川遺跡……………55
第19図 出土石器(5)……………28	第43図 鶴ヶ丘遺跡・宮林遺跡・中砂遺跡……………56
第20図 石器接合図(1)……………29	第44図 城の腰遺跡……………57
第21図 石器接合図(2)……………30	第45図 ナイフ形石器(第1形態)……………58
第22図 石器接合図(3)……………31	第46図 ナイフ形石器(第2形態)……………59
第23図 母岩別資料(1)……………32	

図版目次

—栗屋遺跡—

- 図版1 栗屋遺跡全景
- 図版2 第3号土壙
第6号土壙
第9号土壙
第10号土壙
土壙出土遺物
- 図版3 遺構外出土遺物

—屋淵遺跡—

- 図版4 屋淵遺跡全景
第1号土壙
第3号土壙
第4・5号土壙
第11号土壙

- 図版5 石器集中1北半(西から)
石器集中1南半(西から)
- 図版6 石器集中1 石器出土状況
- 図版7 出土石器(1)
- 図版8 出土石器(2)

—中台遺跡—

- 図版9 中台遺跡全景
- 図版10 石器集中1(南から)
石器集中1(西から)
- 図版11 石器集中1 石器出土状況
- 図版12 出土石器
- 図版13 第1～5号土壙
第1号土壙遺物出土状況
第1号土壙出土土器

I 調査の概要

1 調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事が進められている。県道飯能寄居線の建設工事も埼玉県南西部の交通量の増大と地域交通網の整備を図る目的をもって埼玉県土木部によって計画された。こうした開発事業に対応するために、県教育局生涯学習部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行い、文化財保護と開発事業との円滑な調整を進めているところである。

平成4年4月28日付け道建第35号で、県土木部道路建設課長から文化財保護課長あて「道路事業予定地内（飯能寄居線）における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財範囲確認調査を実施し、その結果に基づき、平成5年3月5日付け教文第1240—1号により次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
栗屋遺跡 (NO.21-009)	集落跡	縄文 奈良 平安	飯能市下加治 134他
屋淵遺跡 (NO.21-084)	集落跡	旧石器 縄文 平安	飯能市下加治 300-2他
中台遺跡 (NO.21-008)	集落跡	縄文 奈良 平安	飯能市双柳 1325-2他

2 取扱い

これら埋蔵文化財包蔵地の取扱いは、できる

だけ現状保存することが望ましいが、計画上やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、当教育委員会と協議したのち、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、道路建設課と文化財保護課は、上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、道路網の整備を目的とした建設計画でもあり、計画変更は不可能と判断されたためやむを得ず記録保存の措置を構わずることとなった。

発掘調査の実施については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と道路建設課、文化財保護課の三者により、調査方法・期間・経費等を中心に協議を行った。その結果、平成5年10月から平成6年3月まで発掘調査を実施することが決定された。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から同法第57条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届に対する文化庁からの指示通知番号は、栗屋遺跡平成6年1月10日付け委保第5の1901号、屋淵遺跡平成5年12月8日付け委保第5の1594号、中台遺跡平成5年12月8日付け委保第5の1595号である。

(文化財保護課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成5年10月1日から平成6年3月31日までの6か月間にわたって、栗屋、屋瀨、中台の3遺跡の発掘調査を実施した。

10月上旬。飯能土木事務所と現地にて打ち合わせを行う。現場事務所のプレハブ設置を行う。屋瀨遺跡、中台遺跡については囲柵・防塵ネット付設を行い、補助員の募集など本格的な発掘に向けて、準備を行う。

10月中旬。屋瀨遺跡の表土掘削を重機によって開始する。事務所設置後、器材等の搬入を行う。また、補助員による発掘作業を開始する。屋瀨遺跡の遺構精査から着手し、土壌などが確認される。引き続き遺構の調査を行う。

10月下旬。屋瀨遺跡において方眼杭の設置を行った。3遺跡ともにグリッドは10mとして、各遺跡の北西の隅をA列、0ないしは1列とし、北から南へABC・・・、西から東へ123・・・と名称を付けた。屋瀨遺跡に引き続き、中台遺跡についても重機による表土掘削、方眼杭の設置を行なう。

11月上旬。屋瀨遺跡の遺構平面図作成、写真撮影等を主として行う。

11月中旬。屋瀨遺跡の遺構平面図がほぼ終了する。先土器時代の調査に着手する。栗屋遺跡の囲柵工事を行う。

11月下旬。屋瀨遺跡のM3グリッドを中心として先土器時代の石器集中箇所が存在が明らかとなる。ナイフ形石器、剥片などがソフトロームから出土する。栗屋遺跡の重機による表土掘削を行う。

12月。屋瀨遺跡の先土器時代石器時代集中箇所の調査を主として行う。並行して中台遺跡の遺構精査を実施する。栗屋遺跡は器材棟設置の準備を行う。

1月。中台遺跡の遺構の調査を中心に作業を行う。縄文時代後期前葉の土壌等が発掘される。

栗屋遺跡に器材棟の設置を開始する。方眼杭の設置をする。

屋瀨遺跡の先土器時代石器集中の東側は一部農道にかかっていたため、用地内に道を切り回して農道部分の調査を実施する。この拡張部分からも石器類が出土する。

2月。屋瀨遺跡の先土器時代石器集中の掘り下げを終了し、農道を復旧する。

中台遺跡は遺構の平面図作成、写真撮影を終了し、先土器時代の調査を行う。その結果石器集中が見つかる。剥片類が出土する。

栗屋遺跡の遺構精査、遺構調査を行う。縄文時代中期の土壌が見つかる。引き続き平面図作成、写真撮影を行う。

3月上旬。栗屋遺跡の遺構の平面図作成、写真撮影に並行して、中台遺跡の先土器時代の調査を行う。

3月中旬。栗屋遺跡の平面図作成等を終了する。また屋瀨遺跡、中台遺跡の先土器時代関係土層図を完成し、ほぼ調査は終了に向かう。3遺跡ともに空撮のための清掃を行い、航空写真撮影を実施する。

3月下旬。器材搬出、事務所等設備の撤去を行い、発掘調査事業の全行程を終了する。

整理作業

平成7年8月1日から11月30日の4か月間にわたって実施した。

8月、出土遺物の水洗い・注記・接合作業を行った。同時に図面、写真類の整理を行った。

9月、遺構の第2原図の作成を行い、トレースに着手した。遺物は接合・復元後、分類して拓本、実測作業を行った。

10月、遺構図の版組作業、遺物のトレース作業、遺物の写真撮影を行った。また原稿の執筆も行った。

11月は遺物の版組、写真図版作成に並行して、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、平成8年2月に報告書を刊行した。

3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成5年度)

理事長
副理事長
専務理事
常務理事
兼管理部長
理事
兼調査部長
管理部
庶務課長
主査
主事
経理課長
主任
主事
主事
主事
調査部
調査部副部長
調査第二課長
主任調査員
調査員

荒井 桂
富田 真也
横川 好富
柴崎 光生
中島 利治
萩原 和夫
賛田 清
菊池 久
関野 栄一
江田 和美
長滝 美智子
福田 昭美
腰塚 雄二
高橋 一夫
大和 修
新屋 雅明
福田 聖

(2) 整理事業 (平成7年度)

理事長
副理事長
専務理事
常務理事
兼管理部長
理事
兼調査部長
管理部
庶務課長
主査
主任
主事
専門調査員
兼経理課長
主任
主任
主任
資料部
資料部長
主
兼資料副部長
兼資料整理第一課長
主任調査員

荒井 桂
富田 真也
吉川 國男
新井 秀直
小川 良祐
及川 孝之
市川 有三
長滝 美智子
菊池 久
関野 栄一
江田 和美
福田 昭美
腰塚 雄二
塩野 博
谷井 彪
新屋 雅明

II 立地と環境

栗屋・屋淵・中台遺跡は飯能市の南東部、JR飯能駅の北西約2kmに位置している。

遺跡が立地している入間台地は入間川を境として武蔵野台地と対峙しており、北側は越辺川によって区切られている。入間台地の西側は外秩父山地に接しており、飯能と日高市域との境には高麗丘陵が東西方向に横たわっている。この入間台地は毛呂台地、坂戸台地、飯能台地に区分されている(堀口1986)。このうち飯能台地は入間川の古い扇状地として形成され、上・中・下の三つの段丘に分かれる。

入間台地内を流れる河川はいずれも西部の山地、丘陵に端を発しており、おおむね北東方向へ流路をとり、越辺川、入間川へと合流している。外秩父山地を源とする高麗川、高麗丘陵を源とする小畦川とその支流の下小畦川、第二小畦川、南小畦川、及び武蔵野台地との境をなす入間川などの河川が流れている。

栗屋・屋淵・中台遺跡は先にふれた飯能台地の段丘面のうち上位の武蔵野I面に相当する台地上にあり、高麗丘陵の南側、南小畦川沿いに立地している。

栗屋遺跡は北は高麗丘陵に隣接し、南に南小畦川が

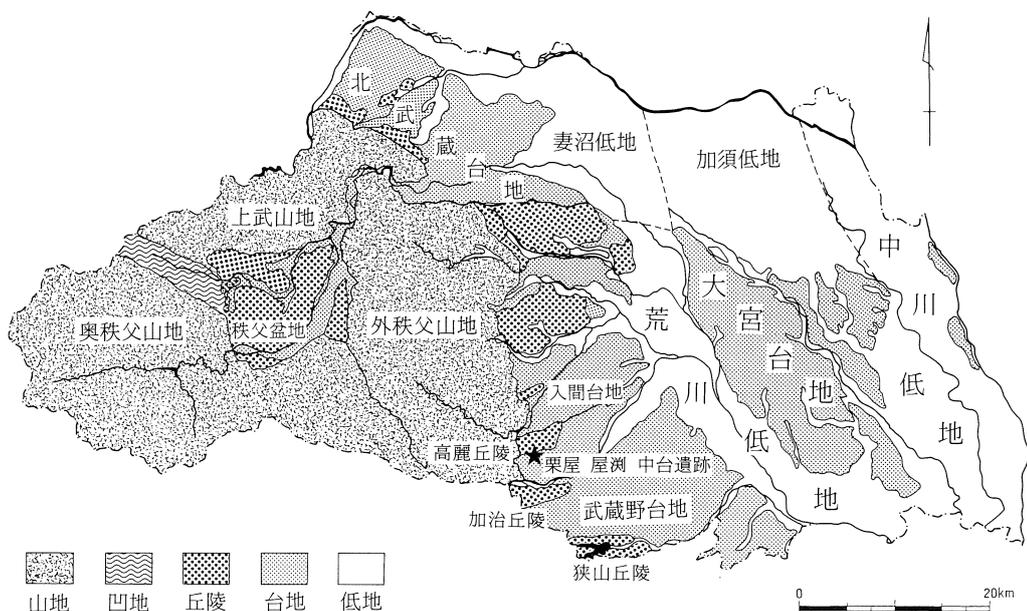
流れる台地上に立地している。屋淵遺跡は北に南小畦川が流れる台地上に位置し、栗屋遺跡の対岸に当たる。また、中台遺跡は小支谷によって、屋淵遺跡の台地とを隔てている。中台遺跡の南方は遺跡の立地する台地より標高の低い段丘面が広がっている。

第2図には周辺の遺跡を示した。北東に流路をとる高麗川、小畦川とその支流、入間川に沿う形で遺跡が分布している。本報告で扱う先土器時代、縄文時代の遺跡について概観しておきたい。

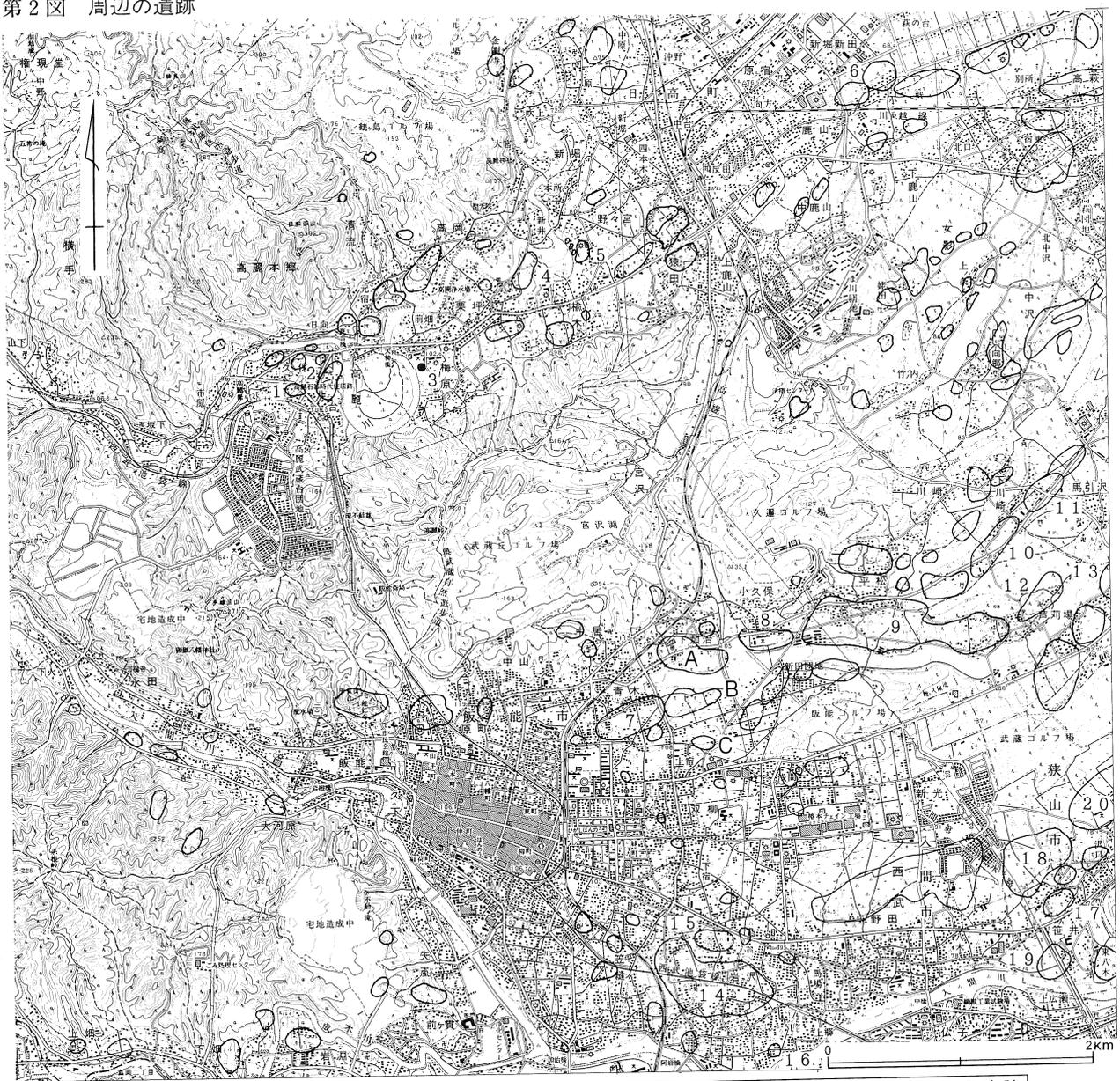
高麗川流域の遺跡としては昭和初期の発掘事例として著名な高麗石器時代住居跡(1)や、平谷遺跡(2)、高麗小学校庭遺跡(3)、東原遺跡(4)、小竹遺跡(5)などがある。これらの遺跡は縄文時代中期後葉が主要な時期であり、高麗石器時代住居跡周辺、高麗小学校庭遺跡では住居跡が見つかった(稲村1929 大護1957)。また、平谷遺跡では後期の土器、東原遺跡では縄文時代各期の土器が出土している(中平他1991 1992)。

小畦川流域においては、縄文時代中期末の柄鏡形住居跡が見つかった稲荷遺跡(6)をはじめとして

第1図 埼玉の地形



第2図 周辺の遺跡



A 栗屋遺跡 B 屋洲遺跡 C 中台遺跡 1 高麗石器時代住居跡 2 平谷遺跡 3 高麗小学校庭遺跡
 4 東原遺跡 5 小竹遺跡 6 稻荷遺跡 7 堂前遺跡 8 株木遺跡 9 張摩久保遺跡 10 芋久保遺跡
 11 下川崎向原遺跡 12 堂ノ根遺跡 13 芦刈場遺跡 14 加能里遺跡 15 池ノ東遺跡 16 前原池遺跡
 17 八木遺跡 18 八木上遺跡 19 八木前遺跡 20 宮地遺跡

(中平1990)、日高市から川越市域に遺跡の分布が見られる。小畦川の支流である下小畦川、第二小畦川流域にも主として縄文時代、平安時代の遺跡が分布している。

入間川沿岸の飯能台地に立地する遺跡に目を転じると、縄文時代草創期から晩期の遺物を出土している加能里遺跡(14)が知られている。十数次にわたる調査報告がなされており、中期～晩期の住居跡が見つかる

ている(富元他1994 他多数)。池ノ東遺跡(15)では中・後期、前原池遺跡(16)では早～後期の遺物が見つかる(仲島 曾根原1984 曾根原 柳戸1985 富元他1991a)。下流の狭山市域では、八木遺跡(17)、八木上遺跡(18)、八木前遺跡(19)において縄文時代前期の集落跡、宮地遺跡(20)において中期の集落跡が知られている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1990 城近他1972)。宮地遺跡においては先土器時

代の遺物が採集されている。

栗屋・屋瀨・中台遺跡と同様、南小畦川の流域に分布する遺跡として第2図7～13がある。屋瀨遺跡の西に位置する堂前遺跡(7)では中期中葉から後葉の集落跡が調査されている(曾根原 柳戸1986 1987)。栗屋遺跡の東に位置する株木遺跡(8)では中期後葉の住居跡4軒が見つかっており、早期から後期の土器が出土している(富元1993b)。奈良・平安時代の遺跡として知られる張摩久保遺跡(9)からも中期、後期の遺構遺物が見つまっている。堂ノ根遺跡(12)では早期条痕文期の炉穴5基が見つかっており、中期の住居跡も発掘されている(富元他1993a)。また芋久保遺跡(10)、下川崎向原遺跡(11)、芦刈場遺跡(13)においても中期の集落跡が発掘されている(小泉他1979、曾根原 富元1991 1992)。

今回の調査により屋瀨・中台遺跡において先土器時代の石器集中が見つまっている。第2図の範囲においてはこれまでのところ宮地遺跡で先土器時代の採集資料がある他は調査事例が少ない。しかし近年の圏央道建設にかかる調査によって、南小畦川右岸の日高市向

山遺跡において石器集中が見つかっており(田中 黒坂1995)、また入間川左岸では西久保遺跡が報告されている(栗岡 西井1995)。今回報告する屋瀨・中台遺跡の事例も含め、当該地域における先土器時代の様相が明らかになってきている。

また縄文時代については今回、中期から後期の遺物が出土した。

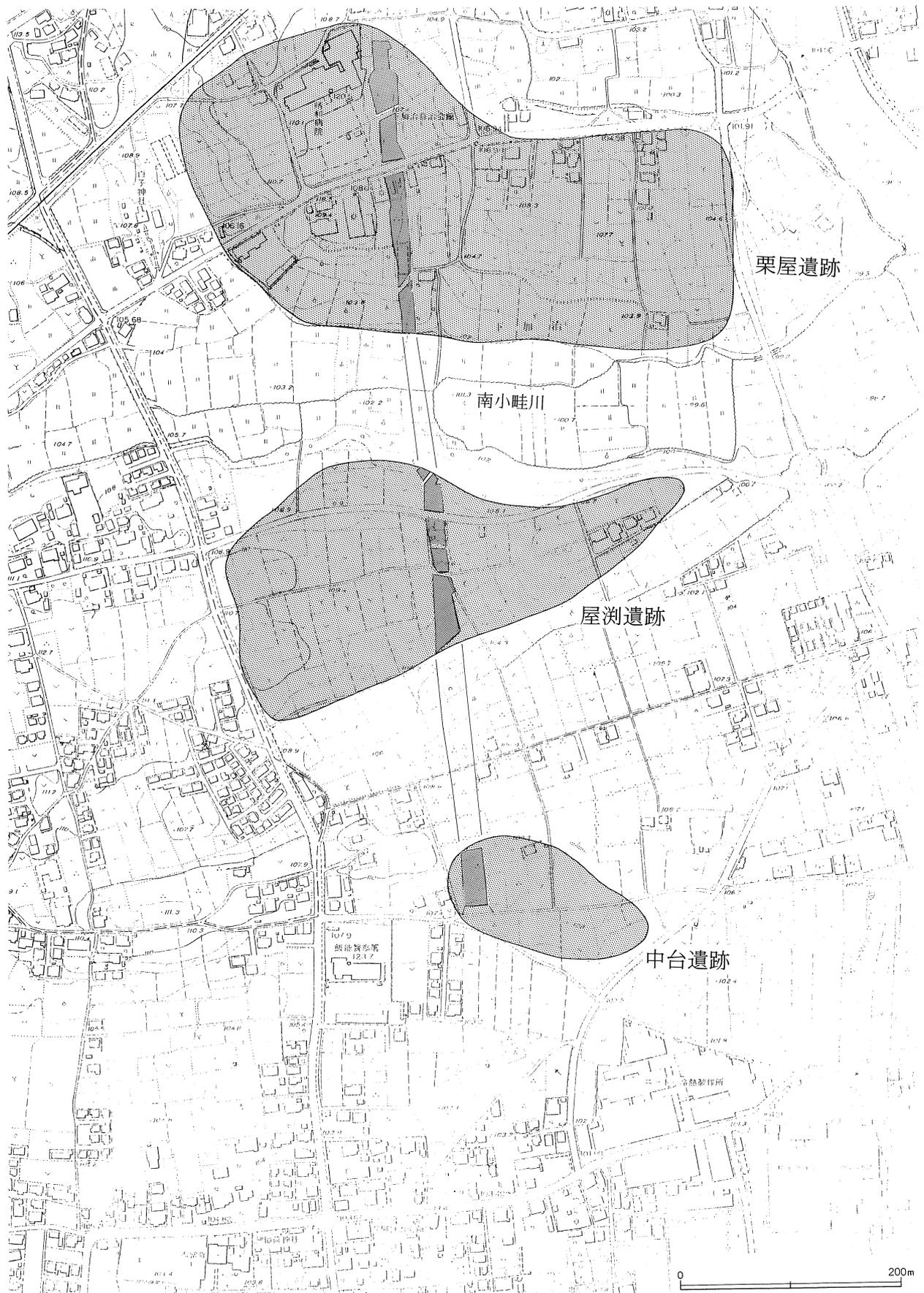
栗屋遺跡においては縄文時代中期後葉の土壌が見つまっている。飯能市による第3次、第4次調査において中期後葉の住居跡3軒と土壌群が見つまっている(富元他1991b 1992)。これらは今回調査区の西側にあたり、住居跡は標高の高い部分を中心に分布している。

南小畦川沿岸の台地上には先にふれたように、縄文時代中期の遺跡が密に分布しており、すでに報告がなされている遺跡も多い。縄文時代後期の遺物は今回の調査で少量が出土している。当期の遺物を出土した遺跡は多いが、当該地域において発掘された住居跡数は中期に比べ圧倒的に少なくなっている。

引用・参考文献

- 稲村坦元 1929 「入間郡高麗村発見の石器時代住居跡」『埼玉史談』1-1 埼玉郷土会
大護八郎 1957 「高麗小学校庭縦穴住居跡発掘報告」『埼玉史談』4-2 埼玉郷土会
城近憲市他 1972 『宮地遺跡 狭山市文化財調査報告Ⅰ』 狭山市教育委員会
小泉 功他 1979 『芦刈場遺跡』 飯能市教育委員会
仲島公夫 曾根原裕明 1984 『飯能市内遺跡発掘調査報告書1 飯能の遺跡(1)』 飯能市教育委員会
曾根原裕明 柳戸信吾 1985 『飯能市内遺跡発掘調査報告書2 飯能の遺跡(2)』 飯能市教育委員会
曾根原裕明 柳戸信吾 1986 『飯能市内遺跡発掘調査報告書3 飯能の遺跡(3)』 飯能市教育委員会
堀口万吉 1986 「埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史 別編3 自然』 埼玉県
曾根原裕明 柳戸信吾 1987 『飯能市内遺跡発掘調査報告書4 飯能の遺跡(6)』 飯能市教育委員会
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 『年報』11
中平 薫 1990 『稲荷』 日高町埋蔵文化財調査報告第15集
曾根原裕明 富元久美子 1991 『芋久保遺跡(第1・2次)発掘調査報告書 飯能の遺跡(11)』 飯能市教育委員会
富元久美子他 1991a 『池ノ東遺跡第1次調査 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書3』
富元久美子他 1991b 『栗屋遺跡第4次調査 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書5』
中平 薫他 1991 『若宮-第11次-東原-第3次-』 日高町埋蔵文化財調査報告第17集
曾根原裕明 富元久美子 1992 『飯能市内遺跡発掘調査報告書9 飯能の遺跡(12)』 飯能市教育委員会
富元久美子他 1992 『栗屋遺跡第3次調査 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書6』
中平 薫他 1992 『若宮 平谷』 日高町埋蔵文化財調査報告第18集
富元久美子他 1993a 『堂ノ根遺跡第1次調査 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書8』
富元久美子他 1993b 『株木遺跡(第1次)・旭原遺跡(第1次)発掘調査報告書 飯能の遺跡(15)』 飯能市教育委員会
富元久美子他 1994 『加能里遺跡第6次調査 飯能市遺跡調査会発掘調査報告書10』 飯能市遺跡調査会
田中英司 黒坂禎二 1995 『向山/上原/向原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
栗岡 潤 西井幸雄 1995 『西久保/金井上』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集

第3図 遺跡位置図



III 栗屋遺跡

1 概略

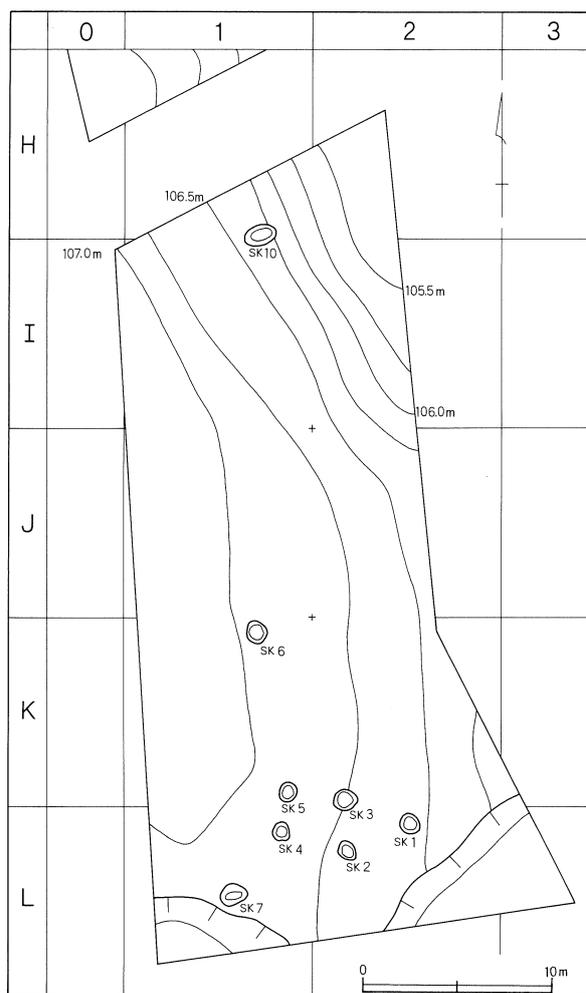
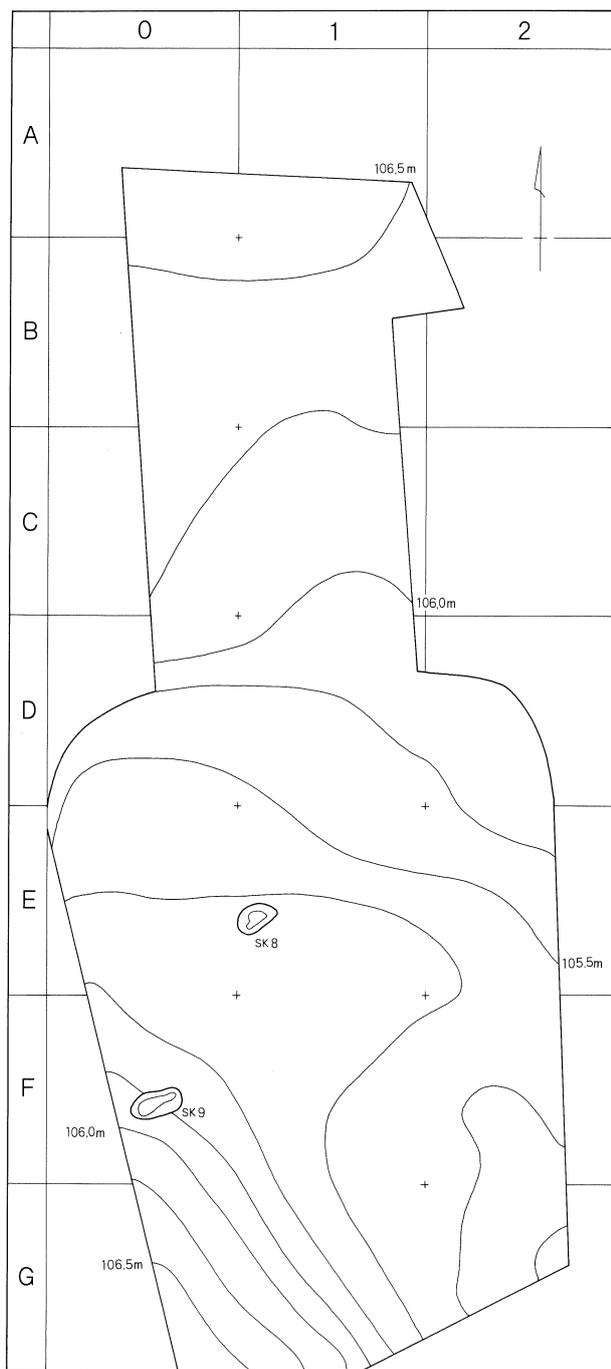
栗屋遺跡は今回調査を実施した遺跡の中で最も北に位置しており、高麗丘陵南方直下の台地上に位置している。ローム面の標高は102m～106mである。

調査区は長さ約270m、幅約20mの範囲で南北方向

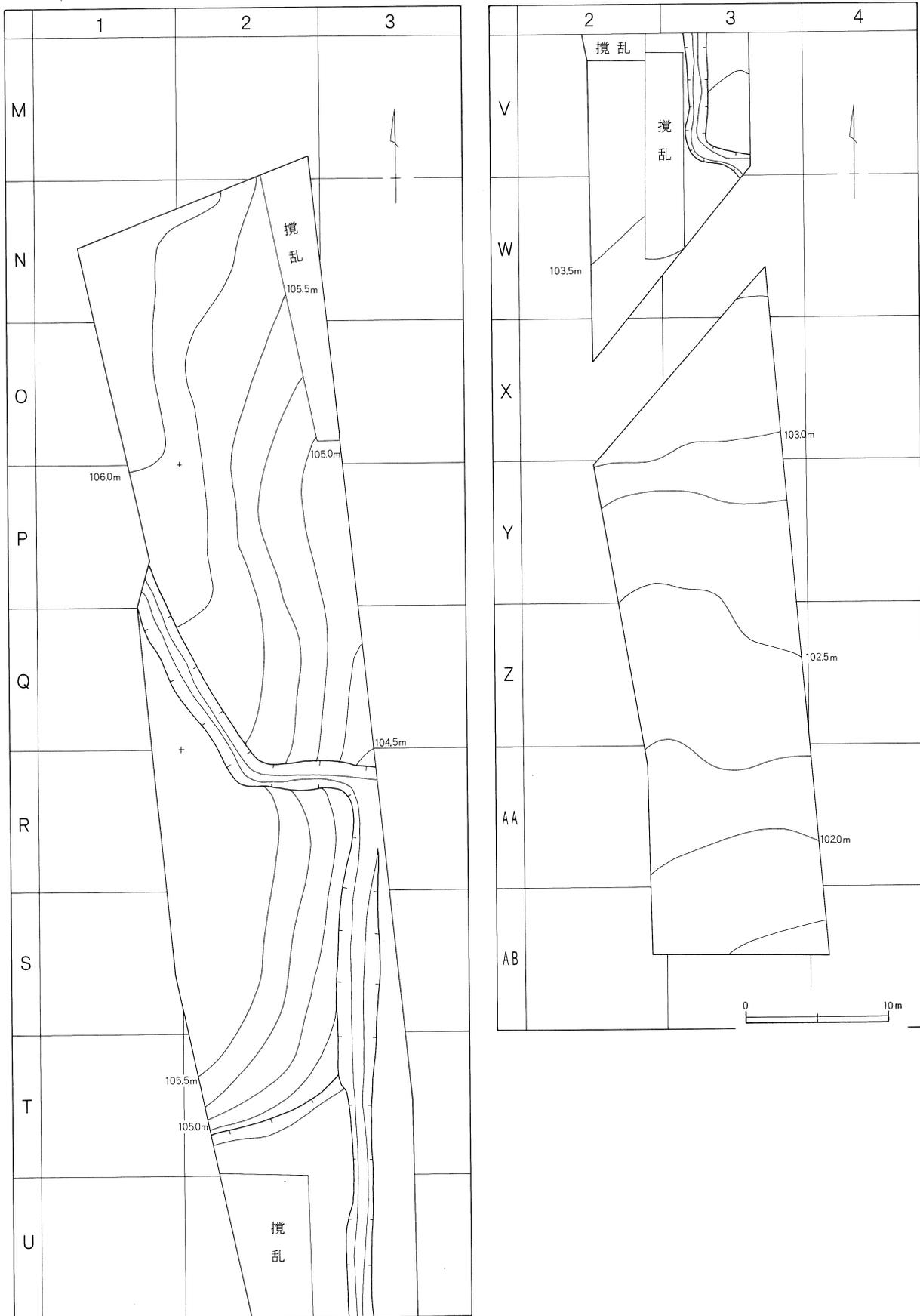
に細長く遺跡内に延びている。

グリッドのM列には東西に県道が走っており、これを境に地形上、北半（第4図）と南半（第5図）に大別できる。

第4図 遺構全体図（1）



第5図 遺構全体図(2)



北半は起伏に富んだ地形で、全体として東方向へ傾斜した斜面である。最も標高の高いJ1グリッドで106.5m、標高の低いH2グリッド付近との標高差は1.5mである。E列以北は徐々に標高が上がっている。

遺構は縄文時代中期の土壙10基がK～L列の斜面部分において見つかった。攪乱が顕著であり、L列の落ち込みは近年の所産である。

調査区北半の隣接地において飯能市教育委員会による調査が行われている。飯能市第3次・第4次調査区

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

土壙 (第6図)

土壙10基が見つかった。これらは調査区内、北半のE列からL列において見つかり、特にL列にまとまっている。確認面であるローム面は攪乱が顕著であり、ソフトロームの遺存状況は不良である。このため土壙の深度は浅い。土器の出土がないものもあるが、覆土の共通性からいずれも中期後葉の加曾利E式期の所産と考えられる。

第1号土壙はL2グリッドに位置する。平面は楕円形である。長径×短径×深さは1.1×0.9×0.1mである。主軸方向はN-30°-Wである。出土遺物は土器片1点である(第7図1)。

第2号土壙はL2グリッドに位置する。径0.9mの円形である。深さは0.3mである。出土遺物はなかった。

第3号土壙はK2、L2グリッドに位置する。径1.1mの円形である。深さは0.2mである。出土遺物はなかった。

第4号土壙はL1グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径×短径×深さは0.9×0.8×0.3m。出土遺物はなかった。

第5号土壙はK1グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径×短径×深さは1.0×0.9×0.2m。出土遺物はなかった。

第6号土壙はK1グリッドに位置する。平面形は楕

円形である。長径×短径×深さは1.1×0.9×0.2m、主軸方向はN-30°-Wである。遺物は、土器片が少量出土した(第7図2)。

調査区の南半は南小畦川に面した斜面地であり、近世以降の溝が見つかったほかは遺構の検出はなかった。

第7号土壙はL1グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径×短径×深さは1.4×1.1×0.3mである。主軸方向はN-90°-Wである。出土遺物はなかった。

第8号土壙はE1グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径×短径×深さは2.3×1.3×0.4mである。主軸方向はN-60°-Eである。遺物は土器片数点が出土した(第7図3～5)。

第9号土壙はF0グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径×短径×深さは3.0×1.3×0.3mである。主軸方向はN-57°-Eである。遺物は、土器片十数点が出土した(第7図6～8)。また打製石斧1点が出土している(第7図9)。

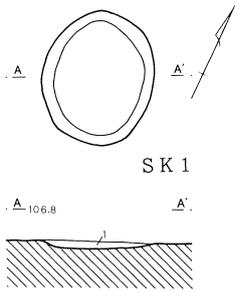
第10号土壙はH1、I1グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径×短径×深さは1.6×1.2×0.3mである。主軸方向はN-90°-Wである。遺物は土器片が数点が出土している(第7図10～13)。

土壙出土遺物 (第7図)

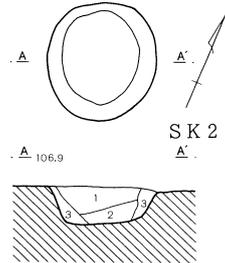
1～8・10～13は深鉢形土器の破片である。いずれも加曾利E式土器である。

1は条線文を施す。2は連弧文系の土器であろう。口縁部近くの破片で撚糸文が施されている。3は口縁部に円文を施す土器で、単節LRが施されている。4

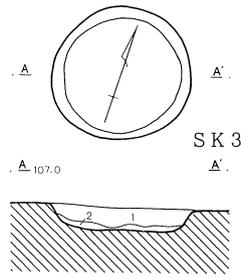
第6図 土壌



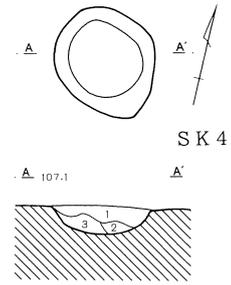
- SK 1
A 106.8 A'
- 1 黒褐色土
焼土、ロームの微細粒を少量含む。
 - 2 黒褐色土
ローム粒子をやや多く含む。



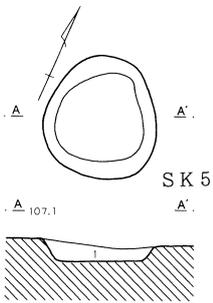
- SK 2
A 106.9 A'
- 1 暗褐色土
ローム細粒を含む。
 - 2 暗褐色土
ローム細粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土
ローム細粒をやや多く含む。



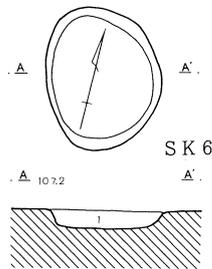
- SK 3
A 107.0 A'
- 1 黒褐色土
ローム粒子を多く含む。焼土炭化物細粒を少量含む
 - 2 黄褐色土
ロームブロックを多く含む。



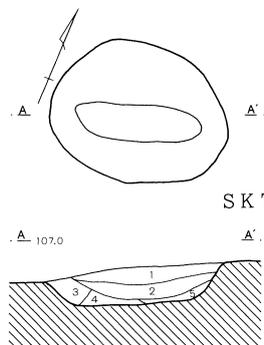
- SK 4
A 107.1 A'
- 1 黒褐色土
ローム粒子を含む。焼土炭化物粒子を少量含む
 - 2 黒褐色土
ローム粒子を少量含む。
 - 3 黒褐色土
ローム粒子を多く含む。



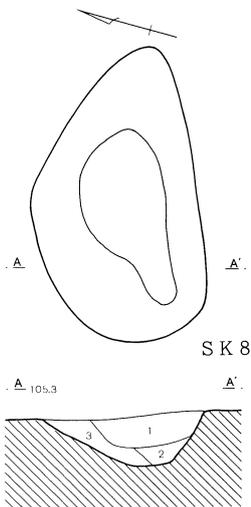
- SK 5
A 107.1 A'
- 1 黄褐色土
ローム粒子をきわめて多く含む。



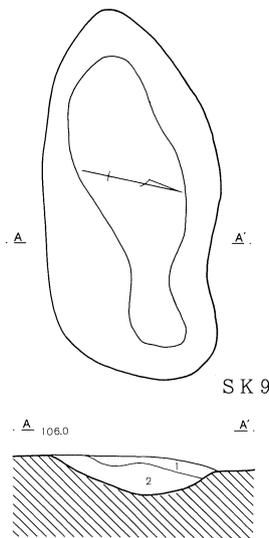
- SK 6
A 107.2 A'
- 1 黒褐色土
ローム細粒を多く含む。微量の焼土粒子、炭化物粒子を含む。



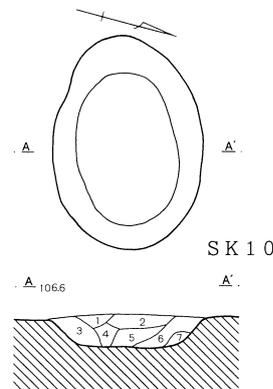
- SK 7
A 107.0 A'
- 1 黒褐色土
ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
 - 2 黒灰色土
ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
 - 3 黒褐色土
ロームブロックを多く含む。
 - 4 黄褐色土
ロームブロックを多量に含む。
 - 5 暗褐色土
ローム粒子を少量含む。



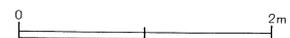
- SK 8
A 105.3 A'
- 1 褐灰色土
 - 2 褐色土
ローム粒子を少量含む。
 - 3 暗褐色土
ロームブロックをやや多く含む。



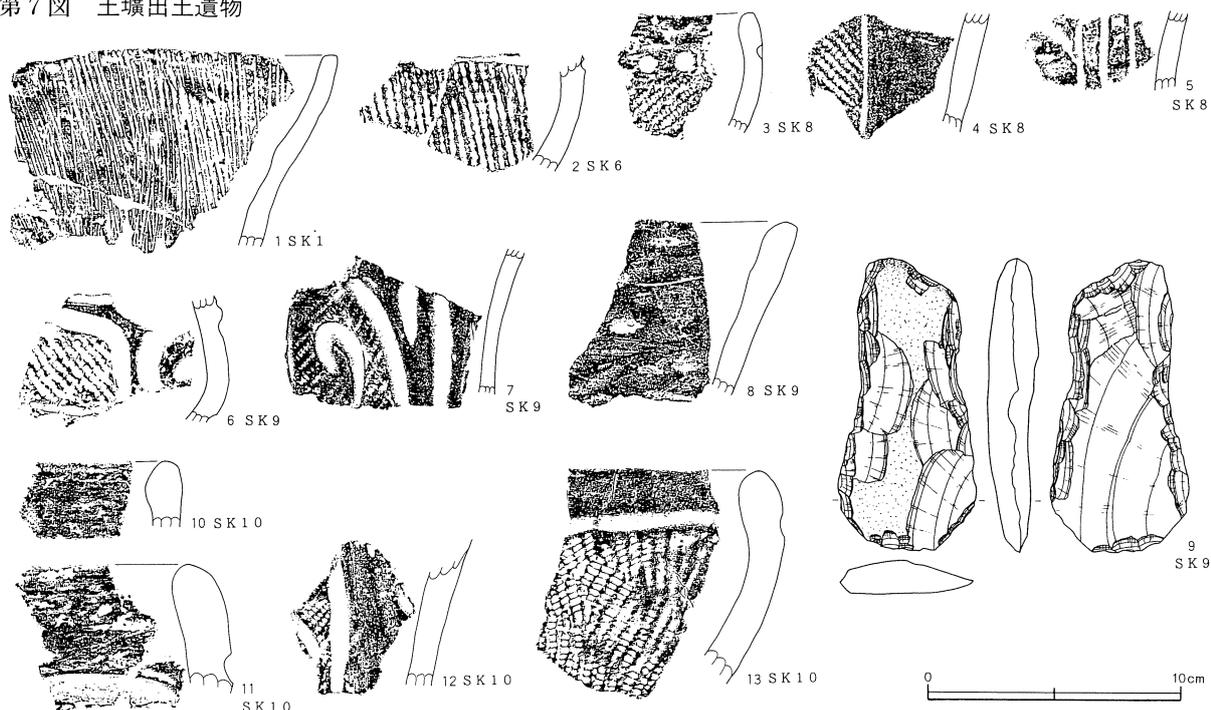
- SK 9
A 106.0 A'
- 1 灰褐色土
ロームブロックを少量含む。
 - 2 黒灰色土
ローム粒子、ロームブロックを少量含む。



- SK 10
A 106.6 A'
- 1 黄灰色土
ロームブロックを多く含む。
 - 2 褐灰色土
ロームブロックを少量含む。
 - 3 明灰色土
ロームブロックを多く含む。
 - 4 黄褐色土
ロームブロックを多く含む。
 - 5 灰褐色土
ロームブロックを含む。
 - 6 黒灰色土
ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
 - 7 黄褐色土
ロームブロックを多く含む。



第7図 土壌出土遺物



は磨消縄文の胴部破片、無節Lが施されている。5は沈線文が施された胴部の破片である。6はキャリパー形深鉢形土器の口辺部である。単節LRを施す。7はキャリパー形深鉢形土器の胴部破片である。磨消縄文と鉤の手状の沈線文を施す。単節LRを施す。8は外反気味に口縁部が開く形態の土器である。10、11はキャリパー形深鉢形土器の口縁部破片である。12は胴部の破片で磨消縄文を施す。縄文は単節RLである。13は口縁部に沈線が巡り、沈線以下に縄文を施す。単節RLである。

9は打製石斧である。弱い抉りの入った撥形である。正面に自然面を残し、背面に打割面を大きく残している。刃部は円形である。完形品。

(2) 遺構外出土遺物

土器 (第8図、第9図)

第8図、第9図に示した。いずれも加曾利E式土器である。加曾利EⅢ式を主体とする。

第8図は口縁部の破片を中心とした。

1は口唇部が開く形態の深鉢形土器で、全面に縄文を施す土器である。縄文は単節RLを縦位に施文する。

2～12は口縁部文様帯をもつキャリパー形深鉢形

土器の口縁部の破片である。2は渦巻状の隆帯文を施す。4～7は沈線文と縄文が認められる。3、5はLR、4、6、7はRLを施す。9、11、12は沈線文、10は隆帯を施す。

13は口縁部が外傾する形態の鉢形土器であろう。括れ部の下位に沈線文と撚糸文を施す。14は外傾する無文の口縁部をもつ土器である。単節RLを施す。

15は外傾する無文の口縁部である。両耳壺であろう。16、17は無文の鉢形土器である。内湾気味に立ち上がる形態のものである。

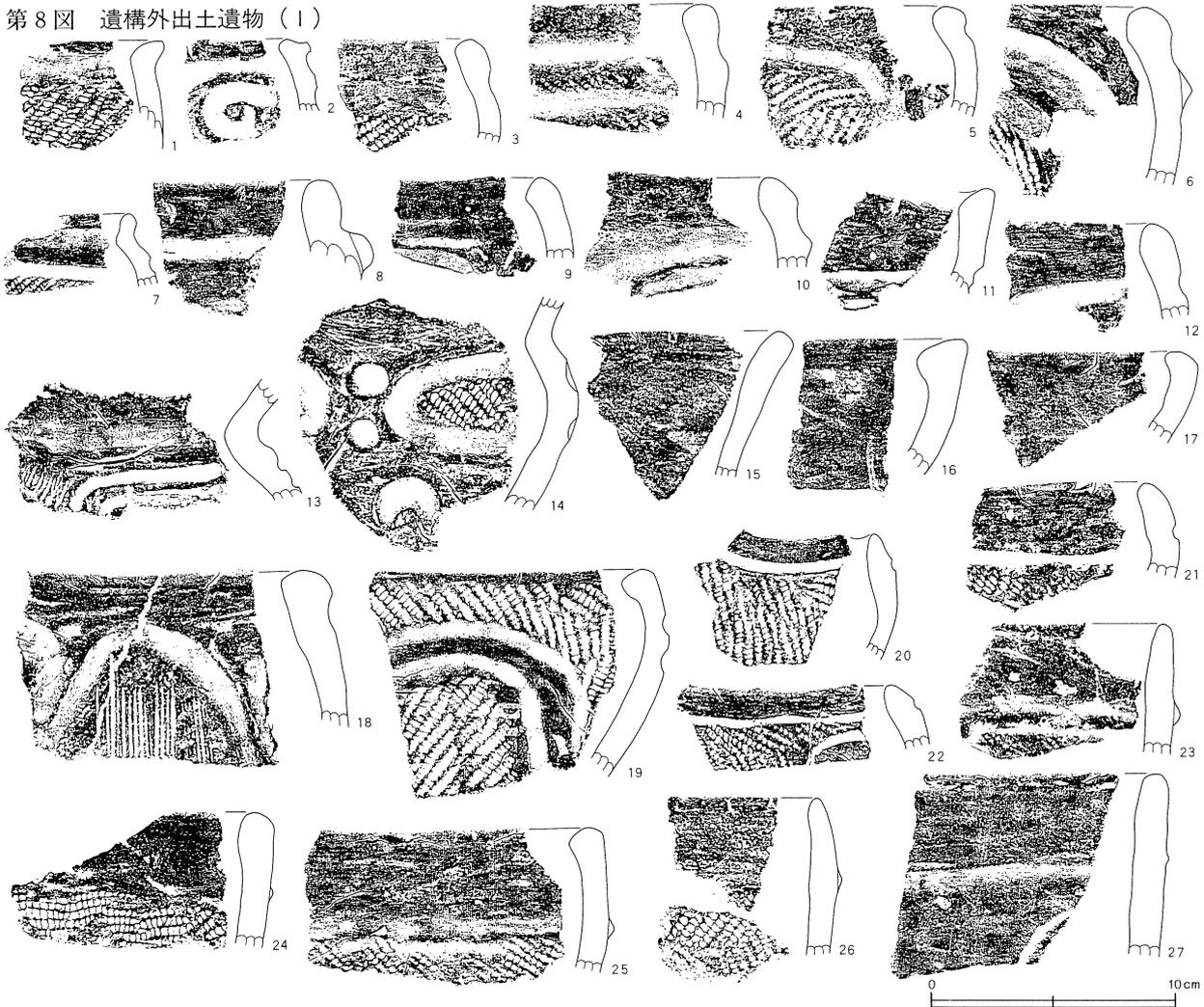
18～21は口縁部がやや内湾し、中位で括れ、胴部が緩く張る形態の深鉢形土器である。

18、19は波状沈線区画文を施す土器である。18は条線文、19は単節RLを施す。

20～21は沈線文を巡らせ、口縁部の無文部と縄文施文部を画している。22には懸垂文が認められる。20、22は単節RL、21は単節LRを施す。

23～27は口縁部が直立気味に立ち上がる単純な形態の深鉢形土器である。いずれも口縁部に微隆帯を巡らせている。23～26は微隆帯の下位に縄文を施文している。24、25は単節RL、26はLRを施す。27は沈線

第8図 遺構外出土遺物(1)



文が施される。

第8図は1、2が古く、27が新しい可能性があるが、それ以外はおおむね加曾利EⅢ式に比定されるところと思われる。

第9図には胴部の破片をまとめた。

第9図1～3はキャリパー形深鉢形土器の胴部破片で地文縄文上に蛇行する隆帯を垂下させるものである。1は撚糸文と単節RLを施す。2は単節LR、3はRLを施す。

4、5は深鉢形土器の胴部破片で地文縄文上に蛇行沈線を垂下させる。4はLの撚糸文、5は単節RLを施す。

6は縦位に隆帯文が垂下する。

7、8はキャリパー形深鉢形土器の口辺部近くの破

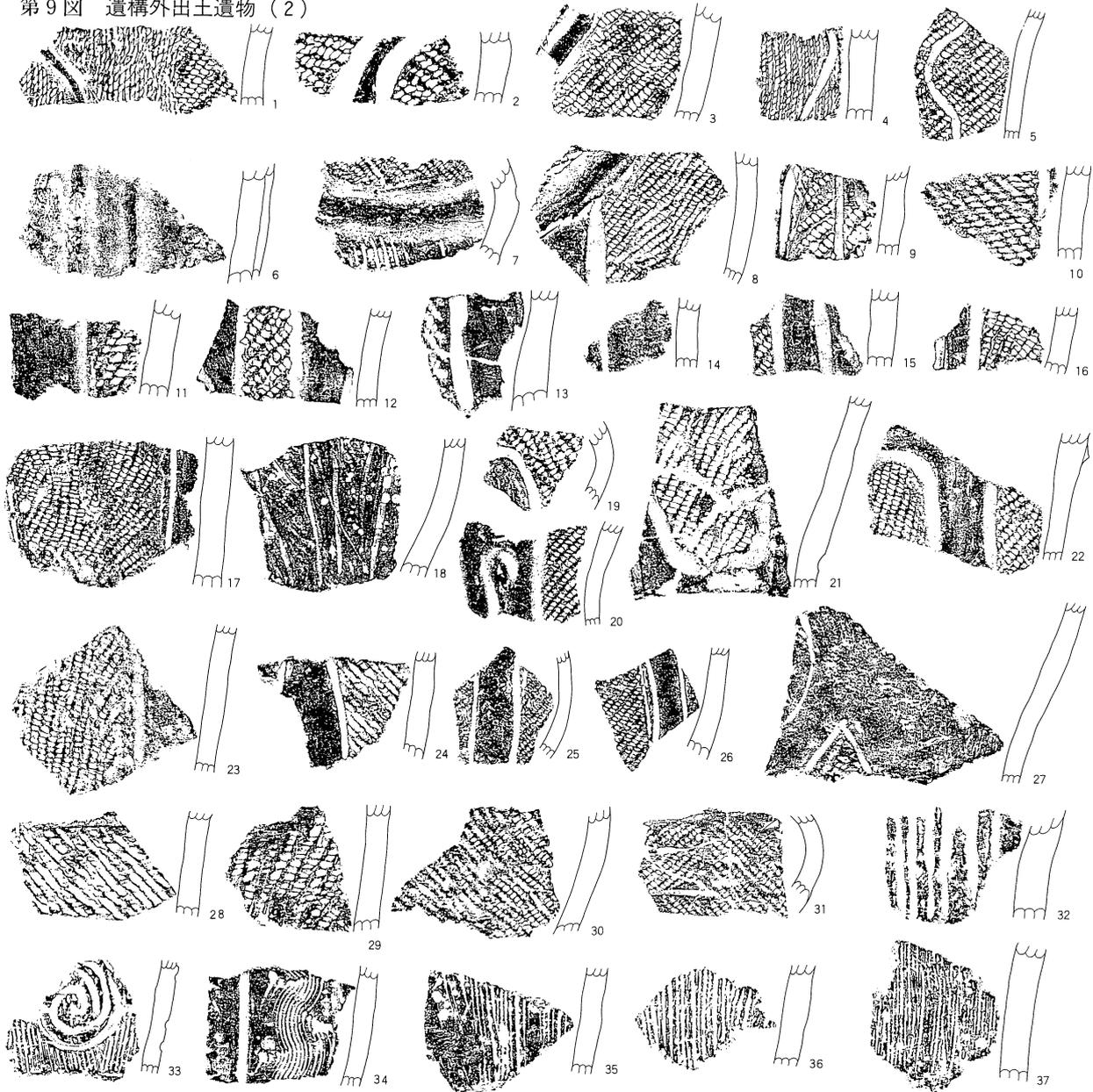
片である。7は口縁部にRLの縄文、胴部に条線文を施す。8は胴部に磨消縄文帯を垂下させる。縄文は単節RLである。

9、10は縄文と沈線文を垂下させた胴部破片である。9は単節RL、10はLRを施す。

11～27は胴部に磨消縄文を施す土器である。11～18は磨消縄文帯を垂下させている。11、12、15～17は単節RLを施す。18は無節Lを施す。19～22は「U」状の沈線文や鉤の手状の沈線文を施す。単節RLを施す。23は単純な形態の土器であろう。単節RLを施す。24～26はやや薄手のつくりである。24は無節L、25、26は単節RLを施す。27は沈線区画を施す。単節RLを施す。

28～31は縄文のみが認められる破片である。28は無

第9図 遺構外出土遺物(2)



0 10cm

節L、29、30は単節RL、31は単節RL、無節Lを施す。

32は沈線文、33~37は条線文を垂下させる土器である。33は渦巻状の沈線文を施す。

石器 (第10図)

1は石鏃である。基部に抉りを施す。

2はミニチュアの磨製石斧である。刃部が欠損し、背面の大部分が剥落している。磨研による線状痕は比較的明瞭で、正面には磨きによって生じた稜線が認められる。

3、4は撥形の打製石斧である。3は両面の一部に自然面を残している。背面には打割面を大きく残す。刃部はやや丸みを帯びている。4は基部を欠損している。刃部は直線的である。背面には打割面を大きく残す。

5は短冊形の打製石斧である。刃部はやや丸みを帯びている。正面に自然面、背面に打割面を大きく残している。

6は磨石である。楕円形である。両面中央部に窪みをもつ。

第10図 遺構外出土遺物（3）



第1表 石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	石質	備考
第7図9	SK 9	打製石斧	11.5	5.4	2.0	150.67	砂岩	
第10図1	I 2	石鏃	1.7	1.6	0.25	0.6	チャート	
2	L 1	磨製石斧	3.5	1.5	0.45	3.64	粘板岩	
3	F 2	打製石斧	9.3	5.3	2.0	124.24	ホルンフェルス	
4	L 1	打製石斧	8.1	5.7	2.7	126.21	ホルンフェルス	
5	表採	打製石斧	11.0	6.4	1.5	153.05	砂岩	
6	表採	磨石	9.4	7.0	3.3	419.21	砂岩	

IV 屋淵遺跡

1 概略

今回の発掘区は南小畦川に沿って東西方向に長く延びている台地を南北に縦断するものであった。グリッドのうち、F～I列付近が台地の頂部に当たる部分である。この部分については精査を行ったが遺構は確認されなかった。A～E列は、栗屋遺跡とを隔てている南小畦川の谷に続く斜面をなし、反対N列以南は中台遺跡とを隔てる谷に続く斜面部分になっている（第27

図）。

検出された遺構は先土器時代の石器集中1箇所と時期不詳の土壇13基である。

先土器時代の石器集中は発掘区南部の斜面近く、勾配の緩やかな部分に位置する。L3、M3・4グリッドに当たり、東側の発掘区外に延びるものと思われる。

2 先土器時代の遺構と遺物

(1) 概要

石器集中1は、L3・M3グリッドに位置する。この地点は、南東方向にごく緩く傾斜する斜面部で（第27図）、遺物はI層（ソフトローム層）から出土している。遺物分布は、調査区の東側限界域に拡がっており、調査区外に延びるものと思われる。

調査区は、耕作機械による攪乱が、ローム層深くまで、南西から北東方向に縞状に入っており、石器集中の遺存状況は良好とは言えない。調査時には、攪乱中の遺物についても番号を付して取り上げたが、遺跡の理解に誤認を招く恐れがあるので、整理の段階で遺物

分布図からは取り除くこととし、石器観察表の備考欄に攪乱出土と明記した。しかし、攪乱中出土の石器も、基本的に本石器集中に帰属する可能性が高いため、遺物図版で分けることはせず、合わせて報告している。

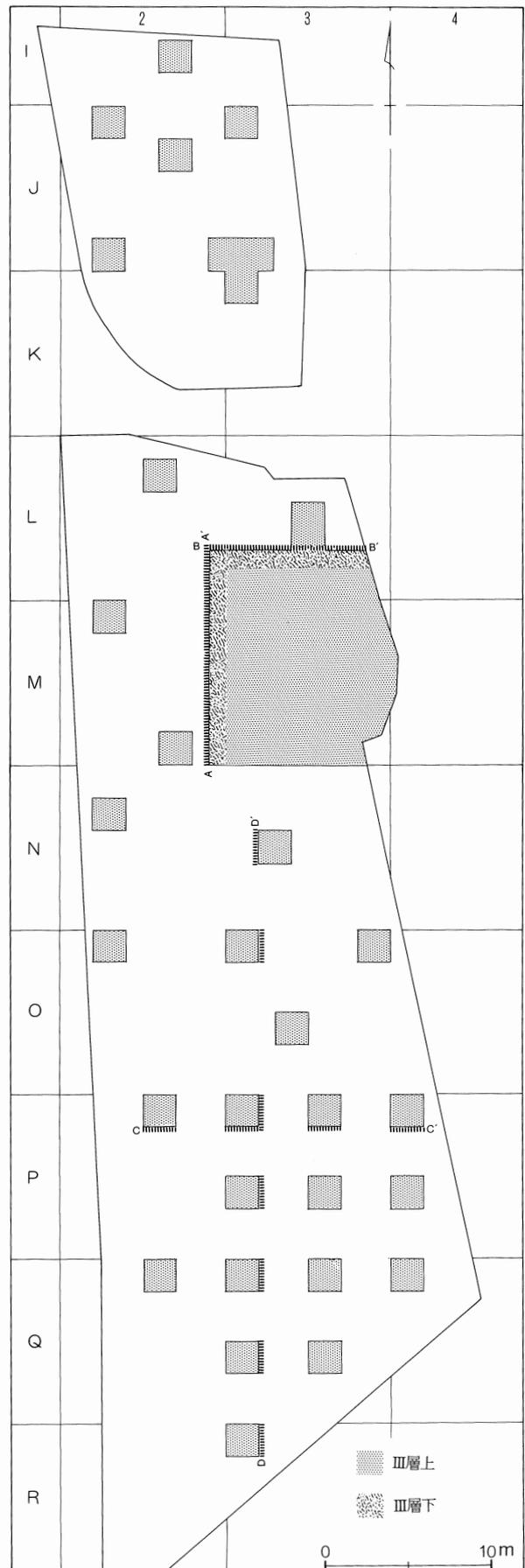
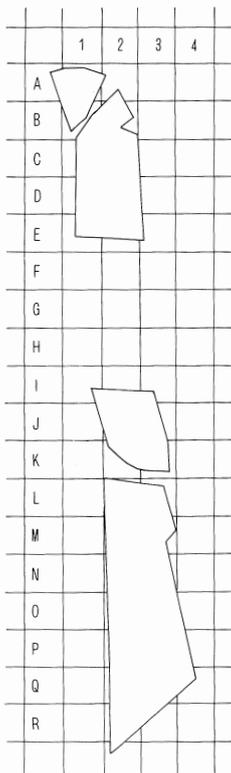
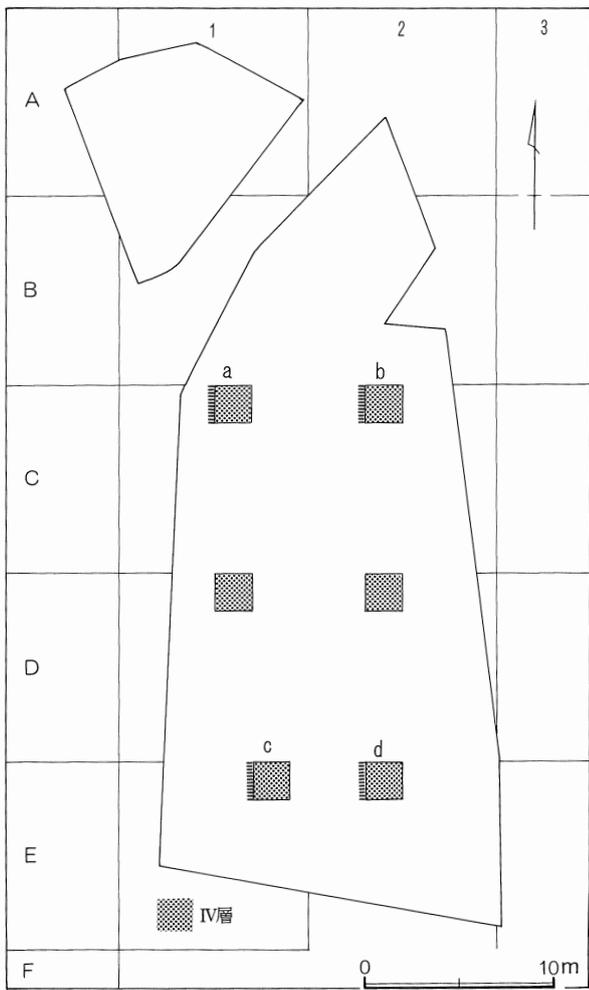
出土石器はナイフ形石器（11点）が主体を占め、石核（2点）と剥片・碎片の単純な組成を示している。石材はチャートを主体に、ガラス質黒色安山岩・頁岩・珪質頁岩が若干含まれている。

石器集中に重複して、礫が多数出土しているが、小礫がほとんどで、礫群を形成する状況ではない。耕作の際に紛れ込んだようにも思えるが、焼け礫が小數で

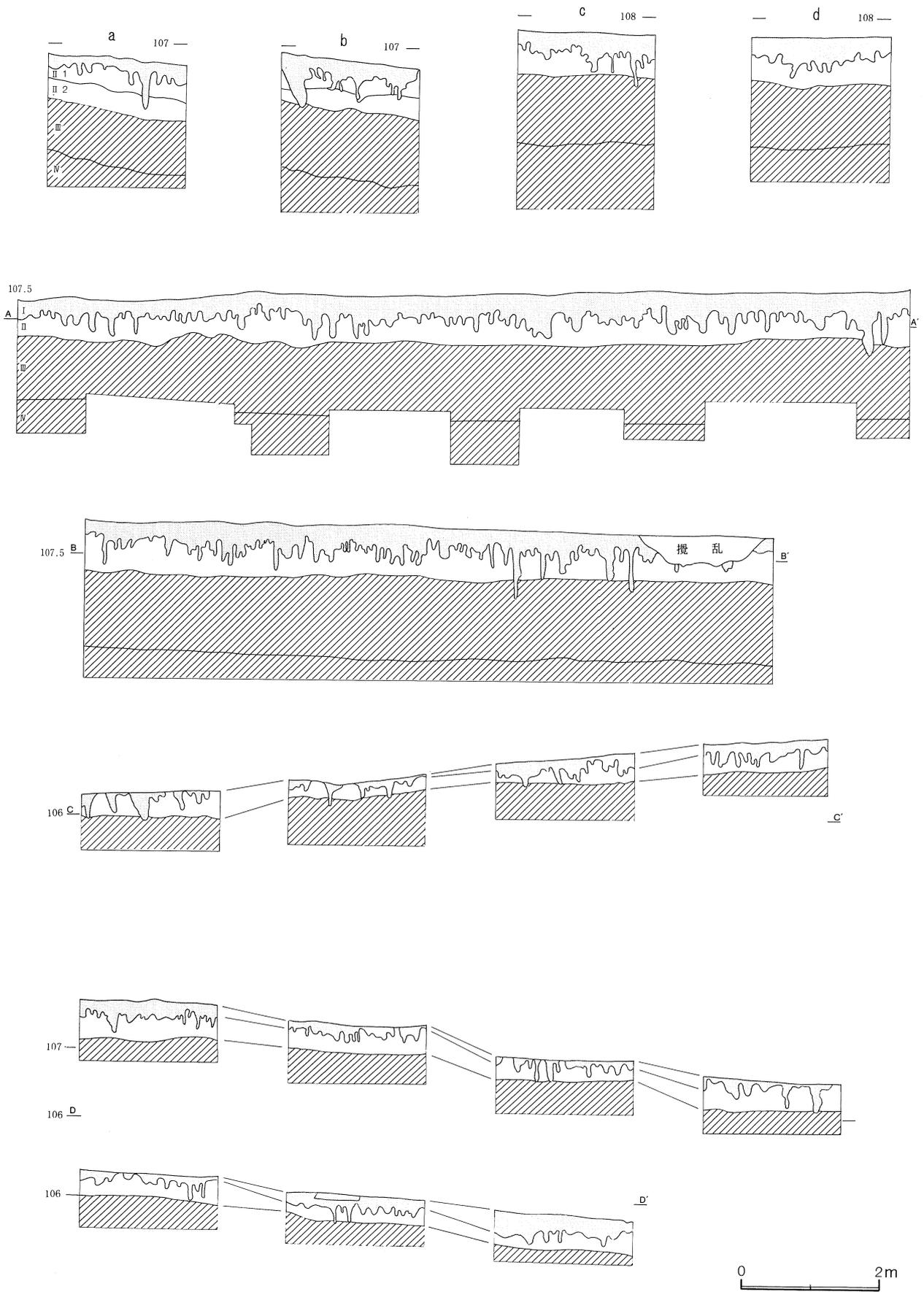
第2表 器種・石材組成

母岩	ナイフ形石器	石核	剥片	碎片	合計
チャート1	2	1	30	67	100
チャート2		1	10	6	17
チャート3	1		3		4
チャート4			2		2
チャート5	1				1
チャート6	1				1
チャート7	1				1
チャート8			3	9	12
頁岩 1	2		3		5
頁岩 2	1				1
安山岩 1	2		2	2	6
安山岩 2				1	1
珪質頁岩	1				1
珪岩				1	1
合計	12	2	53	86	153

第11図 先土器時代の調査



第12图 土层断面图



はあるが混じっており、現時点では、石器集中の形成時に何等かの要因で入ってきたものと考えておく。

また、J 3グリッドの南西隅からナイフ形石器が1点出土した。出土層位はI層のソフトローム中であつた。周辺及び下層に拡張したが、他に石器の出土はなかった。

(2) 層位 (第12図)

屋測遺跡のローム基本層序はI層からIV層に分かれる。内容は以下のとおりである。

I層(10YR5/6)。黄褐色のソフトローム層である。径1mm以下の赤色、黒色スコリアを含んでいる。

II層(10YR4/6)。II層以下はハードロームである。II層は褐色土である。II層は径0.5mmの白色粒子を含んでいる。またI層と同様に径1mm以下の赤色、黒色スコリアを含んでいる。

III層(10YR4/4)。黒色スコリアを少量含む。赤色スコリアを含んでいる。赤色スコリアは下部にやや多く、径7mm程度のものから1mm以下のものも含んでいる。上部には径2mm程度のものを少量含んでいる。

IV層(10YR3/4)。III層と色調は大差がないが、粘性に富み、なめらかである。

なお、隣の中台遺跡においては色調により、II層とIII層が細別し得たが、当遺跡においては不明瞭であり、層位としては記録しえなかった。しかし部分的にはIII層上部がやや暗い傾向が認められた。こうした部分においてはIII層上部の上下をなすII層下部とIII層下部がそれぞれ、II層上部、IV層へと暫時的に推移するのが観察された。

なお調査区北側の一部においてはII層が細分し得た。II 1層は上記のII層と同様な含有物、色調であり、II 2層はII層の含有物に加えて、III層の暗褐色土ロームのブロックを含んでいた(第12図 a・b)。II層とIII層の漸位層的な性格をもつものである。

遺物の出土層位はI層である。

(3) 石器集中1 (第13図)

石器集中1は、M3グリッドを中心に、L3グリッドにかけて位置する。遺物は南北約10m、東西約7mの広い範囲に分布し、特にM3・L3グリッドの境にある径約2mの範囲と、それから南東側に帯状に延びる部分は遺物が密集している。剥片類はこの範囲に纏まる傾向が強く、一方、ナイフ形石器はこの密集部を取り囲むように分布する傾向が窺える。

各遺物の分布を見ると、北東部にナイフ形石器(L3-24・M3-313・315) 3点が、あたかもそこに置いたかのように出土している(図版6)。ナイフ形石器の形状は二側縁加工の整ったもので、313と315は大きさもほぼ同じである。また、南東側でナイフ形石器(M3-126)と石核(M3-127)が、中央西側でナイフ形石器(M3-81)と石核(M3-80)が近接して出土している。これらの組み合わせと母岩関係は一致しておらず、完成したToolどうしが各々に纏まっていることになる。

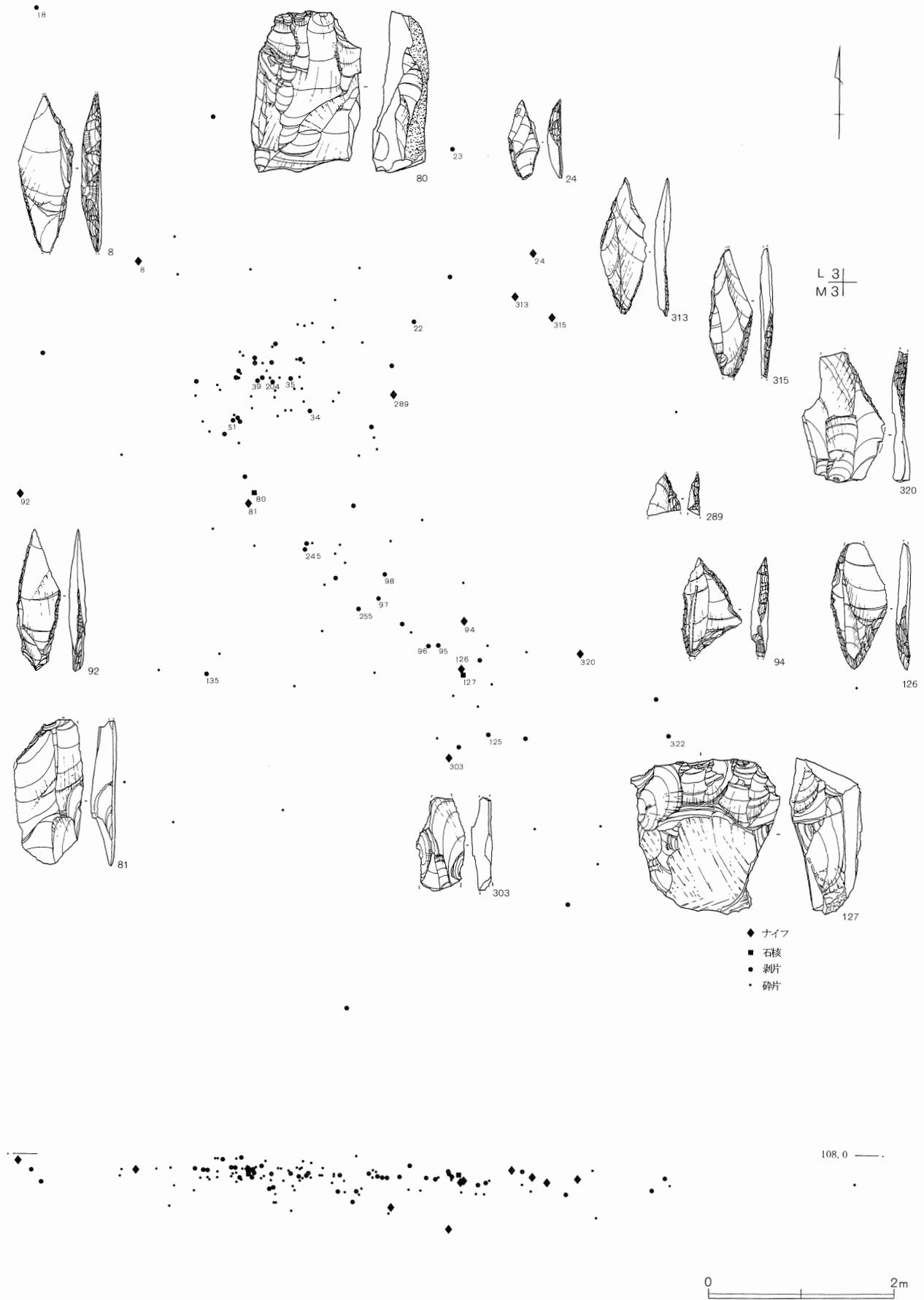
接合関係は密集部内で見られ、それぞれ近接しているものが多い。

石核(M3-80)に剥片(M3-222)と碎片(M3-48)の接合例は、剥片と碎片がともに攪乱からの検出で接合距離等は明かでない。剥片(M3-35)と剥片(M3-22)、剥片(M3-39)と剥片(M3-204)は密集部内の接合で、特に後者は近接して出土した剥片どうしの接合である。剥片(M3-69)は上下両端を欠損しており、剥片(M3-97)は小形不整形である。出土地点は帯状に延びる範囲である。

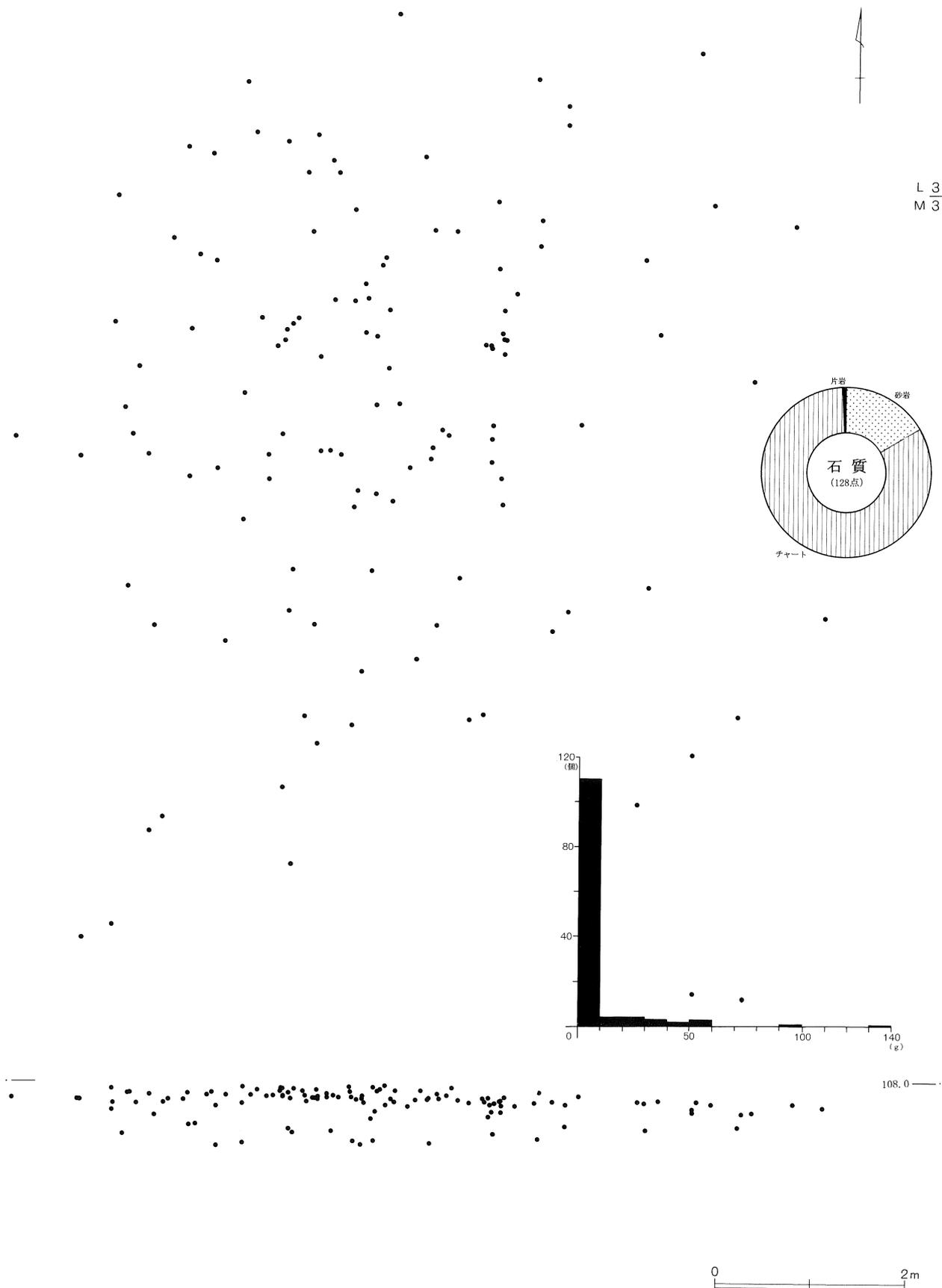
(4) 礫

石器集中1と重複する範囲から、礫が128点検出された。礫の分布は散漫で、石器集中のような密集部は見られず、礫群とするには躊躇する。礫の形状は小形で、ほとんどが小砂利状の円礫である。耕作(攪乱)などによる後世の紛れ込みの可能性もあるが、検出面が石器と同じである点、若干ではあるが赤化した礫片が混じっている点などから、該期における何等かの行為によって残された礫と考えられる。

第13図 石器集中 I



第14図 礫の分布



礫の石材は、チャートが106点と多く、他は砂岩21点と片岩1点である。

大きさは、10g以下が110点と圧倒的で、以下60gまで僅かに見られ、それ以上は90g大と130g大のものが1点ある。

(5) 出土石器

本遺跡から出土した石器の総数は151点である。器種の内訳は、ナイフ形石器11点、剥片53点、碎片85点、石核2点と石器組成は単純である。しかし、1箇所の石器集中から、ナイフ形石器11点が出土したのは、製品の占める割合が非常に高いと言える。

石器石材は、チャートが137点と全体の9割を占め、8つの母岩に分けられた。他は、頁岩、ガラス質黒色安山岩、珪岩等が見られ、それぞれナイフ形石器が検出されている。

ナイフ形石器 (第15図)

L3-8：珪質頁岩の単独資料である。長さ5.65cmと現存の状態では本遺跡で最も大形のナイフ形石器となる。

外形は平行四辺形で、刃部は左刃である。素材はやや右に傾く上位方向からの縦長剥片を用いている。先端角は48.5°、側刃角は146.5°である。横断面形は背縁が直角に立ち上がる三角形を呈し、他のナイフ形石器と比べ厚手である。

表面の剥離面は、主要剥離面とほぼ同一方向と、90°異方向の剥離面が見られる。

背縁の調整加工は、基端から先端まで比較的粗い急角度の剥離を施した後に、先端と基端付近は微細な剥離で、裏面側縁を抉るようにして、鋸歯状の部分を滑らかラインに修正している。特に先端付近の外形は、微細な調整加工が施される部分で基端からのラインが屈折し、直線的に仕上げられている。また、基部中央から下半部にかけて、正面→裏面方向の剥離が見られる。

側刃縁は背縁に比べ、微細な剥離が施されるのみで、素材剥片の末端のラインを大きく変るものではない。

刃縁は直線的で、長さが器長の半分未満と、他のものと比べ若干短めである。

M3-315：母岩はチャート3である。先端と基端を若干欠損するが、形状の把握には支障がない。

外形は背縁が直線的で三角形・やや崩れた平行四辺形状をしている。刃部は右刃で、刃縁は僅かに内湾しており、長さ2.5cmで器長の約半分とバランスがとれている。

素材は上位からの縦長剥片を用いており、先端角は33°、側刃角は151°を測る。正面は主要剥離面とほぼ同一方向の剥離面3枚によって構成され、稜線が器軸に対し斜め方向（刃縁と平行）に2本並んでいる。

背縁の調整加工は、基端から基部中央まで比較的細かい剥離が裏面→正面に規則的に施されている。先端側上半部は、やや粗い剥離が裏面→正面・正面→裏面方向に器厚いっぱい施され、後に微細な剥離が見られる。

側刃縁の調整加工は、背縁下半部と同様に規則的で細かい剥離が施されている。基端は欠損しているが、両側縁の調整加工から、M3-313同様に尖ると思われる。

M3-313：母岩はチャート5の単独資料である。

外形は左右対称の平行四辺形状をしている。刃部は右刃で、刃縁は内側に僅かに“く”字状に屈曲しており、刃縁の長さは器長に比べて短い。刃部と側刃縁の間に、素材剥片の末端をそのまま残している部分がある。先端角は42.5°、側刃角は刃部と側刃縁のラインを延長して計測すると138.5°である。

正面の剥離面は、主要剥離面と同一方向からの2枚の剥離面が中程で接し、1本の稜線が中央やや左寄りに器軸に平行して入っている。横断面形は、先端付近は背縁が直角に立ち上がる厚手の三角形、基部中央は中央に交点がある薄手の三角形をしている。

背縁の調整加工は上半部と基端付近に分かれ、上半部は、先端付近に裏面→正面・正面の剥離面が交わり、厚くなる部分に正面→裏面方向の剥離が器厚いばいに施されている。

基端付近と側刃縁の調整加工は、細かな剥離が連続しており、基端部は尖がっている。

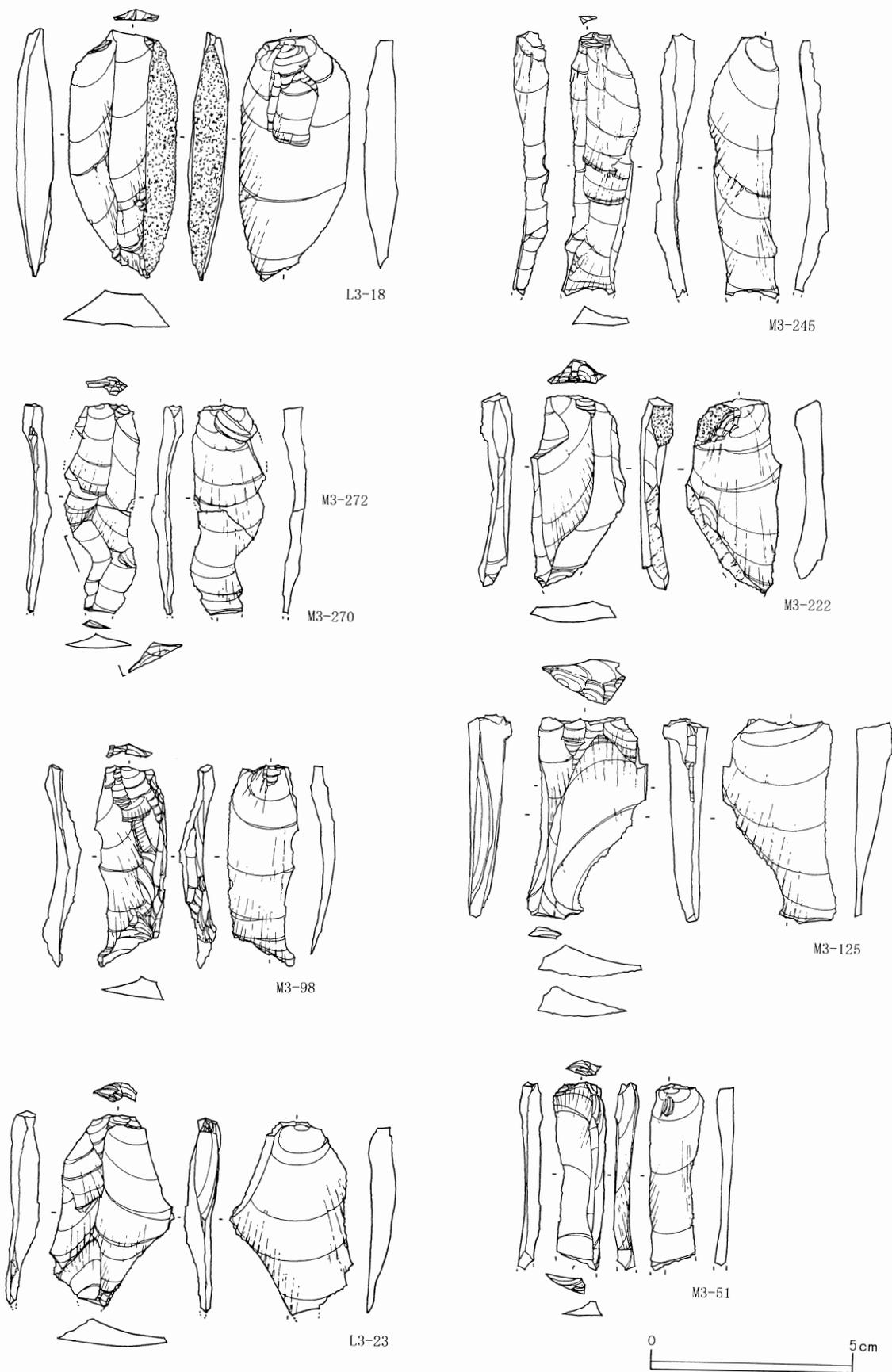
M3-126：母岩は頁岩1である。先端部欠損するが全体の形状は把握できる。

外形は三角形をしている。他の資料と比べ外形線が

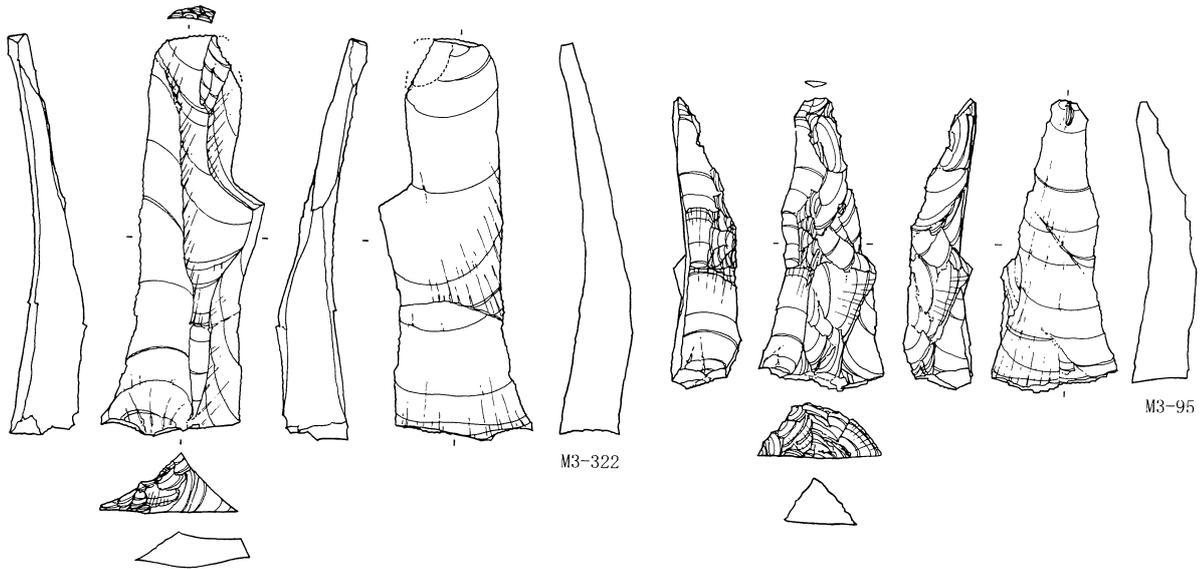
第15図 出土石器(1)



第16图 出土石器 (2)

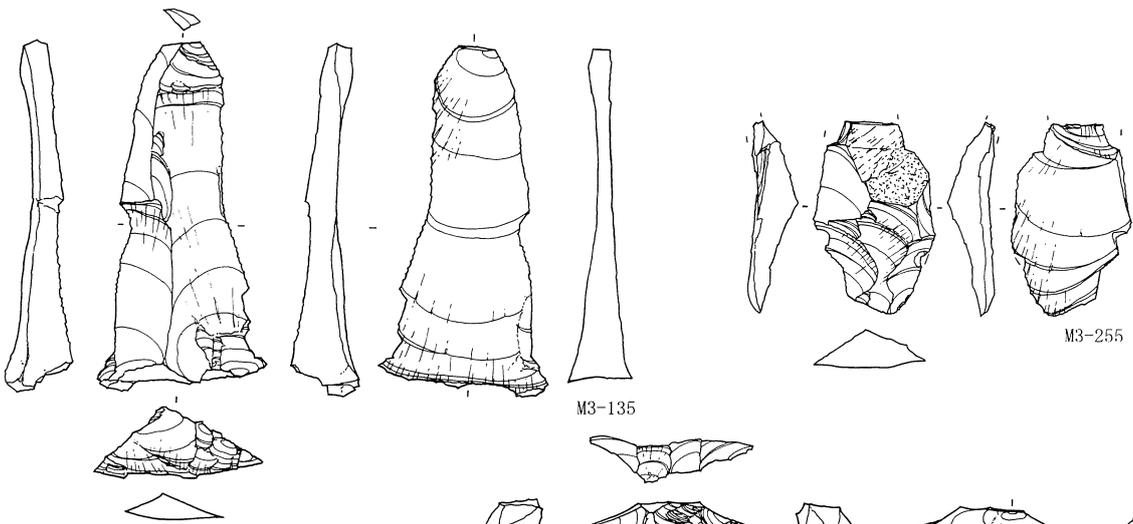


第17図 出土石器(3)



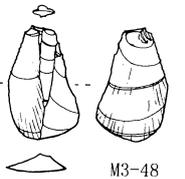
M3-322

M3-95

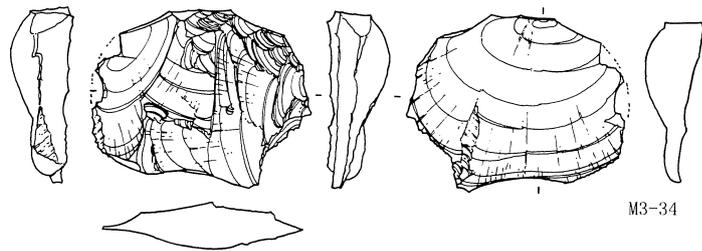


M3-135

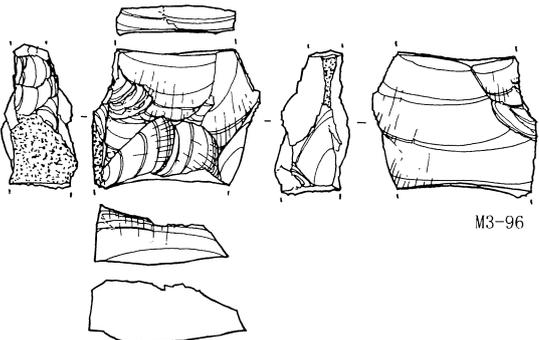
M3-255



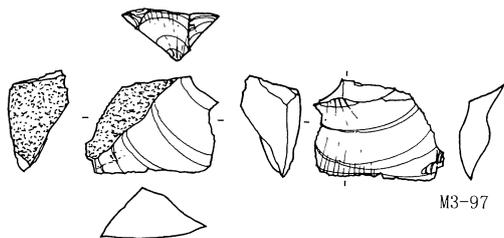
M3-48



M3-34



M3-96



M3-97



曲線的で丸い感じを受ける。刃部は右刃で、刃縁の長さは、欠損部分を想定すると、器長の約半分程度になると思われる。先端角は想定で36°、側刃角は132°である。

素材は下位の縦長剥片が用いられている。正面の剥離面は主要剥離面と180°逆方向からの剥離と、主要剥離面と同一方向の剥離面によって構成され、器軸にほぼ平行するように、2本の稜線が見られる。横断面は薄手で、基端付近は台形になっている。

背縁の調整加工は、先端上半部と基端下半部に分かれる、先端部側は比較的不規則な剥離が施された後、微細な剥離によって再度調整されている。基端下半部は小さめの規格的な剥離が施されている。

側刃縁の加工は、やや面的な剥離が施され、後に微細な剥離で調整されている。また、裏面に平坦剥離が見られる。基端は鋭利ではないが尖っている。

M3-92：母岩はチャート1である。

外形は背縁が直線的で、側刃縁がそれにほぼ平行し、刃部で折れ曲がり先端で鋭角に交差する。基端は“コ字状”の変形で、端部は尖頭状になっている。刃部は右刃で、左右は非対称である。先端角は39.5°、側刃角は147.5°を測る。

素材は上位の縦長剥片を用いている。正面は主要剥離面と同一方向の剥離面2枚によって構成されている。刃部は基部中央に稜線がなく、横断面は直角三角形状となり、基端は扁平の六角形となっている。

背縁の調整加工は、基端から先端まで器厚いっぱいに、上半部は裏面→正面方向の規格的剥離、基端部付近は正面→裏面方向の粗い剥離が施されている。また、上半部には裏面、正面からの微細な剥離によって側縁のラインが整形されている。

側刃縁の加工は、微細な調整剥離が見られるが、基部付近は背縁と同様に粗い剥離となっている。裏面には主に背縁方向から平坦剥離が施されている。

L3-24：母岩はチャート6の単独資料である。長さ2.9cmと、本遺跡の完形品の中で、最も小形である。

外形は平行四辺形に近く、左右は対称形に近い。基端は欠損によるためか“コ字状”に見えるが、もともと

とは尖っていた可能性も高い。刃部は左刃で、先端角39.5°、側刃角150°を測る。

素材は下位方向からの縦長剥片を用いており、正面の剥離面は3枚の主要剥離面と近似する方向からの剥離面によって構成され、器軸に斜めに（刃縁に平行して）2本の稜線が見られる。

背縁の調整加工は、上半部が器厚いっぱいの粗い剥離が施され、後に微細な剥離によって鋸歯状の部分を抉るように整えている。下半部は非常に微細な剥離が施されている。側刃縁は背縁上半部と対峙するように、器厚いっぱいの剥離が施されているが、背縁よりは規格的な剥離加工である。後に微細な剥離によって整形されている。

M3-262：母岩はガラス質黒色安山岩1である。

先端を欠損しているため、全体の形状は不確かである。素材は上位の縦長剥片が用いられている。正面の剥離面は主要剥離面と同一方向の2枚の剥離面で構成され、中央に稜線が入っている。基端部は“コ字状”で裏面→表面方向に剥離が施されている。

調整加工は基本的に背縁に施され、基端裏面に側刃縁からの平坦剥離が見られる。

M3-94：母岩はM3-262の同じ、ガラス質黒色安山岩1である。外形は幅広で、背縁が強く屈曲する三角形をしている。刃部は左刃で、先端の一部を残した感じである。先端角は58°、側刃角は149.5°を測る。

調整加工は、背縁の調整加工は粗く、側刃縁の加工は細かい。全体に作りは雑である。

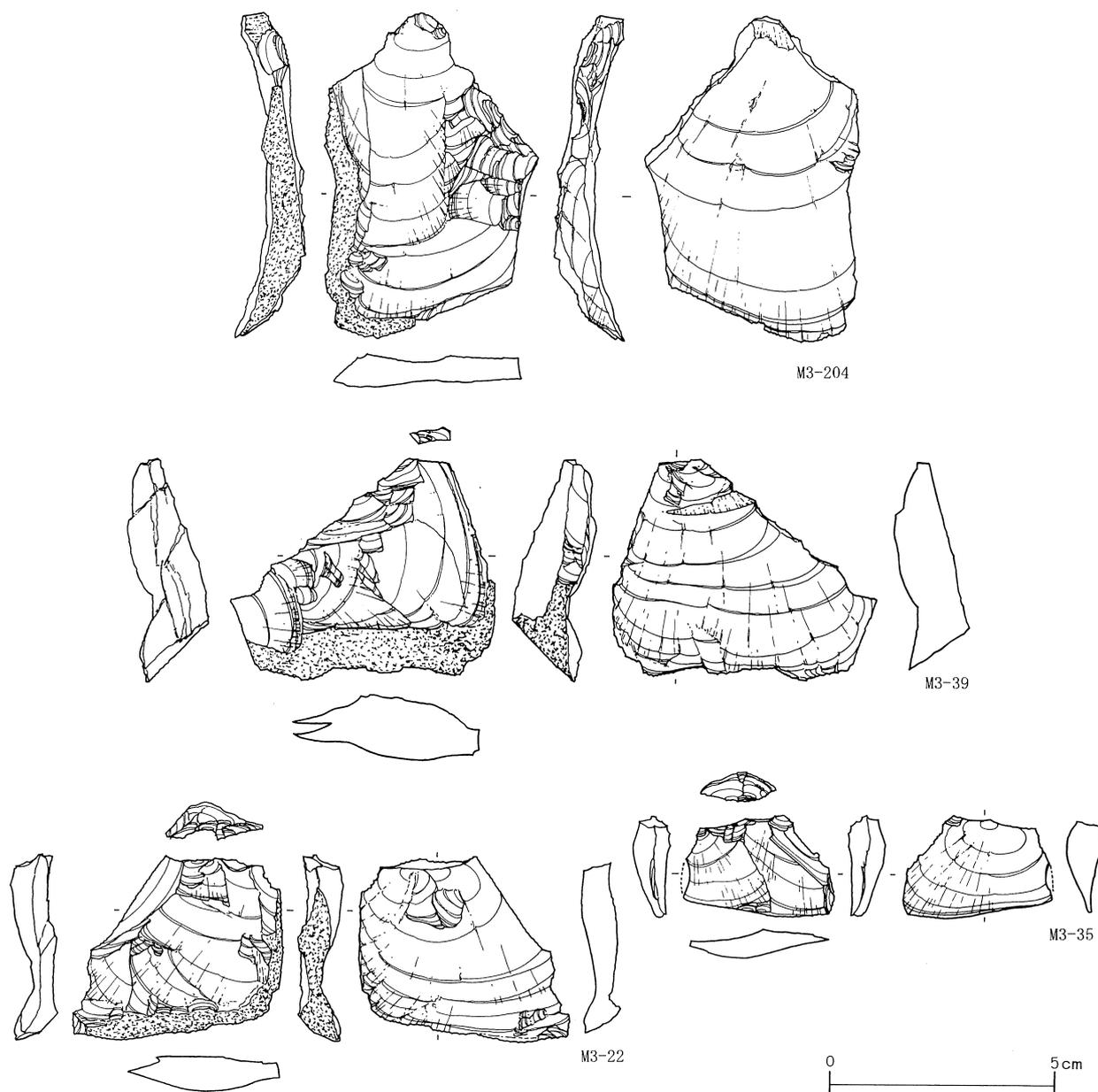
M3-303：母岩はチャート7の単独資料である。

先端と基端を欠損する為、全体の形状は不明である。調整加工が背縁上半部に集中している点など、削器の可能性もあるが、右側縁を刃縁と考えナイフ形石器と分類しておく。

素材は下位の縦長剥片を用いており、正面の剥離面は多方向からで規則的でない。調整加工は粗い剥離が器厚いっぱいに施され、後に微細な剥離によって整形されている。

M3-289：母岩はチャート1である。先端部の破損

第18図 出土石器（4）



品で、全体形状は不明である。

M3-81：母岩は頁岩 1 である。縦長剥片の打面側に調整加工を施している。

M3-320：母岩は頁岩 2 の単独資料である。先端部を欠損する。打面を残し剥片の先端部を斜めに切るように、調整加工が施されている。

剥片（第16～18図）

剥片は、縦長の大型で整った剥片と横広の剥片が見られた。剥片どうして接合する例は、横広のものが目につく。大型の縦長剥片は、それ自体が完成したもの

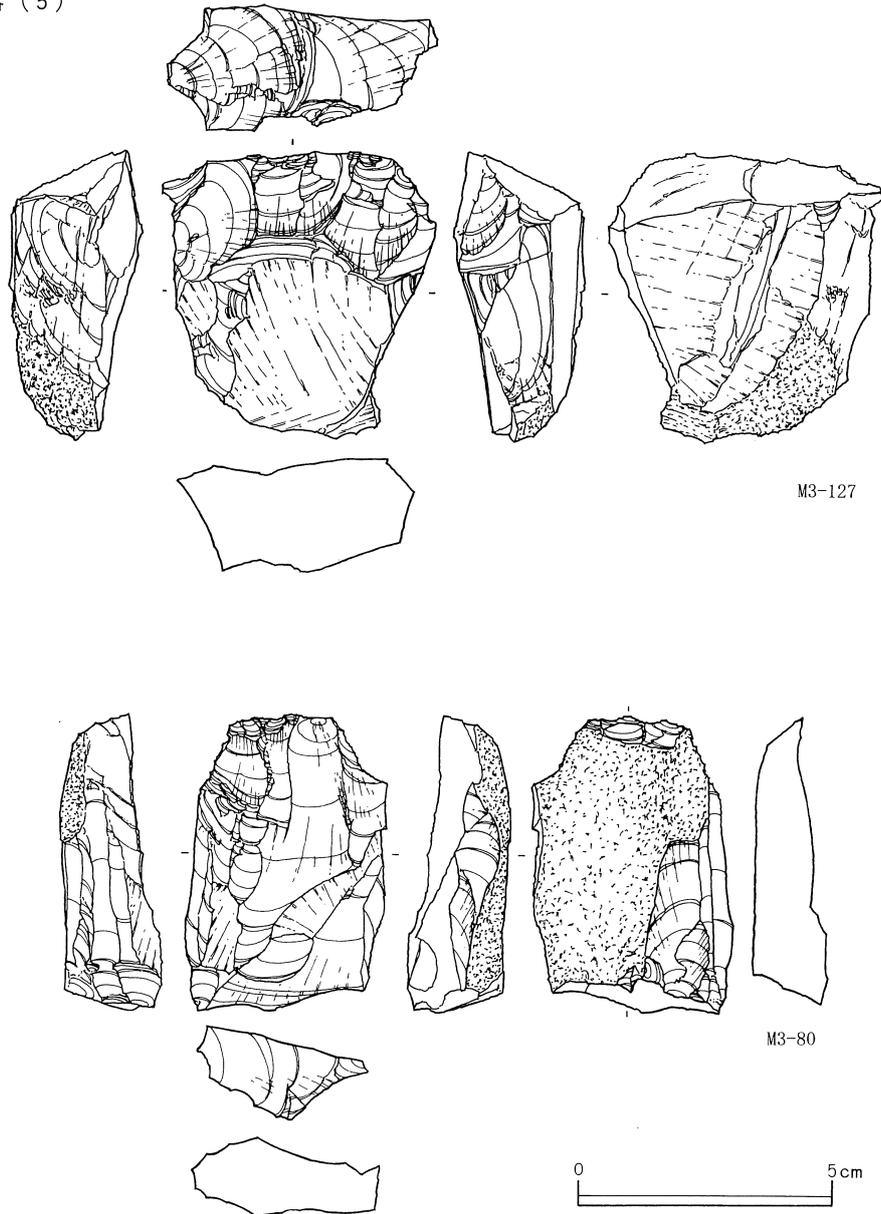
が遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。

石核（第19図）

M3-127：母岩はチャート 2 である。作業面は正面に限定されている。作業面の下半部は節理で欠損し、他の剥離面を切っている。打面は作業面左方向からの剥離によって作られ、一部打面調整が見られる。

M3-80：母岩はチャート 1 である。作業面を正面に限った単設の石核である。裏面は原石面を大きく残し、一部底面からの剥離が見られる。打面は作業面方向からの、微細な剥離によって整えられている。

第19図 出土石器 (5)



(6) 接合資料 (第20~22図)

接合資料No.1 : 剥片 (M3-35) と剥片 (M3-22) の接合である。ともに密集部から出土しており、接合距離は110cmである。

母岩はチャート1で接合資料No.4と同じである。本母岩は全資料の半数以上を占めているが、碎片が多く接合は少なかった。

接合は剥片剥離によるもので、35と22の剥離方向、打面の高さが異なることから、2点の剥片の間に剥片剥離の進行による時間差のあることが窺える。

接合資料No.2 : 剥片 (M3-204) と剥片 (M3-39)

の2点の接合である。ともに密集部で、15cmと非常に近接して検出されている。

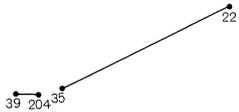
母岩はチャート4である。

2点とも大形の剥片で、一部原石面を残している。204は正面の剥離面と主要剥離面の方向は基本的に一致しているが、39との間では剥離方向が 90° 異なっている。連続していた剥片剥離がこの2点を剥離する時点、 90° 打面転位したようである。

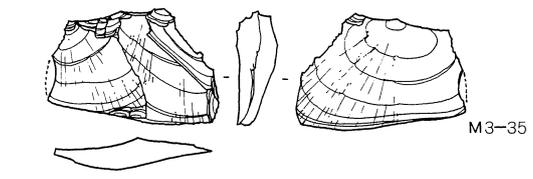
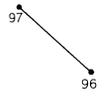
接合資料No.3 : 剥片 (M3-96) と剥片 (M3-97) の接合である。出土は帯状に延びた範囲からで、接合距離は59cmである。

第20図 石器接合図 (1)

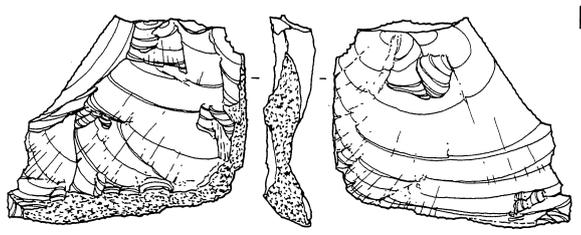
L 3
M 3



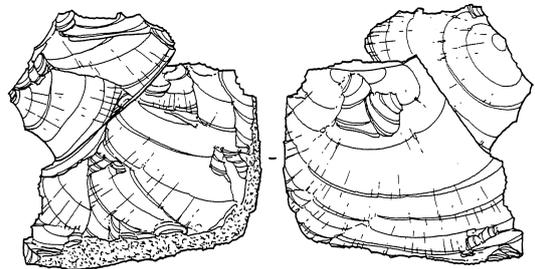
80



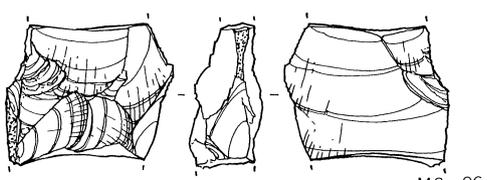
M3-35



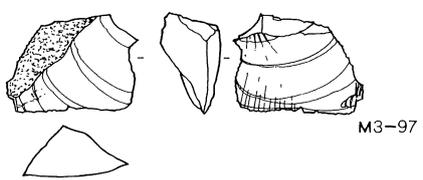
M3-22



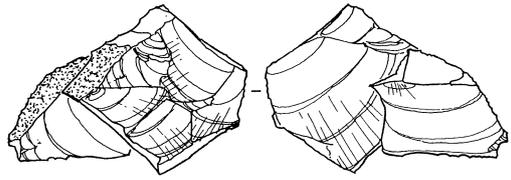
接合資料 No.1



M3-96



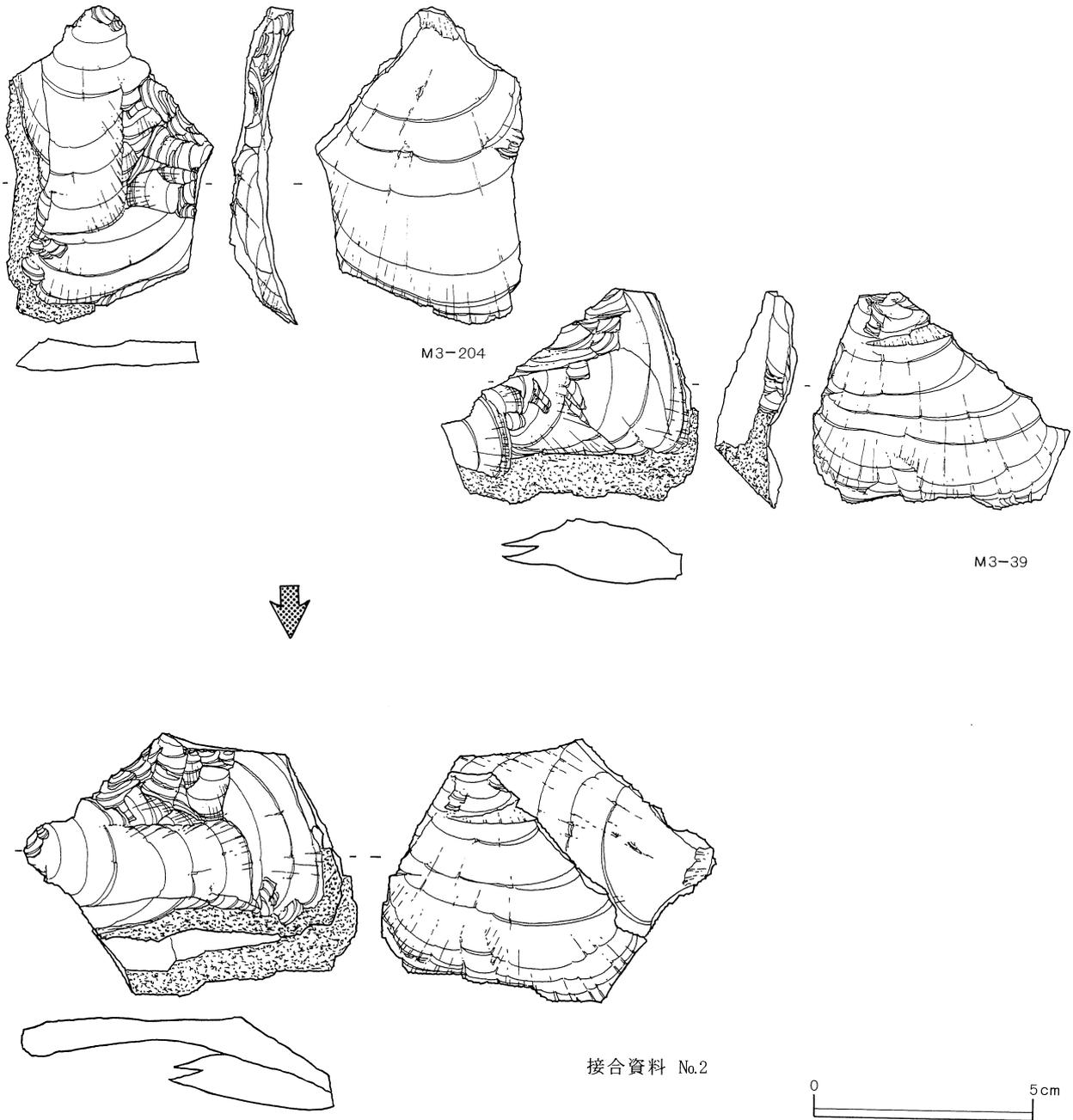
M3-97



接合資料 No.3



第21図 石器接合図(2)



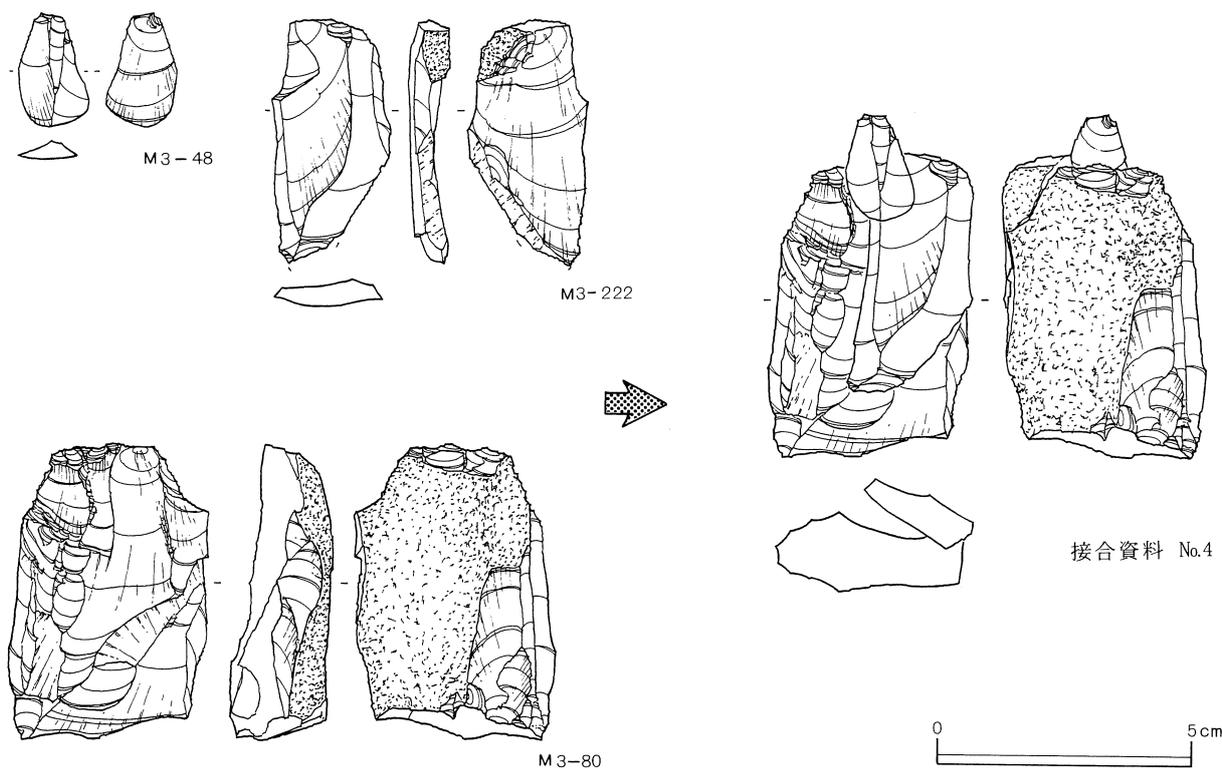
母岩はチャート2で、同一母岩の石核(M3-127)が近くから検出されている。

96は上下両端を欠損し、97は小形不整形の剥片である。剥片を見る限り、縦長剥離を目的とする剥片剥離によるものではなく、石核の粗い調整段階で生じた剥片の接合と考えられる。

接合資料No.4：石核(M3-80)に剥片(M3-222)と碎片(M3-48)の接合である。

母岩はチャート1で接合資料No.1と同じである。石核以外は攪乱からの出土であるため、接合状況は不明である。碎片と剥片で打面の高さ異なることから、その間に打面調整が施されていることが窺える。

第22図 石器接合図(3)



(7) 母岩別資料(第23・24図)

チャート1(第23図): 本母岩は総数100点と、全体の半数以上を占めている。

石材の色調は暗灰色に近く、黒色の細かい縞が一部見られる。僅かに節理が入っているが、均質で透明度の低い、良好なチャートである。

母岩の内訳は、ナイフ形石器2点を含む、剥片30点、碎片67点、石核1点と本遺跡から検出されている全器種がそろっている。また、接合資料4例の内、2例が本母岩に含まれる。

ナイフ形石器は1点が完形で、1点は端部のみの破片である。剥片は形状の整ったものが多いとは言えず、形状の整った大形縦長剥片は、単独又はそれだけによって構成される小点数の母岩に多くみられる。石器集中内で剥片剥離作業が想定できる母岩は、本資料のみである。

チャート2(第23図): 本母岩の総数は17点で、チャート1に続くが、その差は大きい。

石材の特徴は、色調は灰色と黒色が縞状に混じって

いる。節理がチャート1と比較すると発達しているが、比較的均質で、灰色の部分は薄く剥がれると、白色に近く部分的に透明度がある。形状の整った縦長剥片も見られる。

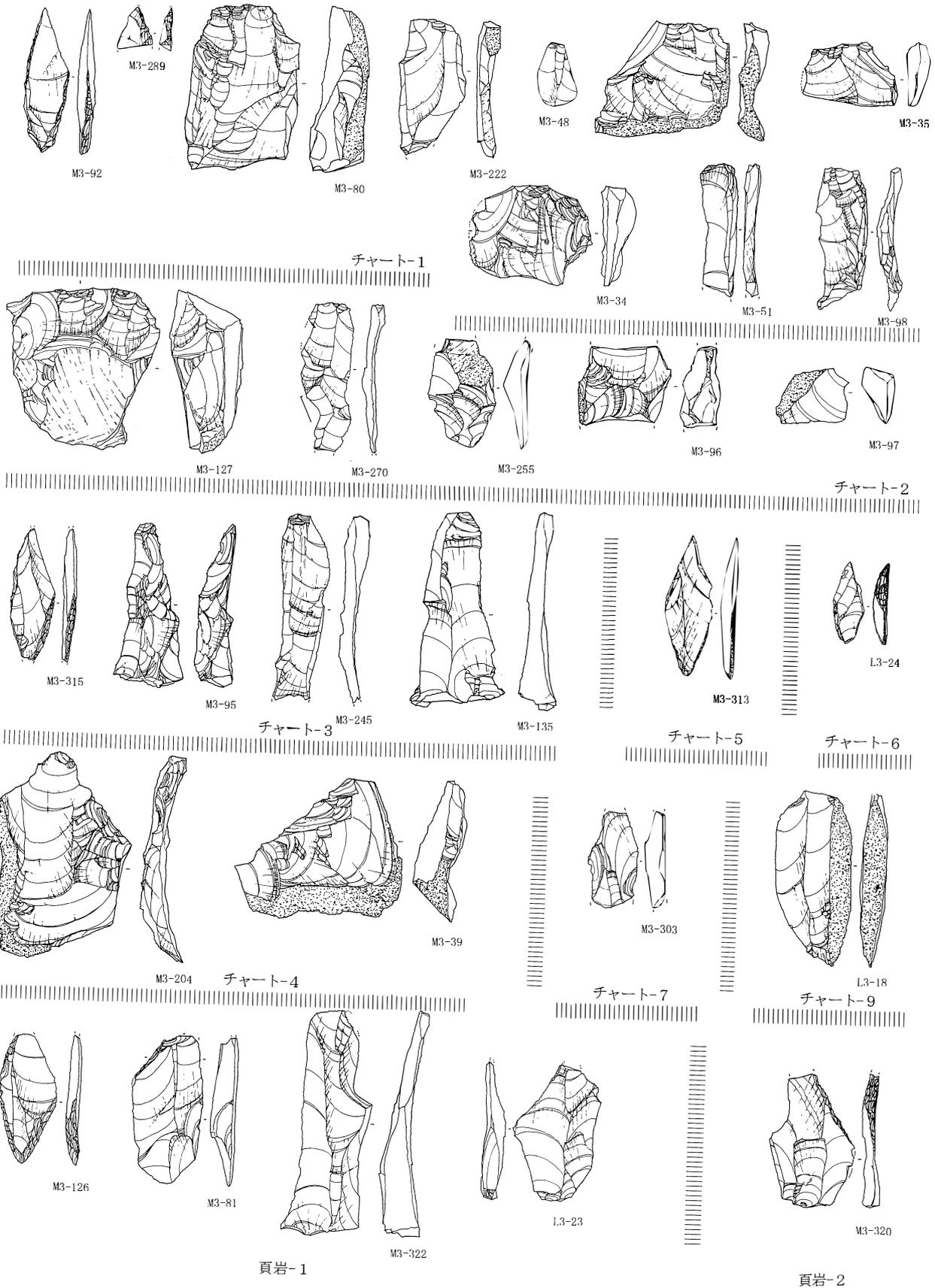
母岩の内訳は、剥片10点、碎片6点、石核1点とナイフ形石器は含まれていない。接合資料No.3は上記したように、形状の整った剥片ではなく、粗い石核調整等と考えられるが、石核(M3-127)を中心とした剥片剥離の明かな痕跡は見られない。

チャート3(第23図): 本母岩は4点と少ないが、その内訳は、ナイフ形石器1点と剥片3点で、全て図示してあるように、剥片は大形の縦長剥片である。

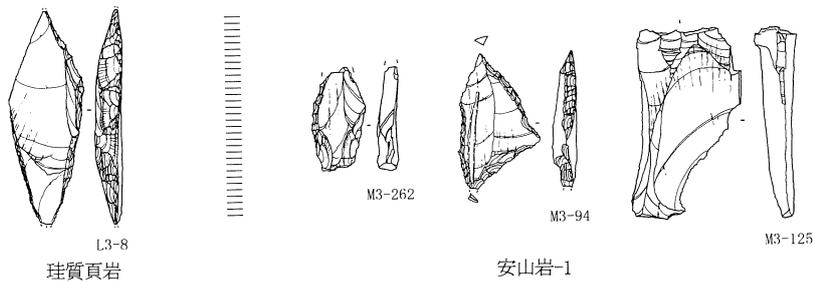
石材の特徴は、色調が灰色～暗灰色で細く縞状に節理面が多く入っており、チャート1と比べ良質とは思えない。遺跡には、ナイフ形石器及び縦長剥片といった、完成した状態で持ち込まれているようである。遺物分布は密集部から離れ、東側に点在している。

チャート4(第23図): 本母岩は剥片2点のみである。石材の特徴は、チャート1に近似しており、色調

第23図 母岩別資料 (1)



第24図 母岩別資料 (2)



は暗灰色で、表面に暗い茶色系の蒔くのようなものが部分が見られる。一部節理が入っているが、緻密で良質なチャートである。

資料点数が少なく、接合することから、大形の剥片の状態に遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

チャート5 (第23図)：ナイフ形石器の単独母岩である。石材の色調は、オリブが僅かに入った灰色をベースに、黒色と灰色が縞状に混じり込んでいる。細かい節理が見られ、一部表面は粗い感じである。

チャート6 (第23図)：ナイフ形石器の単独母岩である。石材の色調は、透明感のある灰白色である。基部中央に節理があるが、均一で良質である。

チャート7 (第23図)：ナイフ形石器の単独母岩である。石材の色調は暗い灰色で、灰白色に近い縞が編み目状に入っている。節理が一部入るが良質である。

チャート8 (第23図)：剥片3点と碎片9点で構成される。石材はチャート1に近似するが、色調にオリブが縞状に混じっている。材質は良好である。

(8) その他の石器

本石器は、J3グリッドから単独で検出された。石器集中1の時期とは異なり、武蔵野台地第IV層下部に対応するものと思われる。

石材は節理の多い、あまり良質とはいえないチャートで、石器集中1で用いられている石材とは異なる。先端部を若干欠損している。全体形は曲線的で調整加工が両側縁に施されている。刃部は右刃で、側刃縁は打面を一部残し、大きめの剥離と細かい剥離が見られる。背縁の加工は若干面的で粗い剥離である。

頁岩1 (第23図)：本母岩の内訳は、ナイフ形石器2点、剥片3点と充実している。チャート3同様に完成した石器を遺跡に持ち込んでいるようである。石材の特徴は、表面が風化によって白色の粉をふいたようになっているが、新鮮な面を観察すると漆黒をベースに、白色が細かい縞状に入っている。

頁岩2 (第23図)：ナイフ形石器1点の単独である。頁岩1より表面の光沢が多く、不純物の混じりが少ない。色調は黒色である。

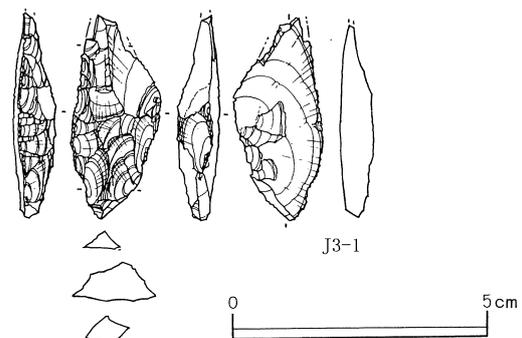
ガラス質黒色安山岩1 (第24図)：母岩の内訳は、ナイフ形石器2点、剥片1点、碎片3点と充実している。石材の色調は黒色で表面は風化によって荒れている。

ガラス質黒色安山岩2：碎片1点である。色調は灰色で、あまり良好な材質ではない。

珪質頁岩 (第24図)：ナイフ形石器1点の単独である。色調は黒色で白色の細かい縞が入り、一部節理が見られるが、良質な材質である。

珪岩：碎片1点である。

第25図 その他の石器



第3表 出土石器一覧

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
8	L3	982	236	107.83	ナイフ	5.65	2	0.7	6.82	珪質頁岩	第15図	
12	L3	995	279	107.66	碎片	(1.30)	1.25	0.25	0.45	チャート1		
13	L3	989	359	107.87	碎片	(1.45)	1.35	0.25	0.3	チャート1		
15	L3	988	476	107.98	碎片	(1.80)	0.75	0.15	0.24	チャート1		
16	L3	823	316	107.83	剥片	4.15	1.85	1.85	12.64	チャート10		
18	L3	704	125	107.83	剥片	6.2	2.7	0.9	17.28	チャート9	第16図	
19.1	L3	954	275	107.44	碎片	(1.25)	0.65	0.35	0.19	チャート8		
19.2	L3	954	275	107.44	碎片	(0.95)	1	0.25	0.26	チャート1		
20	L3	995	575	107.81	剥片	(1.75)	1.4	0.35	1.29	チャート8		
23	L3	857	576	107.78	剥片	4.85	3	0.75	9.017	頁岩1	第16図	
24	L3	970	664	107.76	ナイフ	2.85	1.05	0.5	1.37	チャート6	第15図	
16	M3	50	410	107.86	碎片	0.85	1.3	0.3	0.26	チャート1		
17	M3	51	417	107.92	碎片	(2.50)	1.1	0.25	0.63	チャート1		
19	M3	48	426	107.91	碎片	(1.50)	3.45	0.55	2.93	チャート1		
20	M3	70	438	107.86	碎片	(2.45)	1.35	0.25	0.63	チャート1		
22	M3	48	536	107.88	剥片	4.7	4.75	0.05	17.81	チャート1	第18図	
23	M3	162	489	107.78	剥片	(2.60)	2.3	0.25	1.64	チャート1		
25	M3	174	493	107.81	碎片	(0.90)	0.7	0.2	0.16	チャート1		
26	M3	188	496	107.80	碎片	(0.35)	(0.65)	0.05	0.03	チャート1		
32	M3	107	412	107.85	碎片	1.6	1.45	0.45	0.84	チャート1		
33	M3	134	416	107.86	碎片	0.4	0.65	0.1	0.02	珪岩		
34	M3	144	422	107.78	剥片	3.55	4.3	1.15	15.39	チャート1	第17図	
35	M3	108	402	107.81	剥片	2.25	3.35	0.95	5.49	チャート1	第18図	
36	M3	144	403	107.80	碎片	(2.75)	1.55	0.25	0.94	チャート1		
37	M3	108	390	107.85	碎片	(1.30)	1.1	0.15	0.15	チャート1		
38	M3	108	378	107.93	碎片	(1.20)	0.45	0.2	0.09	チャート1		
39	M3	110	367	107.86	剥片	4.85	5.9	1.4	35.12	チャート4	第18図	
40	M3	107	371	107.87	剥片	2.5	0.85	0.35	0.56	チャート1		
41	M3	110	347	107.95	碎片	1.85	1.1	0.35	0.68	チャート1		
42	M3	100	345	107.95	剥片	(2.30)	1.1	0.2	0.4	チャート1		
43	M3	100	340	107.83	碎片	(1.75)	1.8	0.45	0.92	チャート1		
44	M3	107	343	107.83	剥片	(3.00)	1.75	0.45	1.67	チャート1		
45	M3	128	359	107.81	碎片	(1.45)	1.85	0.45	1.46	チャート1		
46	M3	140	360	107.80	碎片	(0.85)	1.1	0.2	0.09	チャート1		
48	M3				碎片	2.25	1.3	0.4	1.12	チャート1	第17図	攪乱
49	M3				剥片	(3.20)	1.45	0.25	1.09	チャート1		攪乱
50	M3	115	322	107.96	碎片	(0.95)	0.9	0.45	0.44	チャート1		
51	M3	152	340	107.86	剥片	(4.65)	1.25	0.45	3.26	チャート1	第16図	
53	M3	170	330	107.93	剥片	5.45	1.2	0.4	1.84	チャート1		
54	M3	111	300	107.84	剥片	(2.55)	3.75	0.4	2.93	チャート1		
73	M3	291	454	107.77	碎片	(1.40)	0.65	0.15	0.11	チャート1		
74	M3	300	450	107.80	碎片	(1.15)	1.6	0.6	1.58	チャート2		
78	M3				剥片	2.6	1.65	0.3	1.29	チャート1		
79	M3	215	352	107.84	剥片	(1.95)	2.85	0.8	2.08	チャート1		
80	M3	234	362	107.83	石核	5.9	3.85	1.95	49.65	チャート1	第19図	
81	M3	246	356	107.84	ナイフ	(5.20)	2.5	0.9	9.81	頁岩1	第15図	
83	M3	292	363	107.83	碎片	0.75	0.95	0.15	0.09	チャート1		
92	M3	233	109	107.94	ナイフ	5.1	1.55	0.6	3.99	チャート1	第15図	
94	M3	374	593	107.71	ナイフ	3.6	2.2	0.65	3.86	安山岩1	第15図	
95	M3	400	565	107.74	剥片	5.75	2.45	1.45	11.8	チャート3	第17図	
96	M3	400	555	107.75	剥片	(2.70)	3.15	1.3	14.53	チャート2	第17図	
97	M3	376	526	107.76	剥片	(2.50)	2.4	1.15	4.85	チャート2	第17図	
98	M3	322	507	107.74	剥片	5	2.8	0.85	5.16	チャート1	第16図	
99	M3	348	497	107.75	剥片	3.85	0.95	(0.50)	1.14	チャート1		
103	M3	326	449	107.77	剥片	3.1	1.35	0.45	1.15	チャート1		

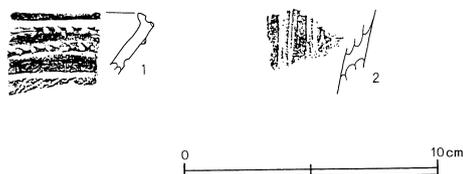
番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考		
104	M3	334	438	107.77	碎片	(1.60)	0.7	0.2	0.27	チャート1	第16図 第15図 第19図			
105	M3	385	435	107.77	碎片	(1.55)	1.1	0.2	0.35	チャート2				
123	M3	500	659	107.82	剥片	(2.50)	1.3	0.4	0.89	チャート8				
124	M3	442	624	107.72	碎片	(0.80)	1.5	0.3	0.18	チャート1				
125	M3	496	620	107.71	剥片	(5.25)	2.95	1.1	10.74	安山岩1				
126	M3	425	590	107.73	ナイフ	4.55	2	0.5	4.19	頁岩1				
127	M3	432	593	107.72	石核	5.6	5.45	2.6	89.47	チャート2				
128	M3	455	582	107.74	碎片	1.75	1.7	0.6	1.61	チャート8				
129	M3	500	565	107.74	碎片	(0.75)	1.45	0.15	0.24	チャート1				
130	M3	430	492	107.74	碎片	2.3	1.25	0.35	0.78	チャート2				
131	M3				碎片	(2.35)	0.65	0.6	0.66	チャート1				
134	M3	408	324	107.81	碎片	(0.75)	1.45	0.25	0.33	チャート1				
135	M3	430	309	107.83	剥片	6.85	3.3	1.35	13.69	チャート3			第17図	攪乱
136	M3	425	258	107.84	碎片	(0.45)	1.1	0.2	0.09	チャート1				
145	M3	550	221	107.82	碎片	(0.50)	0.5	0.05	0.01	チャート1				
149	M3	593	274	107.85	碎片	(2.35)	1	0.25	0.71	安山岩1				
155	M3	581	394	107.84	碎片	(0.35)	1.4	0.15	0.1	チャート1				
159	M3	510	587	107.76	剥片	(1.40)	2	0.2	0.66	チャート2				
160	M3	639	738	107.83	碎片	(0.55)	0.95	0.1	0.06	チャート1				
169	M3				碎片	0.35	0.5	0.15	0.03	チャート1				
193	M3	80	134	107.69	剥片	2.85	1.2	0.35	1.15	チャート1				
195	M3				剥片	5.15	2.3	0.9	7.73	頁岩1				
196	M3				碎片	0.75	1.35	0.25	0.25	チャート1	第18図	攪乱 攪乱 攪乱		
197	M3				碎片	(1.45)	1.6	0.3	0.67	チャート1				
198	M3	80	346	107.78	碎片	(1.10)	2.2	0.3	0.59	チャート1				
199	M3	85	350	107.74	碎片	(1.10)	0.8	0.2	0.23	チャート1				
200	M3	85	363	107.76	剥片	(3.45)	2.2	0.5	2.4	チャート1				
201	M3	92	362	107.73	剥片	(1.85)	3.19	0.55	2.73	チャート1				
202	M3	100	375	107.77	碎片	(1.95)	1.35	0.2	0.46	チャート1				
203	M3	92	372	107.73	碎片	(1.10)	1.1	0.25	0.23	チャート1				
204	M3	112	382	107.78	剥片	7.3	5.05	1.2	35.76	チャート4				
206	M3	108	347	107.74	碎片	(0.85)	0.45	0.15	0.05	チャート1				
207.1	M3	104	348	107.75	碎片	(0.80)	0.95	0.1	0.05	チャート1				
207.2	M3	104	348	107.75	碎片	(0.40)	0.5	0.1	0.02	チャート1				
208	M3	121	325	107.75	碎片	1.85	(0.85)	0.2	0.26	チャート1				
210	M3	74	383	107.71	碎片	(1.50)	(0.50)	0.15	0.11	チャート1				
211	M3	70	385	107.64	剥片	(2.50)	1.25	0.25	1.01	チャート1				
212	M3	91	381	107.62	剥片	(2.30)	1.45	0.2	0.68	チャート1				
213	M3	88	412	107.77	剥片	2.65	2.75	0.4	1.71	チャート1				
214	M3	92	416	107.73	碎片	(0.50)	0.75	0.05	0.02	チャート1				
215	M3	54	448	107.69	碎片	0.8	1	0.2	0.14	チャート1				
216	M3	23	450	107.80	碎片	(1.55)	1.4	0.45	1.07	チャート1				
217	M3	70	480	107.63	碎片	(2.20)	1.65	0.2	0.29	チャート1				
219	M3	96	512	107.73	剥片	(1.95)	1.8	0.45	1.95	チャート1				
220	M3				剥片	(1.10)	1.2	0.25	0.47	チャート1	第16図	攪乱 攪乱 攪乱		
221	M3				剥片	(1.40)	1.15	0.2	0.33	チャート1				
222	M3				剥片	4.8	2.3	0.7	8.74	チャート1				
225	M3	134	448	107.70	碎片	1.1	1.55	0.3	0.36	チャート1				
226	M3	120	414	107.72	碎片	0.6	0.85	0.15	0.07	チャート1				
227	M3	120	406	107.66	碎片	(0.75)	1.3	0.15	0.16	チャート1				
228	M3	144	396	107.72	碎片	1.6	1.15	0.25	0.55	チャート1				
229	M3	148	340	107.76	碎片	(1.55)	2.2	0.25	0.67	チャート1				
230	M3	156	346	107.76	剥片	1.35	1.7	0.15	0.33	チャート1				
231	M3	152	342	107.79	剥片	2.85	1.15	0.45	1.2	チャート1				
232	M3	180	346	107.70	碎片	0.85	1.55	0.35	0.3	チャート1				

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	図 版	備 考
234	M3	168	314	107.75	碎片	0.55	0.35	0.25	0.04	チャート1		
235	M3	155	306	107.75	碎片	(0.80)	0.55	0.25	0.1	チャート1		
236	M3	192	219	107.76	碎片	(0.50)	0.75	0.15	0.05	チャート1		
242	M3	272	317	107.72	碎片	(1.00)	1.3	0.2	0.22	チャート1		
245	M3	295	417	107.74	剥片	6.4	1.7	0.8	6.61	チャート3	第16図	
246	M3	288	425	107.77	碎片	(1.40)	2.05	0.4	0.93	チャート8		
247	M3	288	420	107.76	剥片	(2.20)	2	0.7	3.37	チャート8		
249	M3	310	460	107.72	碎片	1.5	0.95	0.3	0.34	チャート1		
253	M3	194	476	107.57	碎片	(1.30)	0.95	0.25	0.26	チャート8		
255	M3	360	475	107.60	剥片	(3.80)	2.35	1	5.25	チャート2	第17図	
256	M3	264	548	107.61	碎片	1.1	1.2	0.3	0.35	安山岩1		
257	M3	332	592	107.61	碎片	1.55	1.2	0.35	0.45	チャート8		
258	M3				剥片	(2.20)	2.05	0.45	1.62	チャート2		攪乱
259	M3	408	660	107.66	碎片	(1.85)	1	0.35	0.63	チャート8		
260	M3	400	618	107.56	碎片	1.3	1.45	0.3	0.47	チャート8		
261	M3	416	610	107.67	剥片	(1.60)	2.55	0.6	2.4	チャート2		
262	M3				ナイフ	2.75	1.45	0.55	2.36	安山岩1	第15図	攪乱
263	M3	386	536	107.62	碎片	(1.95)	1.25	0.2	0.49	チャート1		
264	M3				碎片	(1.85)	0.7	0.2	0.23	チャート2		攪乱
265	M3				剥片	(2.35)	1.95	0.65	2.28	チャート2		攪乱
266	M3	466	609	107.57	碎片	1.8	1.6	0.6	1.56	チャート2		
267	M3	600	670	107.60	碎片	1.3	1.3	0.3	0.45	チャート1		
268	M3	682	706	107.57	剥片	(2.65)	1.2	0.35	0.76	チャート2		
270	M3				剥片	5.2	1.8	0.55	3.89	チャート2	第16図	攪乱270と
272	M3	796	462	107.59	剥片	5.2	1.8	0.55	3.89	チャート2	第16図	接合し、計
280	M3	88	409	107.60	碎片	1.45	1.85	0.2	0.57	チャート1		測
281	M3	124	454	107.59	碎片	(0.90)	1.05	0.15	0.11	チャート1		
282	M3	126	300	107.61	碎片	(1.05)	0.45	0.15	0.07	チャート1		
283	M3	150	388	107.57	碎片	(1.10)	0.75	0.15	0.13	チャート1		
289	M3	128	514	107.43	ナイフ	(1.40)	1.25	0.4	0.51	チャート1	第15図	
290	M3	122	385	107.49	碎片	0.45	0.95	0.15	0.07	チャート1		
291	M3	129	385	107.48	碎片	(1.40)	1.15	0.25	0.41	チャート1		
298	M3	247	470	107.48	剥片	(2.50)	(1.25)	0.45	1.38	チャート1		
299	M3	287	514	107.36	碎片	(1.05)	(1.15)	0.15	0.21	チャート1		
303	M3	522	577	107.21	ナイフ	(3.30)	1.75	0.75	4.2	チャート7	第15図	
310	M3	444	405	107.38	碎片	0.7	1.3	0.15	0.15	チャート8		
312	M3	597	741	107.31	碎片	1.4	0.65	0.25	0.26	チャート2		
313	M3	22	644	107.84	ナイフ	4.9	1.65	0.55	3.03	チャート5	第15図	
315	M3	43	684	107.70	ナイフ	4.75	1.55	0.45	3.3	チャート3	第15図	
319	M3	145	820	107.67	碎片	(0.65)	0.55	0.2	0.11	チャート8		
320	M3	409	717	107.75	ナイフ	(4.65)	2.95	0.55	6.94	真岩2	第15図	
321	M3	458	800	107.62	剥片	2.2	1.65	0.35	1.14	安山岩1		
322	M3	497	814	107.76	剥片	8	2.75	1.15	19.99	真岩1	第17図	
1	M4	446	19	107.67	碎片	(1.10)	(2.60)	0.65	1.12	安山岩2		
1	J3				ナイフ	4	1.95	0.85	5.19		第25図	

3 縄文時代の遺物

2片のみであるが遺構外から縄文土器の小片が出土している。第26図に示した。1は朝顔形の深鉢形土器の口縁部である。先端が内側に折れる口縁部形態で、外面に沈線文、刺突文、刺突を施した隆帯を巡らせている。隆帯の下位は横位の沈線文で区画され、LRの縄文が充填施文されている。堀之内II式である。B1グリッド出土。2は櫛歯状工具による条線文が垂下する土器である。深鉢形土器の胴部破片である。後期前葉の土器である。M2グリッド出土。

第26図 縄文時代の遺物



4 その他の遺構

土壇が13基検出されている(第28図)。これらは台地頂部に当たる部分に主として分布している(第27図)。

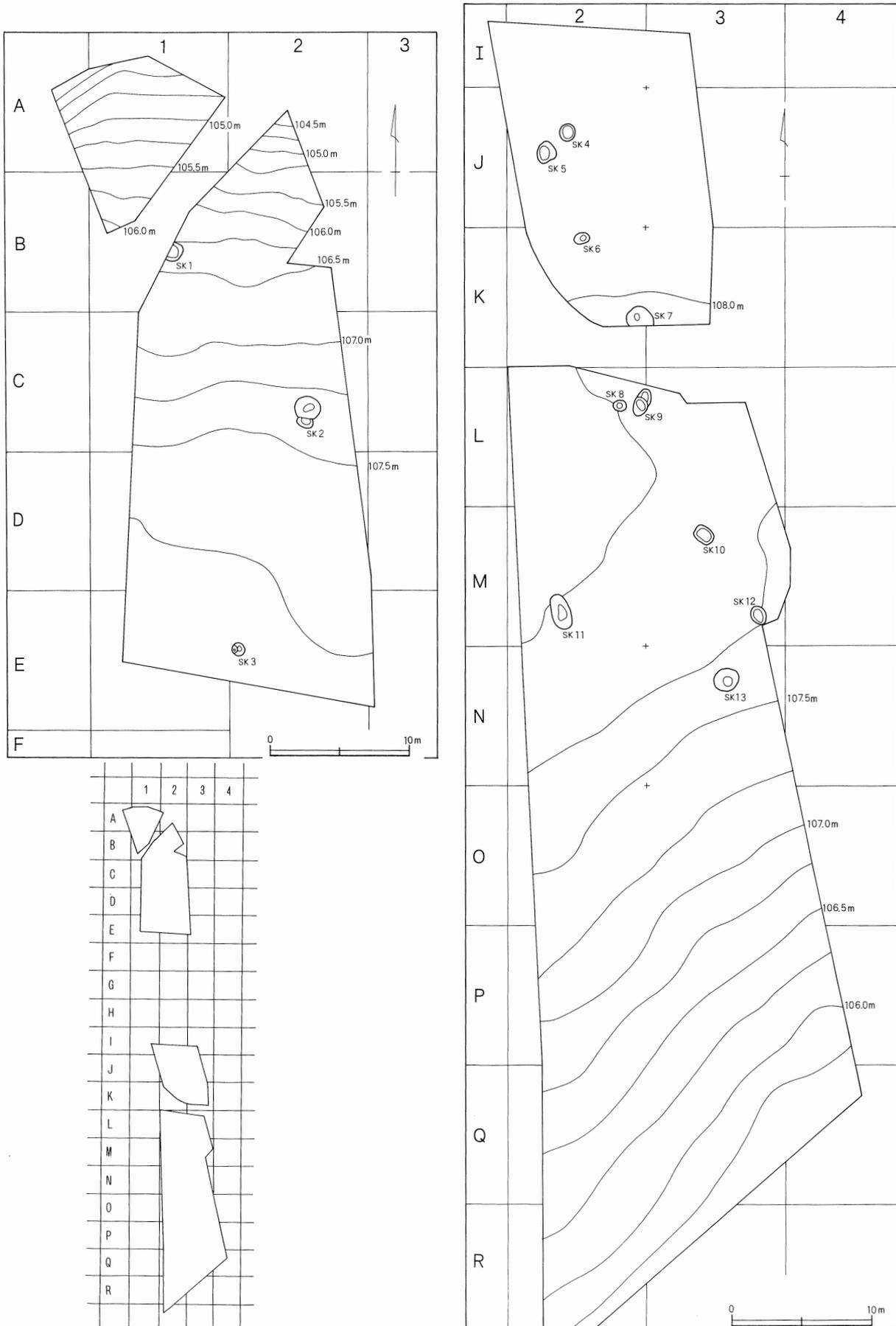
形態は不整円形のものが主体を占めている。

出土遺物は見られなかった。時期は不詳である。第4表に位置、平面形、規模、主軸を示した。

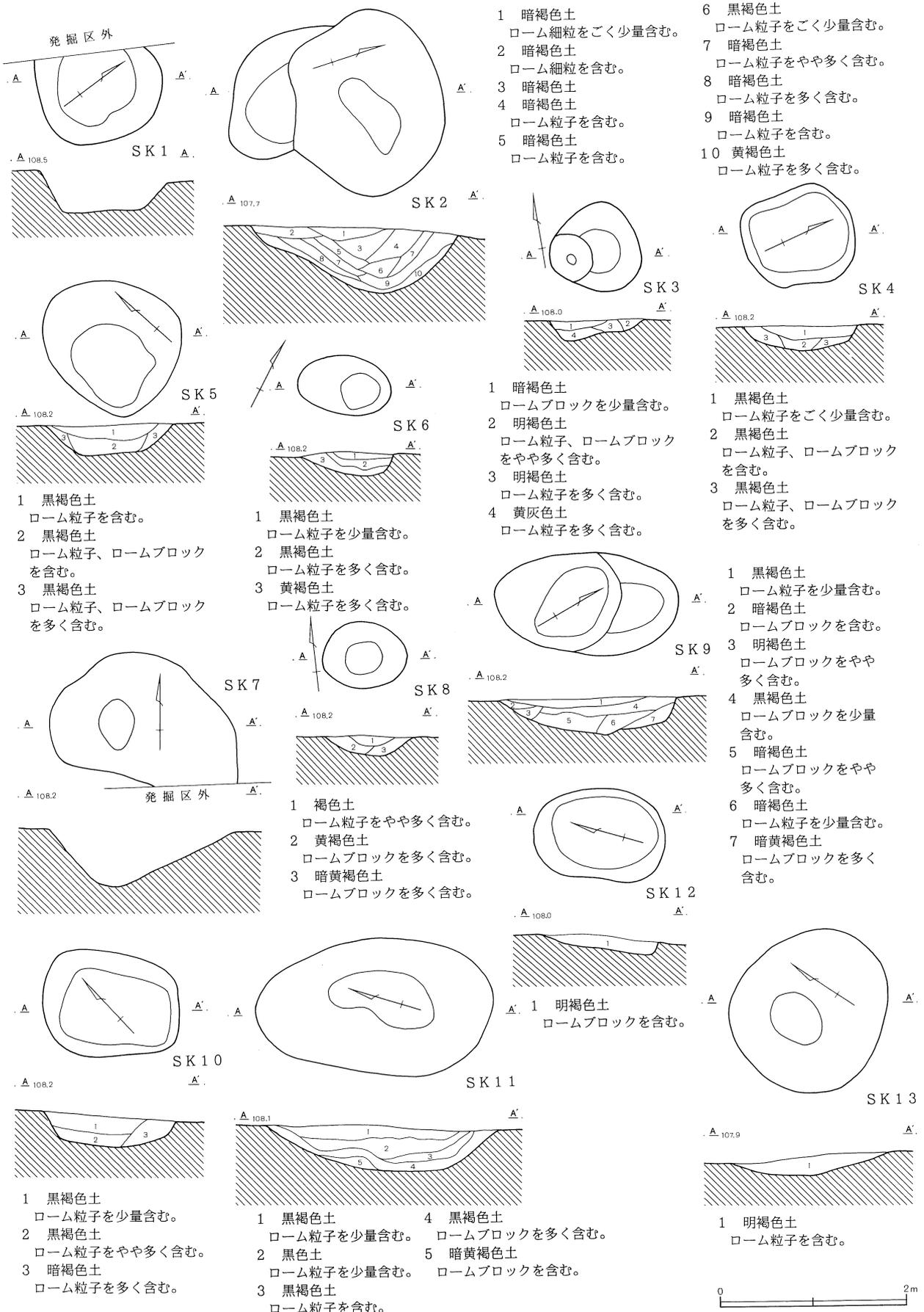
第4表 土壇一覧

名称	グリッド	平面形	長径×短径×深さ(m)	主軸方向
第1号土壇	B 2	不整円形	1.4×1.0×0.5	N-35°-E
第2号土壇	C 3	不整円形	2.3×2.0×0.7	N-4°-E
第3号土壇	E 3	不整円形	1.0×1.0×0.2	N-84°-W
第4号土壇	J 3	不整円形	1.2×1.0×0.3	N-20°-E
第5号土壇	J 3	不整円形	1.5×1.5×0.3	N-40°-W
第6号土壇	K 3	不整円形	1.0×1.1×0.24	N-59°-E
第7号土壇	K 3・4	不整形	4.0×1.4×0.6	N-90°-W
第8号土壇	L 3	楕円形	0.9×0.7×0.2	N-78°-W
第9号土壇	L 3・4	不整円形	1.9×1.1×0.4	N-17°-E
第10号土壇	M 4	不整円形	1.5×1.1×0.34	N-55°-W
第11号土壇	M 3	不整円形	2.5×1.5×0.6	N-18°-W
第12号土壇	M 4	不整円形	1.4×0.9×0.2	N-18°-W
第13号土壇	N 4	不整円形	1.8×1.7×0.2	N-58°-E

第27図 遺構全体図



第28図 その他の遺構



V 中台遺跡

1 概略

発掘区北側は平坦な台地頂部であり、南側は南東方向への緩斜面となっている。(第34図)。さらに南方の発掘区外は斜度を増し、下位の段丘とをつなぐ斜面となっている。発掘区におけるローム面の標高は109m

2 先土器時代の遺構と遺物

(1) 概要

石器集中1はB 2、B 3、C 2、C 3グリッドにおいて見つかった(第29図)。

遺物はII層から出土している(第30図)。遺物の平面分布は発掘区外である東側に延びるものと思われる。

出土石器はチャートの比較的大形の縦長剥片と碎片のみで、定型的な Tool は検出されていない。

また、C 1グリッドからも幅広の大形の剥片が検出されている(第33図)。出土層位はI層(ソフトローム)中であつた。周辺及び下層に拡張したが、1点のみの単独であり、他に石器の出土はなかった。

(2) 層位 (第12図)

中台遺跡のローム基本層序はI層、II 1層、II 2層、III 1層、III 2層、IV層に分かれる。内容は以下のとおりである。

I～IV層の基準は屋瀬遺跡と同様であるが、III 1層が暗い色調で明瞭に分層され、その上下に漸位層的なII 2層、III 2層が明瞭に区分できた。

I層(10YR5/6)。黄褐色のソフトローム層である。径1mm以下の赤色、黒色スコリアを含んでいる。

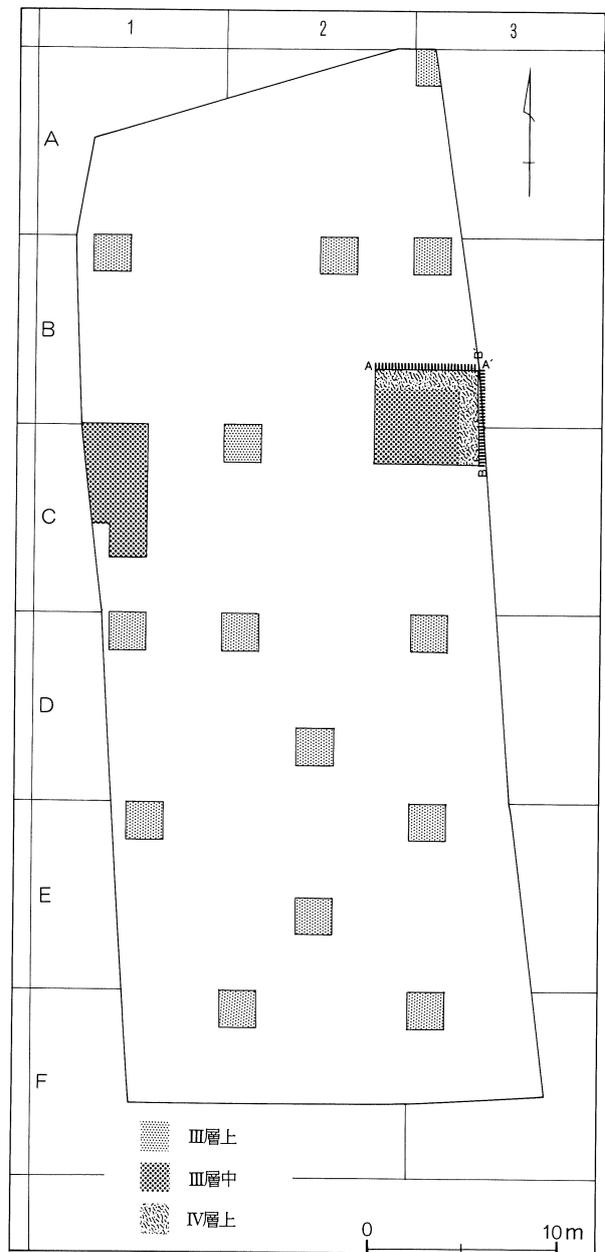
II 1層(10YR4/6)。II層以下はハードロームである。II層は褐色土である。径0.5mmの白色粒子を含んでいる。またI層と同様に径1mm以下の赤色、黒色スコリアを含んでいる。

II 2層(10YR4/6～3/4)。褐色土 (II 1層) から暗褐色 (III 1層) への漸位的な色調をしている。暗褐色ローム中にやや色調の明るい褐色ロームをブロック状に含む。径0.5mmの白色粒子を含む。赤色、黒色スコ

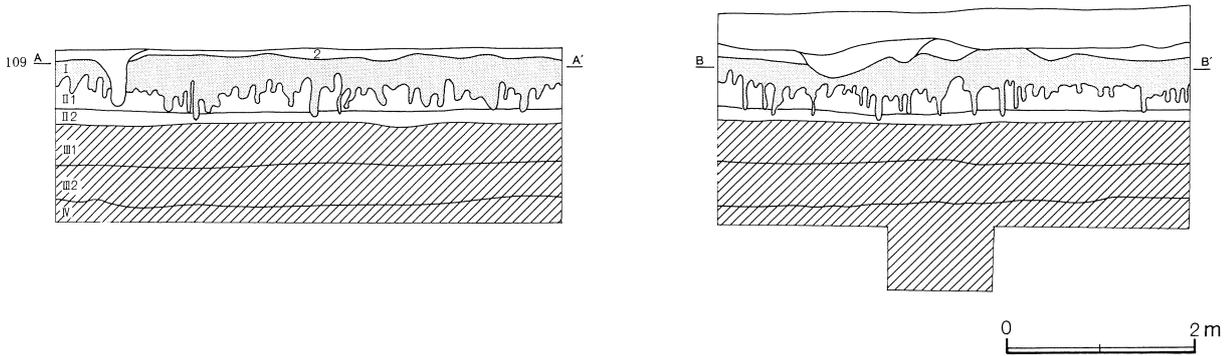
前後である。

検出された遺構は先土器時代の石器集中1カ所と縄文時代後期の土壇5基、時期不詳の土壇13基、溝1条である。

第29図 先土器時代の調査



第30図 土層断面図



アを少量含んでいる。

III1層 (10YR3/4)。暗褐色土である。黒色スコリアは微細粒から径1mm程度のものを含む。赤色スコリアを含んでいる。赤色スコリアは下部にやや多く、径2mm程度のものが主体である。

III2層 (10YR4/4)。暗褐色土である。III1層よりやや明るい色調である。黒色スコリアを含む。赤色スコリアは層の上部を中心として、径3～7mmのものが多く見られる。

IV層 (10YR3/4)。暗褐色土である。粘性に富み、なめらかである。

石器集中1の層位はII1層～II2層の褐色ハードローム層中である。また単独出土のC1-1 (第33図)はI層の褐色ソフトロームからの出土である。

(3) 石器集中1

B3・C3グリッドの境に位置する。遺物の分布は径約3×4mの楕円形の範囲に散漫に分布しており、石器の出土層位はII1層～II2層を中心に、厚さ60cmの範囲から検出されている。

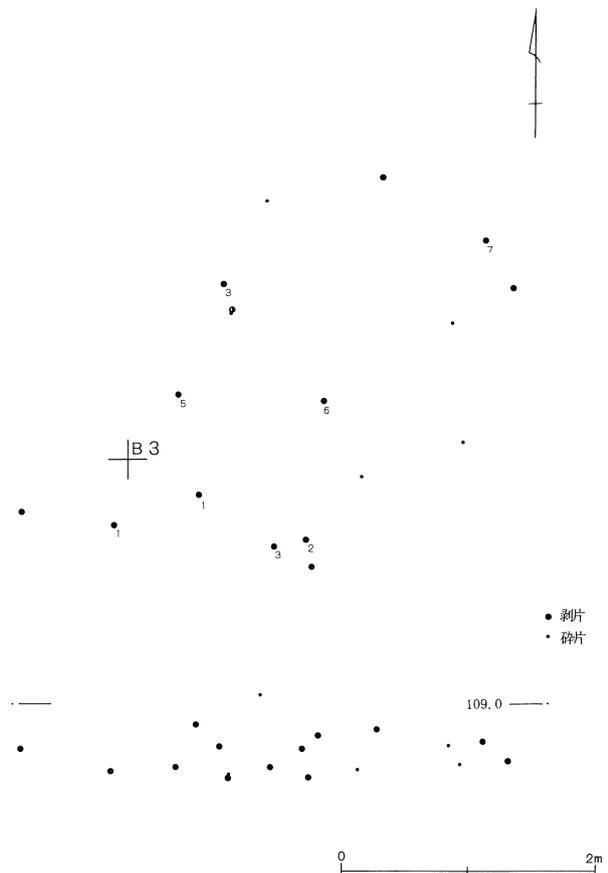
遺物の総数は20点と少なく、その内訳は、剥片・碎片と単純な石器組成である。しかし、剥片は比較的大形のものが見え、分布は南西側に纏まるようにも見えるが、範囲の外周に沿うように分布しているようにも見える。

帰属時期は Tool が検出されていないため、限定できないが、出土層位から屋瀬遺跡より古くなる可能性が高い。

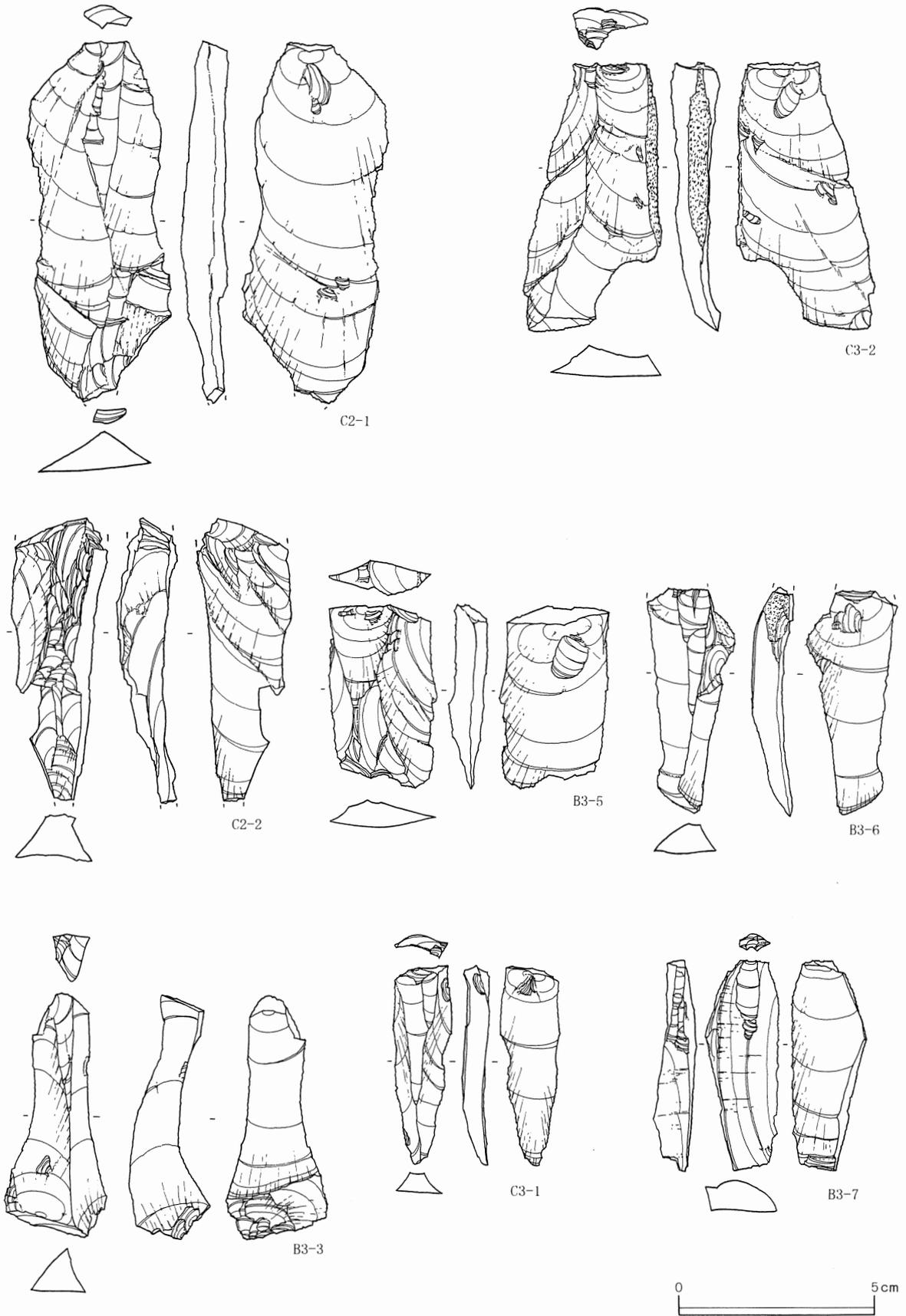
(4) 出土石器

検出された石器は、剥片と碎片のみで、Toolは含まれていない。そのため、本石器群の帰属時期は限定しにくい。出土層位がハードローム層中からであることから、屋瀬遺跡出土の石器群より古くなるものと思われる。

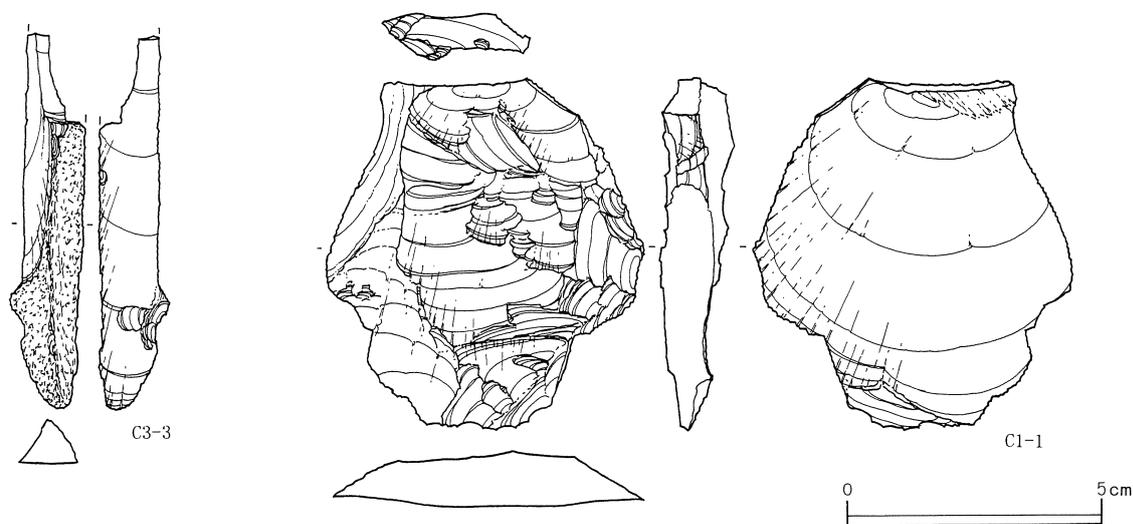
第31図 石器集中1



第32图 出土石器 (1)



第33図 出土石器 (2)



石材は全てチャートが用いられている。

剥片は、打面が幅広で、両側縁が平行し外形が長方形になるものが目につく。また、打面が単剥離の平坦面から加撃されたもので、バルブが発達したものが多い。

剥片の特徴的を見ると、C2-1は比較的小形の単面打面で、両側縁が膨らみ先端が尖る。正面の剥離面は主要剥離面と同一方向で、連続して大形の縦長剥片を作出していたことが窺える。

C3-2は打面が大きく両側縁が平行し、外形は長方形となる。右側縁面の原石面が平坦面であることから、素材礫は角礫・亜角礫状を呈していたものと思われる。

C2-2は正面中央を縦に入る稜線上に、細かい剥離が見られ、石核の調整痕を残す縦長剥片である。

B3-3は先端が厚く肥大する縦長剥片で、正面の剥離

面は主要剥離面と90°異なる。

B3-5は長方形で、C3-1は先端が尖る、形状の整った縦長剥片である。

C1-1は地点の異なる資料である。長さとの幅の比が変わらない大形の剥片で、正面の剥離面の剥離方向は概ね主要剥離面の共通するが、あまり一定していない。

第5表 出土石器一覧

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
1	B3	780	201	108.80	剥片	(1.05)	1.35	0.3	0.78	チャート	第33図	
2	B3	800	108	109.05	碎片	(1.50)	1	0.25	0.33	チャート		
3	B3	864	75	108.64	剥片	6.3	2.65	2.1	19.75	チャート		
4.1	B3	884	82	108.41	剥片	4	3.25	0.95	9.21	チャート		
4.2	B3	884	82	108.41	碎片	1.5	0.5	0.55	0.29	チャート		
5	B3	950	40	108.48	剥片	4.7	2.8	1	11.97	チャート		
6	B3	955	154	108.74	剥片	5.75	2.3	1.05	8.73	チャート	第32図	

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	備考
7	B3	830	283	108.70	剥片	5.35	1.9	1.15	9.76	チャート	第32図	
8	B3	868	303	108.55	剥片	3.3	1.9	0.9	3.51	チャート		
9	B3	895	256	108.65	碎片	1.4	0.8	0.2	0.25	チャート		
10	B3	990	265	108.52	碎片	1.85	1.55	0.95	3.98	チャート		
1	C1	395	710	109.21	剥片	6.95	6.3	1.45	56.49	チャート	第33図	
1	C2	51	990	108.46	剥片	9.25	3.75	1.25	33.61	チャート		
2	C2	40	918	108.66	剥片	7.25	2.5	1.65	20.36	チャート	第32図	
1	C3	30	56	108.83	剥片	5.1	1.5	0.7	4.72	チャート	第32図	
2	C3	65	140	108.64	剥片	6.9	3.6	1.2	19.78	チャート	第32図	
3	C3	72	115	108.49	剥片	(7.40)	1.4	0.9	7.17	チャート	第32図	
4	C3	88	145	108.42	剥片	(3.80)	3.3	0.65	7.62	チャート		
5	C3	16	183	108.48	碎片	(2.40)	1.3	0.25	0.86	チャート		
攪乱	F2				剥片	6.5	10.25	2.6	163.14	チャート		

3 縄文時代の遺構と遺物

遺構

縄文時代の遺構として土壙5基が検出されている。

第1号土壙から縄文時代後期前葉の土器が出土した以外には遺物は認められなかった。

第1号土壙との覆土の類似性から第2号～第5号土壙も縄文時代後期前葉の所産としてとらえられた。

5基の土壙はC2、D2グリッドからまとめて見つかっている。

第1号土壙の平面形は楕円形である。断面は鍋底形である。長径×短径×深さは0.9×0.7×0.2m、主軸はN-43°-Eである。第36図の土器が覆土中から出土している。

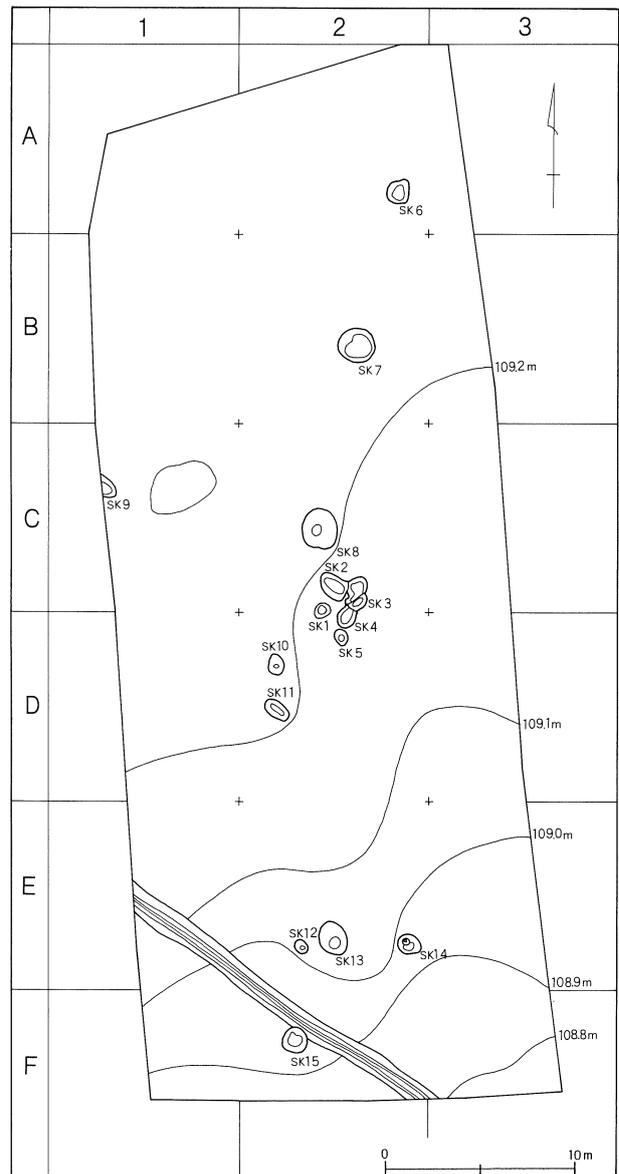
第2号土壙は不整形である。断面は鍋底形である。長径×短径×深さは1.5×1.0×0.3m、主軸はN-45°-Wである。

第3号土壙は不整形である。断面は皿形の浅い掘り込みである。長径×短径×深さは1.1×0.6×0.3m、主軸はN-55°-Eである。第4号土壙と重複している。

第4号土壙は不整形である。長径×短径×深さは2.8×1.1×0.15m、主軸はN-43°-Eである。

第5号土壙は平面形は円形である。断面は皿形の浅い掘り込みである。径0.8m、深さ0.15m、主軸はN-43°-Eである。

第34図 遺構全体図



遺物

第36図1が第1号土壙から出土したのみで、遺構からはこれ以外に小片も見つかっていない。また遺構外からの出土遺物もなかった。

第36図1は深鉢形土器である。

底部と口縁部の突起部分が認められるが、残存度は低い。口径は推定で15cm、同じく器高は23cm程度の小形の土器である。

底部から口縁部に直線的に移行し、口縁部がやや直

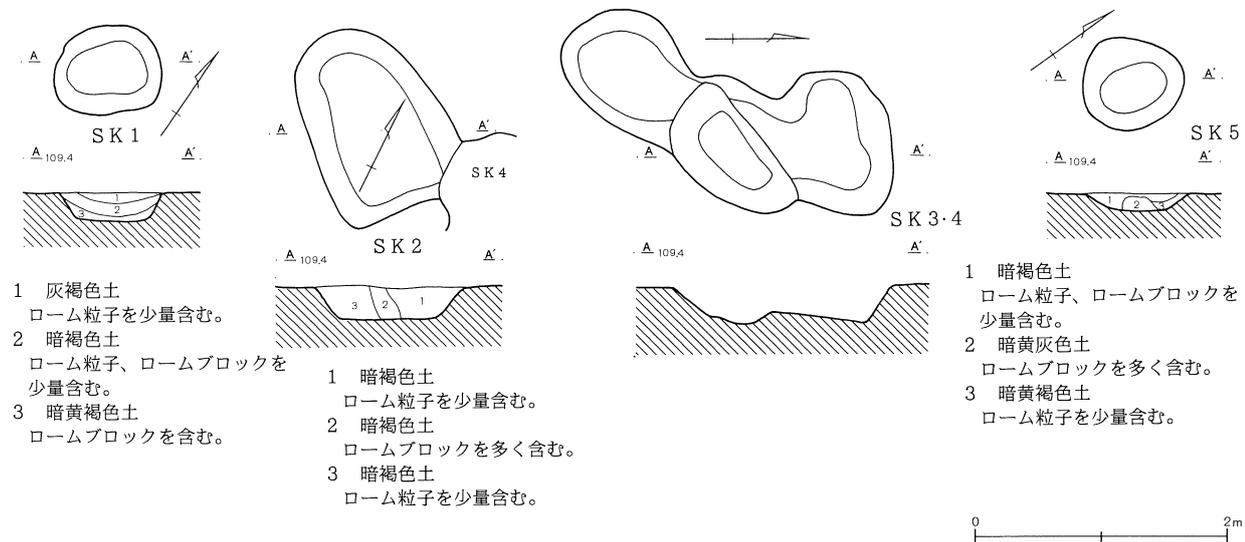
立気味に立ち上がる単純な形態である。

器面の遺存状況は不良であり、剥落箇所が多い。

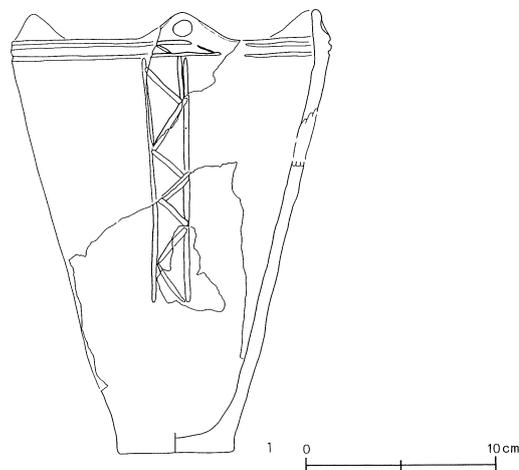
口縁部には緩い山形の突起部を施す。円形の文様を施している。口縁部には2条の沈線が巡り、沈線間には斜位の短沈線が施すものと思われるが明瞭ではない。突起部の下位に縦位の沈線を垂下させており、沈線間に鋸歯状に沈線文を施す。3単位を構成するものと思われる。

縄文時代後期前葉の堀之内1式である。

第35図 縄文時代の土壌



第36図 縄文時代の遺物



4 その他の遺構

溝1条と土壙5基が見つかった（第37図、第38図）。遺構内からの遺物は見られなかった。時期は不詳である。近世以降の所産であろう。

第1号溝（第37図）

E1・2、F2・3グリッドに位置する。確認された長さは19.0mである。直線的な溝であり、さらに発掘区外へと延びている。幅1.1m、深さ0.4mである。第15号土壙を切っている。

土壙（第38図）

発掘区全体に散在している。

第6号土壙はA2グリッドに位置する。平面は不整形円形、長径×短径×深さは1.4×1.2×0.3m、主軸はN-80°-Wである。

第7号土壙はB2グリッドに位置する。平面は不整形円形、径1.8m、深さ0.4mである。

第8号土壙はC2グリッドに位置する。平面は楕円形である。長径×短径×深さは2.1×1.8×0.5m、主軸はN-84°-Wである。

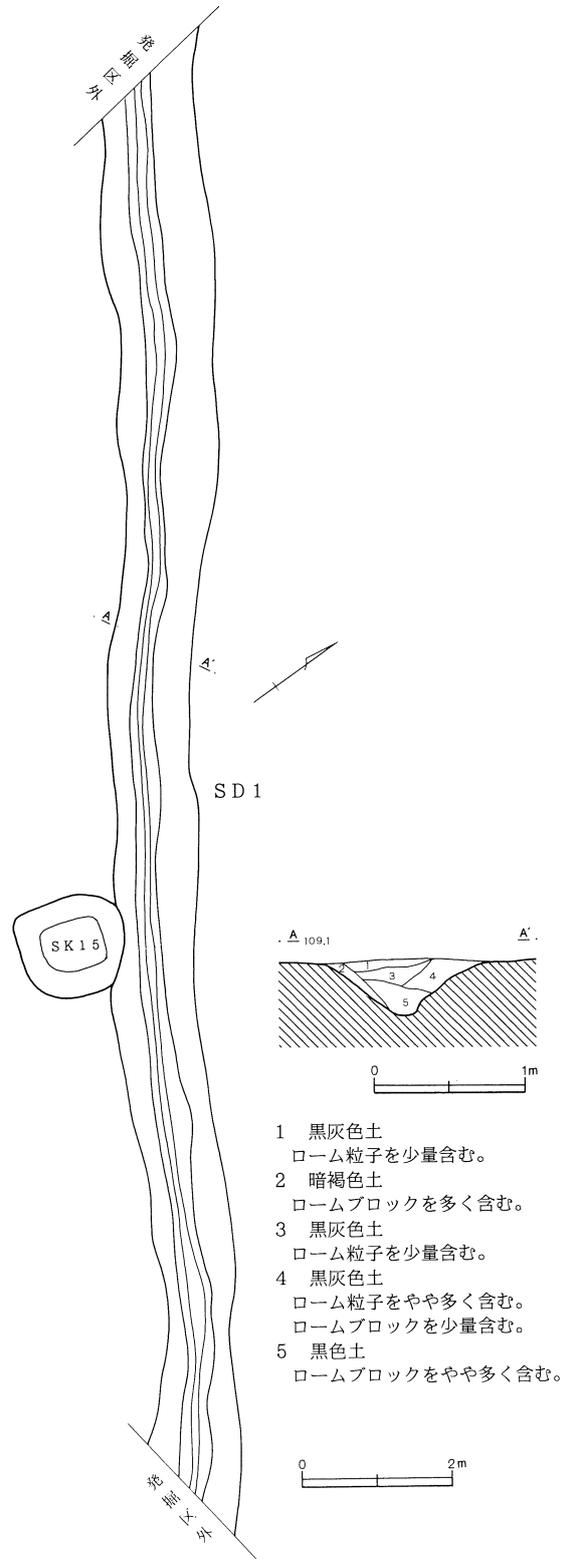
第9号土壙はC1グリッドに位置する。発掘区外にかかっており、規模は不明である。

第10号土壙、第11号土壙はD2グリッドに位置する。第10号土壙の平面は不整形円形、長径×短径×深さは1.1×0.9×0.4、主軸は北を指している。第11号土壙の平面は楕円形、長径×短径×深さは1.4×0.7×0.2m、主軸はN-47°-Wである。

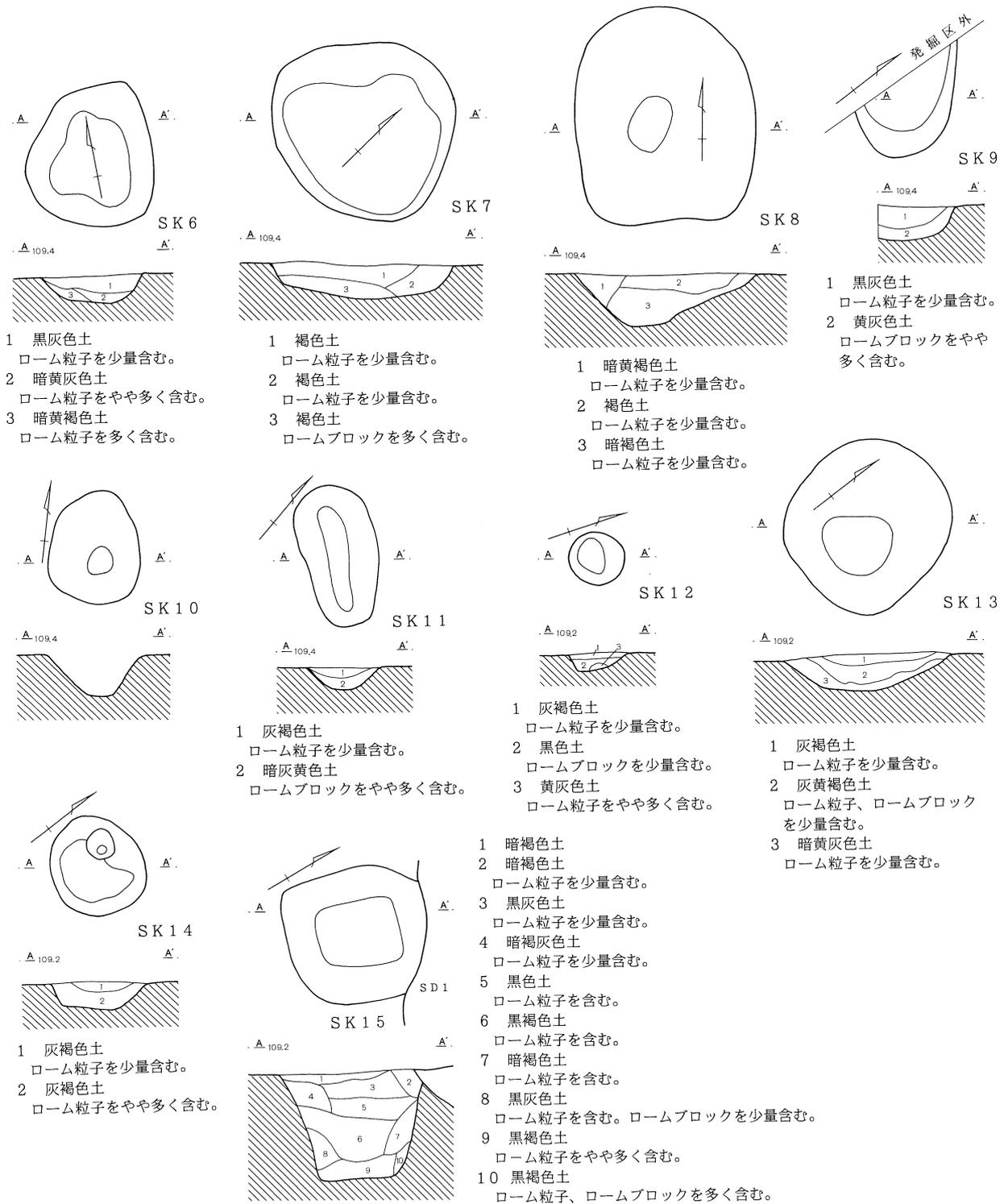
第12号土壙から第14号土壙はE2グリッドに位置する。第12号土壙は径0.5mの円形である。深さは0.2mである。第13号土壙は径1.5mのやや不整形な円形である。深さは0.4mである。第14号土壙は径1.0mのやや不整形な円形である。深さは0.3mである。

第15号土壙はF2グリッドに位置する。隅丸の方形に近い平面形態である。長径×短径×深さは1.4×1.3×1.1m、主軸はN-32°-Eである。

第37図 その他の遺構（1）溝



第38図 その他の遺構(2) 土壌



0 2m

VI 結 語

入間・武蔵野台地における砂川期の様相

はじめに

屋淵遺跡は、北緯35°51'32"、東経139°20'22"、武蔵野台地と入間台地を画する、入間川の北約2.8kmに位置する。本遺跡の東側を、圏央道の建設に伴い、台地を南北に縦断するように発掘調査が実施され、先土器時代の遺跡を多数調査してきた。圏央道関連遺跡の整理・報告書の作業が進む中、本遺跡の整理も相前後して実施することとなった。その結果、近接する砂川遺跡を示準とする、砂川期の良好な資料の蓄積を見ることができた。

現在、本遺跡と同時進行で整理をしている、坂東山遺跡の成果も合わせ、これら資料に対し、今度どの様に対峙して行くかを、筆者なりに検討することを本結語の目的とする。

1. 遺跡

入間川の兩岸、入間台地と武蔵野台地に分布する該期の遺跡は、北から鶴ヶ丘遺跡、西久保遺跡、屋淵遺跡、坂東山遺跡、城の腰遺跡、砂川遺跡、宮林遺跡、お伊勢山遺跡、中砂遺跡等が分布し、武蔵野台地東部に葛原遺跡B地点、天祖神社東遺跡、城山遺跡、丸山東遺跡、愛宕下遺跡、宮ヶ谷戸遺跡等が見られる。ここでは前者のみを対象とし、後者については今後の課題としたい。

屋淵遺跡

石器集中1箇所が検出された。調査区の東側限界まで遺物の分布が拡がっており、調査区外に延びる可能性が高い。県道建設に伴う発掘調査のため、調査範囲が帯状で、遺跡の全体は捉えづらい。また台地に直交する調査区であるため、他に石器集中が分布する可能性は高いが、ここでは、石器集中1箇所の単独遺跡として検討しておく。

石器組成は、狭義の Tool がナイフ形石器のみと単純であるが、一つの集中で12点は多い。石器石材はチ

ャートを主体に頁岩等を含むなど、該地域・該期の一般的在り方を示している（柴田徹氏の御教示による）。各母岩の数量と、製品・整った縦長剥片の在り方は、必ずしも比例しておらず、反って単独・小数母岩にナイフ形石器・縦長剥片が見られる。一方、石核は数量の多い母岩から、それぞれ1点検出されている。

谷を隔てて近接する中台遺跡は、剥片類のみの出土で、時期を決める要素に欠ける。最近同遺跡の調査を当事業団が実施し、ナイフ形石器等が検出されている。詳しくは、今後明かになると思う。

坂東山遺跡

西久保遺跡と同じ圏央道に伴う発掘調査である。石器集中1箇所が調査区の東側の限界近くで見つかり、遺物は調査区外に延びる可能性が高い。また、他に石器集中が有るかは、現時点では不明である。

器種組成はナイフ形石器が主体で、ブランディングチップが多いのが目につく。また、礫器・磨石等が伴っているのは注目される。砂川期の礫器は在家遺跡・丸山東遺跡で報告されており、今後注意していく必要があるかもしれない。

石器石材はチャートを主体に、珪質頁岩等が少量含まれる。チャートは良質なものと、節理の発達した粗悪なものがみられる。

西久保遺跡

砂川期の石器集中と、岩宿II期の石器集中が埋没谷北側の緩い斜面に、さも対面し整列しているかの様に、等高線に直交して並んでいる。

報告書では、石器集中7箇所としているが、石器集中5は問題があるため、今回の検討から除外する。6箇所の石器集中から総数2266点、ナイフ形石器33点が出土している。遺跡の規模等、入間台地の該期の中心的存在である。

各石器集中を概観すると、標高76m付近に纏まる石

器集中1 a～1 cと、標高77m付近に纏まる石器集中2～5の2つのグループに分けることができ、それぞれ3つの石器集中によって、構成されている。近接する石器集中間の母岩の共有は多く、接合は集中内のものが主体を占めている。しかし、石器集中・グループは独立した関係ではなく、石器集中間、グループ間での接合(石器集中1 bと石器集中4)、母岩の共有を見ることができる。

石器集中3は、該期資料の50%以上を有する石器集中で、径2.4mの範囲に非常に密集している。接合例も多く、集中内に限定されていることから、剥片剥離の作業空間とも考えられるが、ナイフ形石器15点など狭義の Tool も多く、一概に石器集中の性格を云々するのは難しそうである。

器種組成は、石器点数の多さに伴ってか、ナイフ形石器、彫器、搔・削器等充実している。しかし、相模野台地方面で共伴すると報告されている、尖頭器の存在は確認できない。

石器石材の認定に関して、報告書の時点で一部のチャートと粘板岩に分類したものが、本書、柴田氏による屋洲遺跡の報告では頁岩・珪質頁岩としている。筆者が関わった報告書で短期間のうちに、石材名の変更は混乱を生じる原因になり、反省すべきであるが、ここでは、緩やかな捉え方(数値等は、今後の課題として)で石器石材に触れておく。

石器に用いられている石材の主体が、チャートである点は変わらないが、約1割近い量で、安定して良質な頁岩(風化によって表面は白色・灰白色に近いが、新鮮な面を観察すると、色調のベースは黒色で細い白色の縞が入る)が含まれている。

チャートは良質なものが多く、原石面の形状から、亜角礫か円礫が用いられていたようである。赤玉石と愛称されている石材も、量的には少ないが、ナイフ形石器等の素材として使われている。

砂川遺跡

学史的に著名な遺跡で、該期の示準遺跡である。石器集中はA区とF区からそれぞれ3箇所、計6箇所見

つかっている。石器はナイフ形石器48点を中心に、彫器等が検出され、良好な接合資料から「砂川型刃器技法」が提唱されている。

石器石材は、報告書によると珪岩を主体に頁岩・黒耀石とされているが、珪岩の中に本報告でチャートとしたものが含まれていると思われる。

鶴ヶ丘遺跡

遺物は石器集中1箇所と、住居跡等の覆土から出土している。製品は原位置を離れた状態のものが多い。

ナイフ形石器と共に尖頭器が報告されているが、やや地点が離れるようである。石器石材の主体は、報告書に詳しくないが、掲載されている写真を見る限り、チャートと頁岩が多く使われているようである。また、尖頭器の1点は黒耀石製である。

宮林遺跡

道路拡幅に伴う発掘調査であるため、調査範囲は狭いが、石器集中5箇所と礫群が検出された。近接するお伊勢山遺跡でも該期の石器が出ているが、ナイフ形石器の量等から本遺跡を対象とした。

石器点数は446点と多い方ではないが、ナイフ形石器、彫器、搔・削器等器種は充実しており、石核に剥片類が接合する資料が多く、該期の剥片剥離の状況を知る良好な資料である。また、ナイフ形石器の破損品(ブランチングチップ)等が多数見つまっている点も注意される。

石器石材は、頁岩とチャートが主体で流紋岩・黒耀石等が含まれる。石材による剥片剥離の違いは少なく、打面再生を繰り返しながら、単設または両設打面から縦長剥片を連続して剥がしており、いわゆる砂川型刃器技法の範疇に含まれる。

中砂遺跡

複数期の重複遺跡である。該期の石器集中は5箇所あるが、遺物は土層堆積の薄いところに多く、他時期の石器集中と重複し、良好な状態とは言えない。そのため、石器の帰属時期が不明確なものも多く、特徴的な石器のみを取り上げた。

器種組成はナイフ形石器、彫器等があり、石核と剥

第39図 砂川期の遺跡



片の接合が見られた。石器に用いられている石材は、チャートと粘板岩であるが、粘板岩の多くは本報告で頁岩とした石材と近い。

城の腰遺跡

石器集中は4箇所確認されている。市道建設に伴う発掘調査のため、調査範囲は幅4.6m、長さ320mと制約が大きく、遺跡規模・石器集中の全貌は明らかでないが、石器集中の分布を見る限り、大規模遺跡になる可能性が高い。

石器集中は、ナイフ形石器を持たない2箇所も含め、全て該期に属すると思われる、2箇所で礫群が伴っている。器種組成は、ナイフ形石器が主体で、彫器1点を含む。表土・包含層資料の中に、尖頭器が見られるが、共伴に関しては不明である。

石器石材は、報告書にチャートを主体に酸性凝灰岩、黒耀石と記載されているが、掲載写真を見ると、酸性凝灰岩は本報告書で頁岩を分類した石材に似た印象を受ける。チャートは縞が入るもので、該地域で多く用いられている石材かもしれない。

2. 遺跡間の距離

各遺跡の直線距離を地図上で計測したものを表にした。遺跡は入間川兩岸の屋淵・西久保・坂東山・城の腰遺跡、小畦川流域の鶴ヶ丘遺跡、狭山丘陵から砂川堀流域の砂川・宮林・中砂遺跡の3つに分けて、便宜的に前者からグループa・b・cと呼ぶことにする。

遺 跡	→遺 跡	距 離
屋淵遺跡	→西久保遺跡	3.7km
	→坂東山遺跡	5.0km
	→城の腰遺跡	6.1km
	→鶴ヶ丘遺跡	9.9km
西久保遺跡	→坂東山遺跡	4.0km
	→鶴ヶ丘遺跡	7.4km
	→中砂遺跡	8.2km
	→砂川遺跡	8.4km
坂東山遺跡	→宮林遺跡	4.8km
	→砂川遺跡	5.0km
	→中砂遺跡	5.5km
	→城の腰遺跡	6.0km

城の腰遺跡	→宮林遺跡	8.0km
	→砂川遺跡	8.7km
砂川遺跡	→宮林遺跡	1.0km
	→中砂遺跡	2.0km
	→鶴ヶ丘遺跡	14.5km
中砂遺跡	→鶴ヶ丘遺跡	13.5km

遺跡間の距離を見ると、1kmから6kmの範囲（鶴ヶ丘遺跡が若干離れており、最も近い西久保遺跡で8.4kmある）に同じ時期の他遺跡が位置していることになる。同時期の遺跡が密集する地域として、一つの遺跡群として捉えることができるかもしれない。

次に、各遺跡の規模を見ると、全貌が明らかでない遺跡が多いため論究するのは危険であるが、現時点では、グループaは西久保遺跡、グループbは砂川遺跡が中心的遺跡として挙げられる。両遺跡は、複数の石器集中（ともに3箇所であった）が近接して、一つのグループを作り、そのグループが幾つか（ともに2つ）集まって遺跡を構成している。グループ内での接合・母岩の共有は盛んであり、グループ間においても一定の接合・母岩の共有が見られる点で共通している。また、各石器集中によって、ナイフ形石器の在り方に差がみられる。砂川遺跡はA区とF区で点数的には拮抗しているが、F区は欠損品が多くA区との間に明かな差がある。石器集中単位で見ると、A区が平均して保有しているのに対し、F区はF2ブロックに点数が片寄り、F3ブロックからは出土していない。一方、西久保遺跡はグループ間での差は少ないが、集中単位で見ると、石器集中3に全石器の半数以上が片寄って出土している。

他の遺跡は、屋淵・坂東山遺跡は石器集中1箇所だが、ナイフ形石器を10点以上保有している。宮林・城の腰遺跡はナイフ形石器を保有する石器集中と、保有しない石器集中があり、石器集中の数に対しナイフ形石器の点数は少ない。

以上、該地域の遺跡間の距離と内容を雑駁に概観したが、砂川遺跡に近接して、該期の遺跡がさも遺跡群を形成しているかのように見える。

3. ナイフ形石器

第40図 屋淵遺跡・坂東山東遺跡



該期のナイフ形石器に関して、砂川遺跡の報告書と、田中氏の形態分類がある。1次調査の報告書では、ナイフ形石器を第I～III形態の3つに分けている。2次調査では、再検討しA類～E類の5細分し、問題のあるE類を除き、それぞれ独立した形態として捉えている。

一方、田中氏は個々の差異を超えた共通性があるものを第1形態とし、第2形態と区分し整理している。ここでは、基本的に田中分類と各部位の名称に準拠するが、一部異なる部分があるかもしれない。

屋淵遺跡 (第40図)

各形態の説明は、事実記載を参照。

第1形態の大きさは、長さが6 cmに近いもの、5 cm前後、3～4 cm程度のものの3つに分けられる。幅は1～2 cmに纏まり、長さとの関係は顕著でない。厚さは1 cm以内に納まる。

第2形態は、先端を欠損するが、長さが5 cm前後で幅が3 cm近い大形品である。

坂東山遺跡 (第40図)

第1形態は、外形が三角形になるものが多い、左右対称の柳葉形になるものがある。刃部は右刃が多い。

第41図 西武蔵野遺跡



背縁の調整加工は、基端から先端まで Blunting が施される11~14、先端と基端周辺に Blunting が施される15・16がある。側刃縁の調整加工は14・16が Blunting、11が微細な剥離、12・13・15が裏面加工と多様である。

大きさは、長さ4~5cmと3cm大の2つに分けられ、幅はほぼ1~2cm大に納まる。厚さは1cm以下で屋淵遺跡より薄手である。

第2形態は、17は先端を斜めに切るような調整加工、18は先端が“コ字状”となり両側縁に調整加工を施している。大きさは、資料的に少ないが、長さ2cm大、幅1cm大、厚さ1cm以下に纏まっている。

西久保遺跡（第41図）

第1形態の外形は、三角形・左右対称の柳葉形・幅広で刃部が狭いものと多様で、刃部は右刃と左刃の割合が2対1である。

背縁の調整加工は、基端から先端まで施されるものは4・5・8・9・11~13・15・16・18・19・29で、5・18が粗い剥離、19は先端上半部が Blunting で下半部が微細な剥離、それ以外のものは Blunting、15は微細な剥離のみである。先端上半部のみに加工を施しているものは、1・10・14・17・20・21で先端に近い部分が Blunting、下半部に向かって微細な剥離が変わってゆく。

側刃縁の調整加工は、4・5・9・10~13・15・16・18~21・29が Blunting、8・14が微細な剥離、17は部分的に微細な剥離が施されており、明確な裏面加工は見られない。

大きさは、長さが5cm以上のもの、4~5cm、2~4cmの3つに分かれる。幅は1~2cmに納まり、長くなるとやや幅広になるが、それほど顕著ではない。厚さは1cm以下が主体である。

第2形態の外形は、先端を上にした三角形になるもの、先端を斜め・直角に切るように加工を施したものの、不整形の剥片の側縁に、調整加工を施すものなど多様である。

大きさは、長さが2cm大のものと、3cm以上のものに分かれる。幅・厚さに関しては差は見られない。

砂川遺跡（第42図）

第1形態の外形は、平行四辺形・三角形、また左右対称で柳葉形になるなど多様であるが、形状は流麗で整ったものが多い。

背縁の調整加工は、1~4・6・13・14・17~19は基端から先端まで Blunting が施され、3・14・16は基端付近は裏面加工になっている。5・11・12は上半部のみに加工が見られ、7は先端と基端に分かれて加工が施されている。12は8・15に似ており、第1形態の範疇に納まるか疑問もあるが、一応本形態に留めておく。

側刃縁の加工は、1~3・7・17・19が通常の Blunting 加工が施されているようで、17は裏面加工を伴うようである。6・13・14・18は裏面加工が施され、21・25は基端付近は裏面加工のみによって整形されている。また、13の刃縁部調整加工は特徴的である。

大きさは、長さは6cm以上のもの、4~6cmのもの、4cm以下の3つに分かれる。幅は大きくなると広がるが、それほど顕著な違いはない。厚さは長さ6cm以上のものが2cm大になる以外は、大凡1cm以内である。

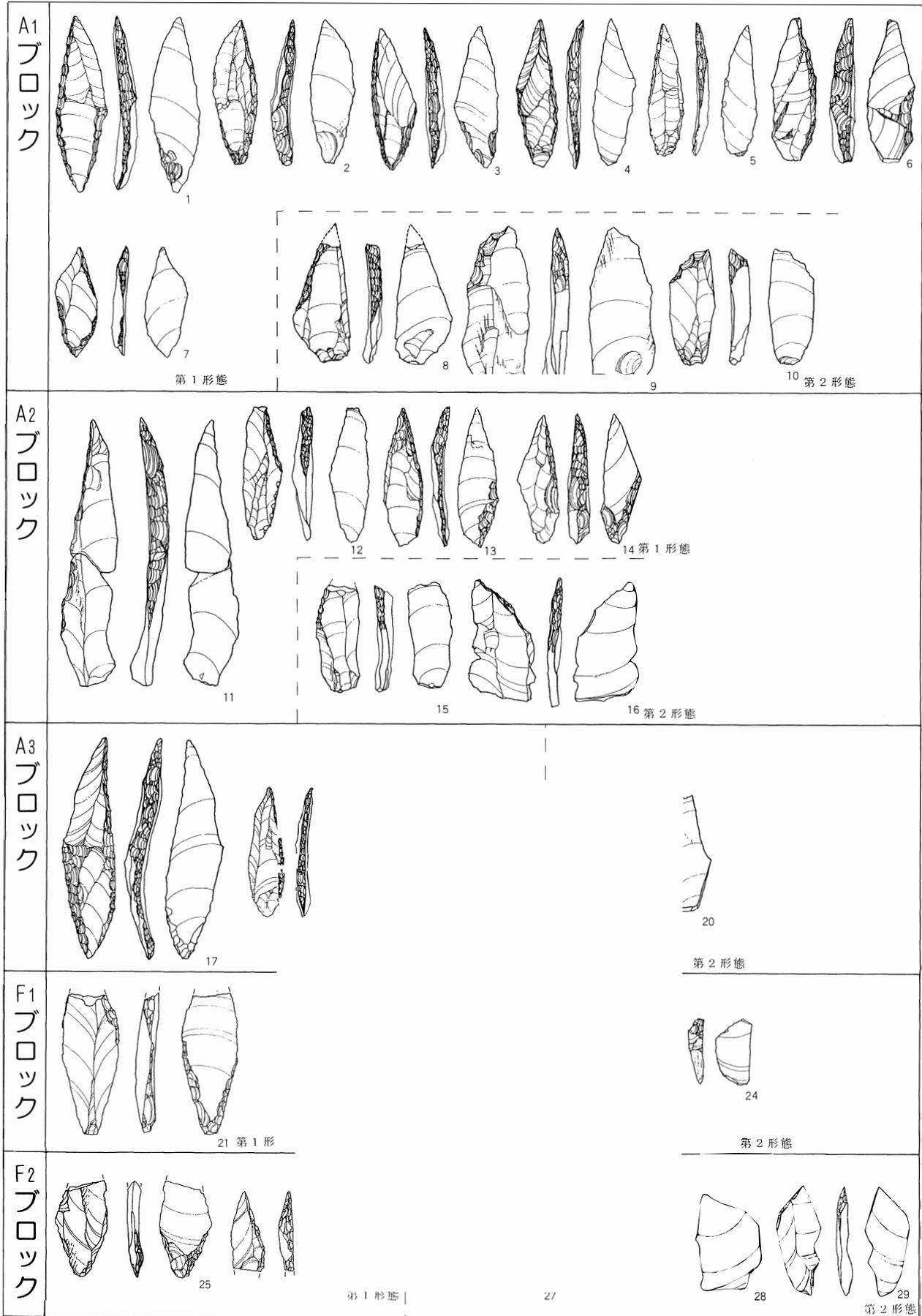
第2形態の外形は、三角形または方形に近いもの、剥片の一端を斜めに切るように調整加工が施されるものなど多様である。大きさは、第1形態同様、長さ5cm以上、3~4cm、3cm以下の3つに分かれる。幅は長さによる違いは見られない。厚さは1cm未満に大凡納まっている。

鶴ヶ丘遺跡（第43図）

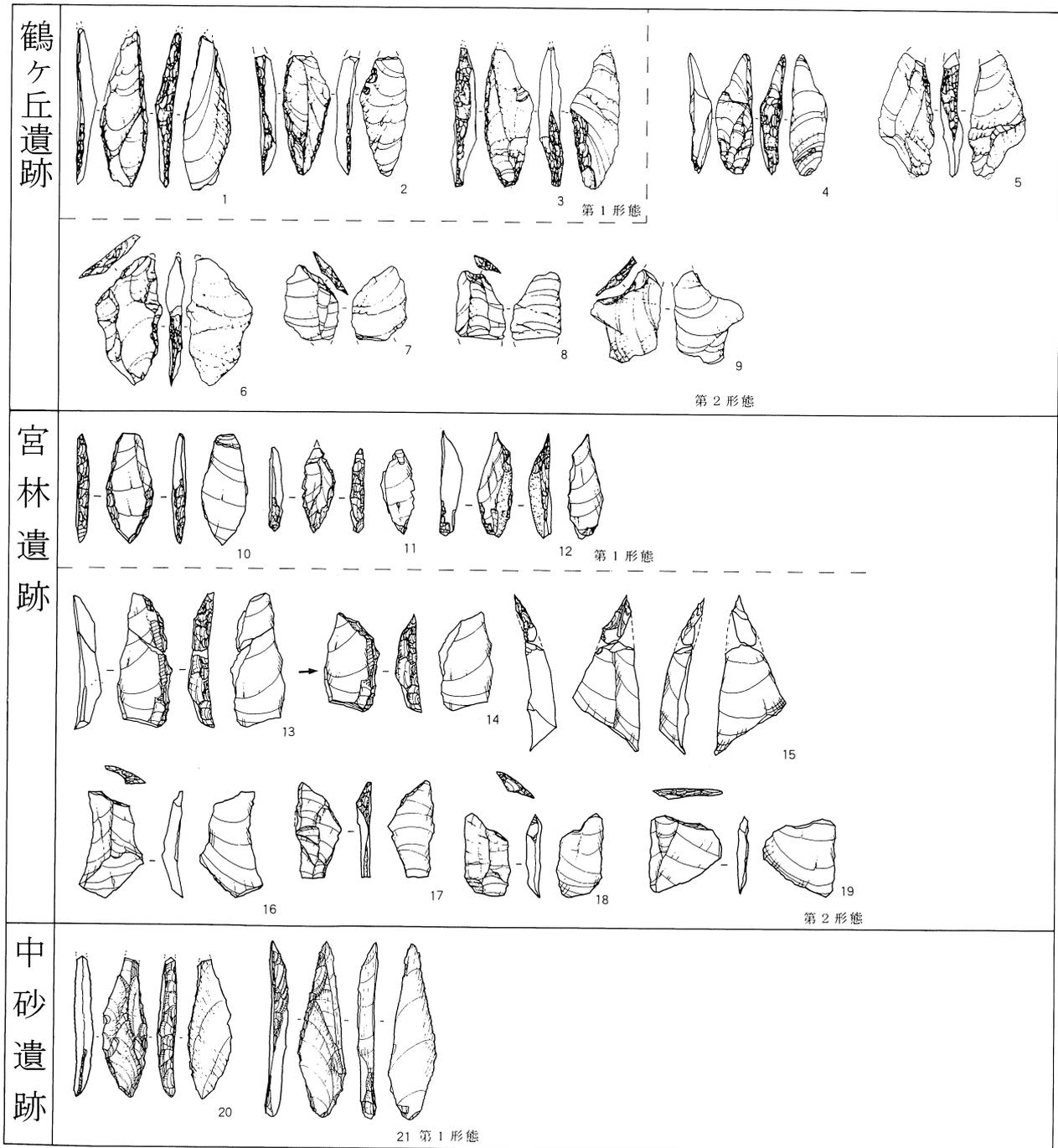
第1形態は、全て欠損品であるため、詳しくは不明であるが、大凡の外形は三角形になると思われる。調整加工は、背縁は基端から先端まで Blunting が施され、側刃縁は1・2が微細な剥離、3は裏面加工が施されている。大きさは、欠損を考慮し、長さは大凡4cm大に纏まり、幅・厚さも一定している。

第2形態は、剥片の一端を斜めに切るように調整加工を施しているものが多く、4は背縁のみに加工を施したもので、第1形態の範疇に含むべきかもしれない。大きさは、長さが2cm大、4cm前後の2つに分かれ、幅は1~2cm近くまでばらける。厚さは1cm以内に納まっている。

第42図 砂川遺跡



第43図 鶴ヶ丘遺跡・宮林遺跡・中砂遺跡



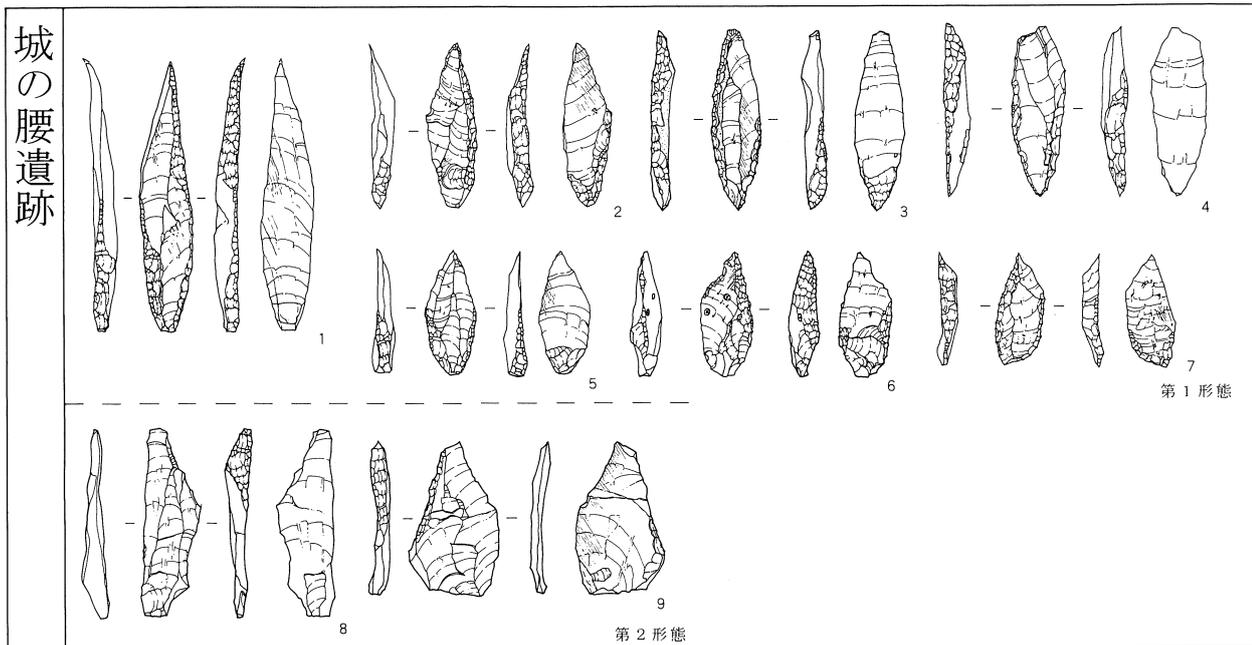
宮林遺跡 (第43図)

第1形態は、報告書でも指摘されているが、ここで取り上げている他石器群と若干様相が異なっている。外形は三角形とも11、左右対称で柳葉形になる10、不整形に近い平行四辺形の12である。調整加工は、背縁は基端から先端まで施される10・11と、先端のみに施す12が見られ、側刃縁には Blunting が施されてい

る。大きさは、長さ3cm前後の小形で、幅・厚さは一定している。

第2形態は、外形が三角形を呈するもの、背縁のみに調整加工が施されるもの、剥片の一端を斜めに切るように調整加工が施されるものが見られる。なお、14は13が欠損した後、再度ナイフ形石器に加工しなおしたものである。

第44図 城の腰遺跡



大きさは、長さ4 cm以上のものが欠損品で、完形のものでは3 cm前後に纏まる。幅は2 cm前後でばらつく。厚さは1 cm以内に納まる。

中砂遺跡 (第43図)

該期の最も特徴的な、第1形態のナイフ形石器2点を取り上げた。外形は平行四辺形になる、20は背縁の調整加工が基端から先端まで Blunting、側刃縁に微細な剥離が施される。21は背縁上半部と側刃縁に Blunting が施されている。大きさは、欠損を考慮すると、長さは5 cm大となり、幅・厚さは一定である。

城の腰遺跡 (第44図)

第1形態の外形は、三角形・平行四辺形を呈する、形状の整った1~4と、左右対称で尖頭状をしている5と不整形に近い柳葉形の6・7がある。調整加工は、背縁の基端から先端までが1~4・7、下半部のみの5、上半部のみの6である。また、1・4は上半部が Blunting で下半部が微細な剥離が施されている。側刃縁の加工は1・3・4・7は Blunting、2・6は裏面加工が施されている。

大きさは、長さ7 cm以上のもの、4~5 cm、3 cm前後の3つに分かれる。幅・厚さは一定している。

第2形態は剥片の一端を斜めに切るように調整加工を施したもので、長さ4~5 cm、幅1~3 cmのばらつ

きがあり、厚さは1 cm以内に納まっている。

以上、各遺跡出土のナイフ形石器を概観したが、次に若干整理をしておく。

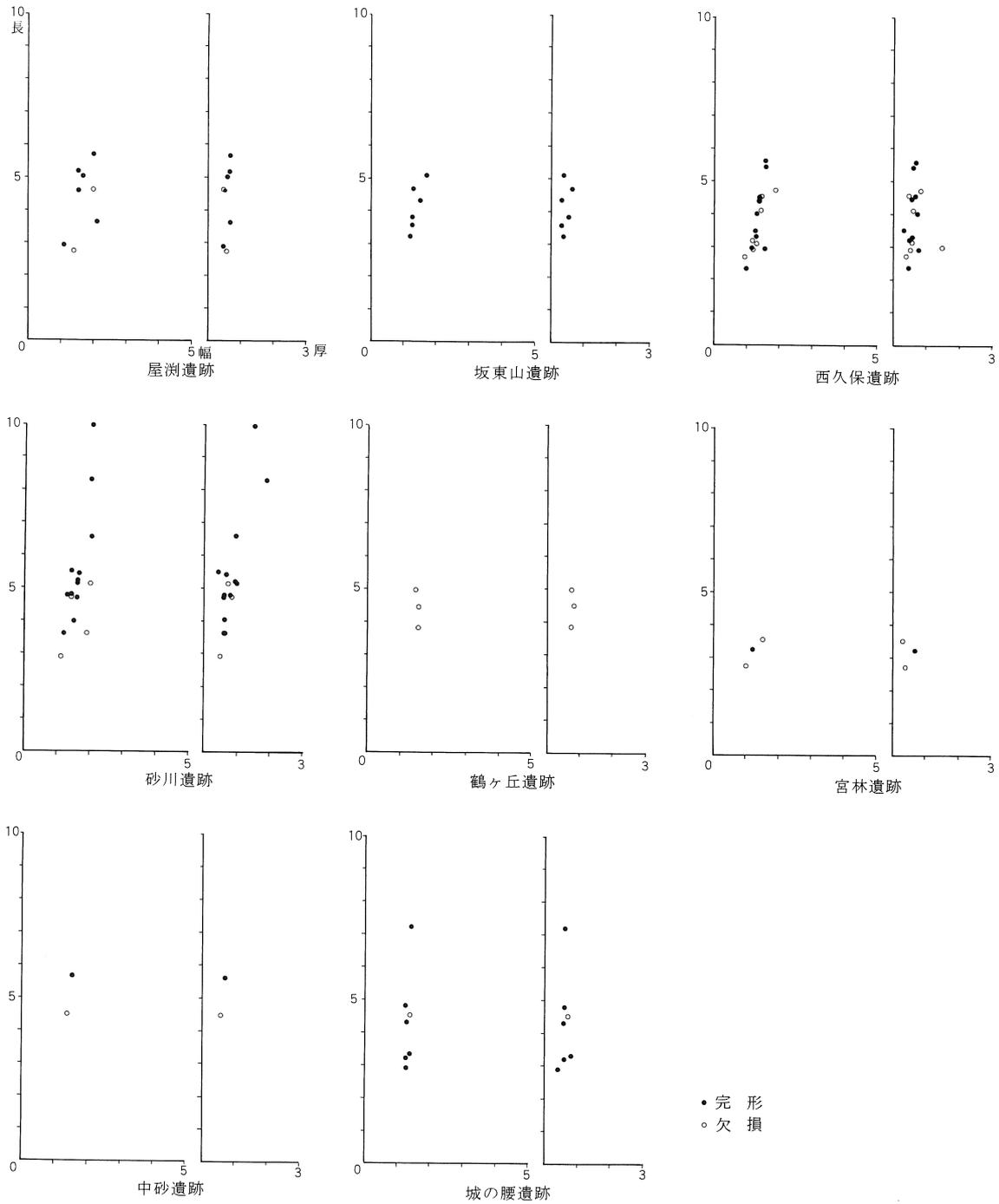
第1形態の外形は、三角形・平行四辺形が多く、柳葉形が含まれる。基端の形状は、尖るものが多いが錐状や側刃縁を抉るようなものではなく、丸・コ字状になるものがある。背縁の調整加工は基端から先端まで Blunting 調整が施されるものも多く、形状が流麗であるが、調整加工は力強い感じを受けるものもある。また、外形が平行四辺形のものの一部に、下半部が微細な剥離になるものがある。裏面加工は遺跡によって片寄りが見られる。刃縁調整加工はいまのところ砂川遺跡のみである。

大きさは、砂川遺跡で指摘された大中小の区分で大凡捉えられるが、大形のは少なく、多くの遺跡では中小の区分が妥当である。

石器石材とナイフ形石器との関係は、チャート・頁岩のものも多く、若干黒曜石・ガラス質黒色安山岩が用いられているが、形状を苦勞して似せているように感じられる。

第2形態の外形は多様で、第1形態に比べ規範が緩く、異なる原則が働いていたように感じられる。

第45図 ナイフ形石器 (第I形態)



おわりに

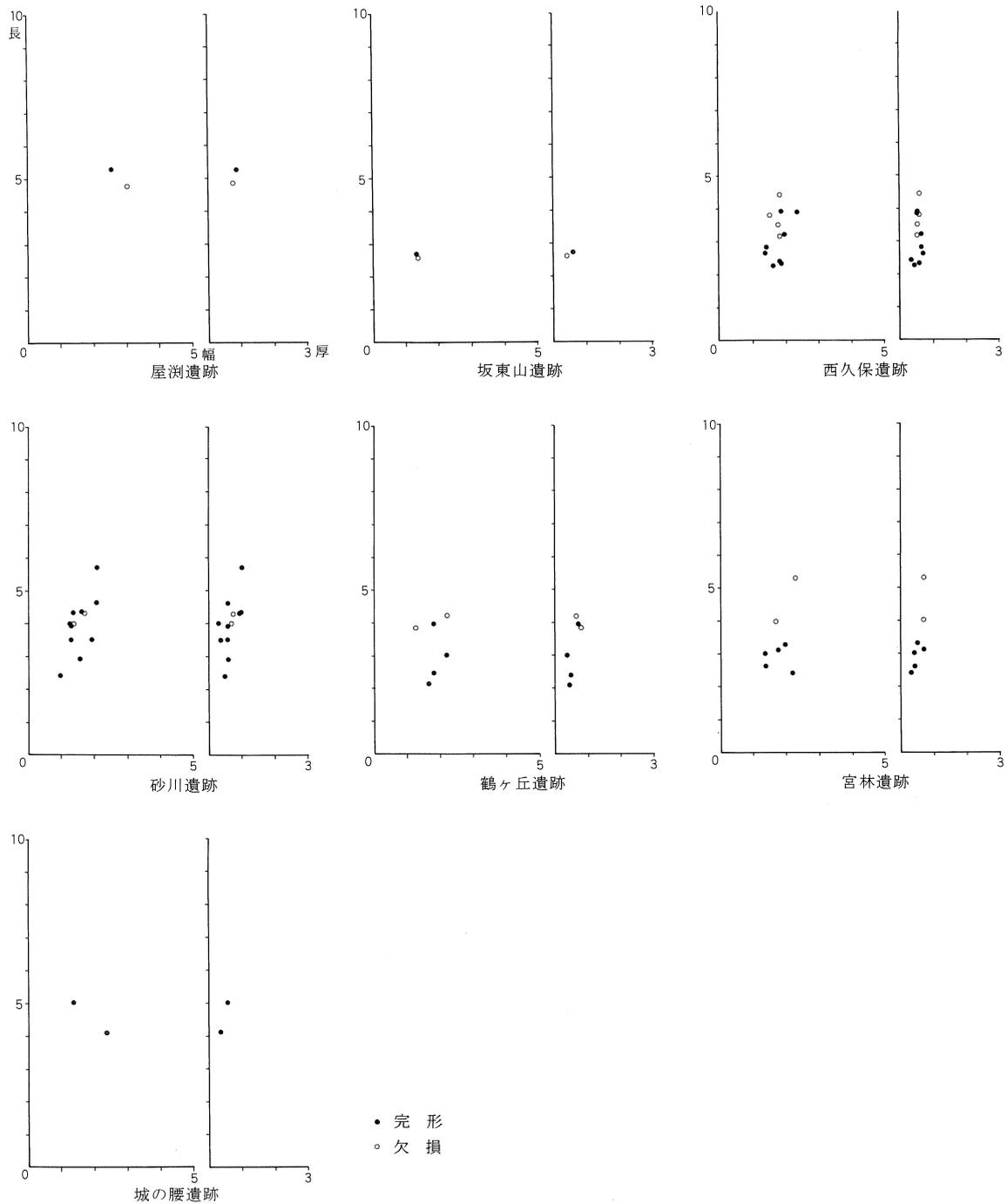
以上、当該地域の砂川期の遺跡を検討してきたが、最後に若干の整理と問題点の提示をしておく。

まず、近接する地域内に該期の遺跡が纏まっている状況が把握できた、これが何を意味しているかは未解決であるが、石器集中のグループが複数で構成される

遺跡、石器集中は1箇所であるが、ナイフ形石器を多数保有する遺跡、石器集中は複数あるがナイフ形石器の数はそれほどでない遺跡の、各パターンが見られた。

ナイフ形石器は遺跡間で細かい点の違いはあるが、全体的に非常に近似しており、これらを有意な纏まりと考えると、再度砂川型式に関して考えてみたい。

第46図 ナイフ形石器（第2形態）



田中氏の「砂川型式」に対する批判として、汎列島規模での型式が存在するか、それが果たして型式と言う概念に馴染むのかということがある。先土器時代は遊動生活で、かつ人口圧が低いため、より広い範囲を生活空間として利用した結果、型式の空間的拡がり大きいといった考えも可能かもしれないが、実際の資

料を見る限り、縄文土器の変化よりも著しく広いとは思えない。

砂川型式の範囲をどのように考えるのか、ナイフ形石器の2つの形態、尖頭器の共伴関係等とするのならば、その設定に同意できる部分は多い。しかし、ナイフ形石器の特徴が地域に存在する場合、より狭い範囲

で型式を設定し、広い空間で共通する要素の石器群が、時間的に限定できる場合、ホライズンとして認識するほうが妥当と考える。すなわち、より限定した型式としての砂川式の提唱であり、型式間での影響関係を見極める努力が、最も要求される課題であると言える。

ここで取り上げた資料に、武蔵野台地の一部を加え“砂川期：砂川式”として捉えなおし、大宮・下総・相模野台地等の該期石器群と比較検討することで、何が見えてくるのか考える必要がある。筆者は石材決定論者ではないが、ナイフ形石器を作る際、石材が具現化に一定の制約となるであろうことは確かである。それは、石器の形にどの程度影響を与えるのか？ その際、石材の嗜好がどの程度働くのであろうか。該地域

でチャートと頁岩は在地系石材であるが、それだけが用いられたのだろうか。

例えば、大宮台地の場合で考えると、各遺跡によって黒曜石・頁岩系・チャートが片寄って用いられており、ナイフ形石器の形態も該域のものに近似するものと、かなり異なる形態のものがある。しかし、ナイフ形石器の形態に各遺跡を繋ぐ要素を見いだすことができ、同一時期の石器群として押さえることができる。荒川低地を挟んだ2つの地域において、共通する要素を持ちながら異なる製作原理が働いているようである。それぞれの独自性と、開放性をもって連結する単位を、型式として捉えておきたい。

参 考 文 献

- 伊藤博司 1991『城の腰遺跡・霞台遺跡（第8次）』青梅市教育委員会
- 大塚達朗 1995「榎原文様式論」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第13号東京大学文学部考古学研究室 pp.79～141
- 織笠 昭 1978「鈴木遺跡VI層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡I』鈴木遺跡調査団 pp.278～328
- 金子直行 1994「貝殻沈線文系土器群終末期の様相－吹切沢式と子母口式の関係について－」『縄文時代』第5号 pp.29～51
- 栗岡 潤・西井幸雄 1995『西久保／金井上』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 佐藤宏之 1991「日本列島内の様相と対比－2極構造論の展開－」『石器文化研究シンポジウムA T 降灰以前の石器文化』3 石器文化研究会 pp.129～140
- 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 砂川遺跡調査団編 1974『砂川先土器時代遺跡－第2次調査の記録』所沢市教育委員会
- 鈴木秀雄・西井幸雄 1996『坂東山／坂東山西／後B』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第166集
- 竹岡俊樹 1979「中部地方南部における〈石刃〉とナイフ形石器について」『史潮』新5号歴史学会 pp.114～135
- 田中英司 1979「武蔵野台地II b 期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号神奈川考古同人会 pp.65～74
- 田中英司 1984「砂川型式石器群の研究」『考古学雑誌』第69巻第4号日本考古学会 pp.1～33
- 田中英司 1987「埼玉県の石器と北海道の石器」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会 pp.13～27
- 谷井 彪 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
- 谷井 彪・細田 勝 1976「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号日本考古学協会 pp.37～67
- 戸沢充則・安藤政雄 1987「7 砂川遺跡」『所沢市史原始・古代資料』所沢市史編さん委員会 pp.39～54
- 長崎潤一他 1991『お伊勢山遺跡の調査第2部旧石器時代』早稲田大学所沢校地文化財調査室
- 西井幸雄 1986『中砂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第60集
- 西井幸雄 1987「3 中砂遺跡」『所沢市史原始・古代資料』所沢市史編さん委員会 pp.22～27
- 松村明子 1978「鈴木遺跡IV層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡I』鈴木遺跡調査団 pp.252～277

付編

屋淵遺跡・中台遺跡のローム層序

パリオ・サーヴェイ株式会社

I. はじめに

埼玉県の平野部と西の関東山地の間には、丘陵や台地が分布している。台地は北から、本庄台地、榑引台地、江南台地、東松山台地、高坂台地、毛呂台地、坂戸台地、飯能台地、川越台地、野火止台地などがならんでいる。これらの台地は、山地から平野に流れ出た河川の扇状地として形成された。

中台遺跡・屋淵遺跡周辺の地形・地質は、堀口(1986)により以下のように記載されている。飯能台地は西は山地に、北は高麗丘陵と小畦川に、南は入間川に限られ、入間川の扇状地として形成されたものである。さらに台地は段丘化しており、段丘面は北から武蔵野段丘I面、武蔵野段丘II面、立川面に分けられている。いずれの段丘も入間川に平行して南西-北東方向に長く伸びる。

武蔵野段丘I面は、古東京湾の海退により埼玉平野地域が離水していく過程で侵食あるいは堆積をくりかえしてつくられた堆積物で構成され、その上位に下末吉ローム層の中部層あるいは上部層をのせる段丘面である。武蔵野段丘I面は、武蔵野台地の成増面に対比される。成増面は武蔵野台地の区分ではM1面に相当し、およそ8万年前に段丘したと考えられている(久保, 1988)。

また、武蔵野段丘II面は、古東京湾の海退により延長川となった河川が、下末吉面や武蔵野段丘面を侵食して形成した段丘面である。武蔵野段丘II面は、武蔵野台地の川越台、大井台に対比される。川越台、大井台は赤羽台や本郷台などのM2面に対比され、それらはおよそ6万年前に段丘化したと考えられている(久保, 1988)。これらのM2面を構成するM2砂礫層の上位には、武蔵野ローム、立川ロームが堆積する(貝塚,

1979)。また、立川面は、およそ3万年以降に段丘化したと考えられている(久保, 1988)。

中台遺跡・屋淵遺跡は、飯能台地の武蔵野段丘I面の段丘上の南西部に位置する。遺跡付近は南小畦川の上流部にあたり、南小畦川およびその支谷により開析が進んでおり、遺跡も台地平坦面上から斜面にかけて立地する。

今回の発掘調査により、両遺跡とも褐色火山灰土層(いわゆるローム層)中から、旧石器時代のブロックなどが検出されている。今回の自然科学分析調査では、両遺跡の石器出土層準の年代観を検討するためにローム層の層序対比を行う。ローム層の層序対比には、火山ガラス比分析および重鉍物分析を行う。火山ガラス比分析では、ローム中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの産状を調べることにより、降灰層準を推定する。重鉍物分析では、ローム層中の重鉍物組成を調べ、その層位的変化を指標として対比に用いる。武蔵野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いため、重鉍物分析はとくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では分析例がないため詳細な対比はできないが、武蔵野台地や大宮台地との対比を試みる。

II. 試料

1. 屋淵遺跡

試料採取地点は、ほぼ段丘の平坦面上に位置する。土層断面は、I層からIV層に分層されており、いずれもローム層である。I層・II層は褐色ローム層、III層・IV層は暗褐色ローム層で暗色帯である。さらにII層はII1層とII2層に、III層はIII1層とIII2層に分層されている。各層は中台遺跡に対比されているが、II1層とII2層およびIII1層とIII2層は中台遺跡ほど明瞭に

分層されない。

試料は上位よりI層からIV層まで、試料番号1から31までは5cm厚で連続的に、試料番号31から35までは10cm間隔で採取した。以上の柱状図と試料採取位置を図1に示す。この中から、重鉍物分析に試料番号4～26の偶数番号の試料の計12点、火山ガラス比分析に試料番号2～18の偶数番号の試料の計9点を選択する。

2. 中台遺跡

試料採取地点は、ほぼ段丘の平坦面上に位置する。土層断面は、上位より1層、2層、I層からIV層に分層されており、I層以下がローム層である。I層・II層は褐色ローム層、III層・IV層は暗褐色ローム層で暗色帯である。II層はさらにII1層とII2層に分層される。II2層はII1層と下位のIII層との漸移層で、II2層下部は暗褐色を呈する。また、III層も色調によりIII1層とIII2層に分層されており、III1層のほうがIII2層よりやや暗色である。

試料は上位よりI層からIV層まで、試料番号1から

29までは5cm厚で連続的に、試料番号29から30までは10cm間隔で採取した。以上の柱状図と試料採取位置を図2に示す。この中から、火山ガラス比分析に試料番号1～17の奇数番号の試料計9点を選択した。

III. 分析方法

1. 重鉍物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

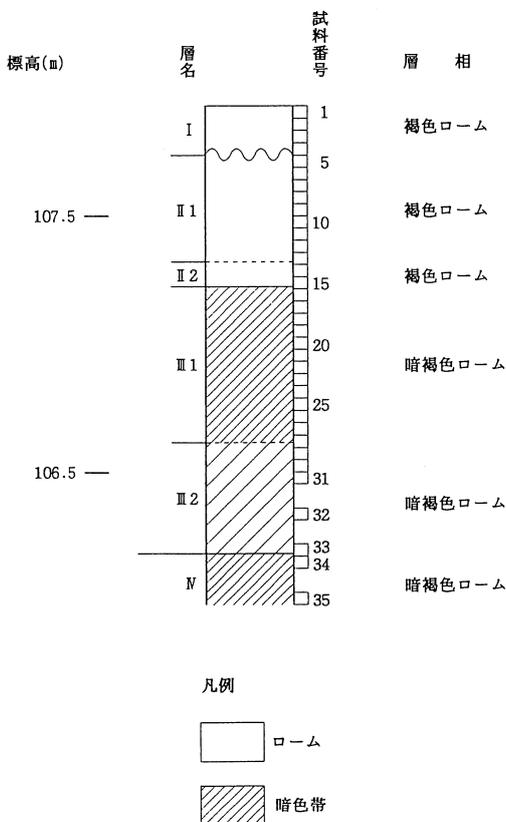


図1 屋淵遺跡 柱状図および試料採取位置

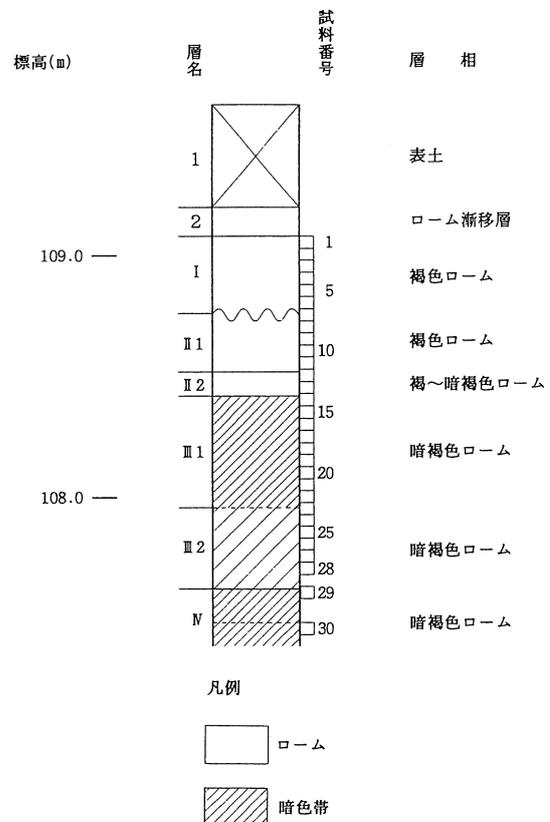


図2 中台遺跡 柱状図および試料採取位置

2. 火山ガラス比分析

重鉍物分析の処理により得られた軽鉍物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉍物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

IV. 結果

1. 屋測遺跡

(1) 重鉍物分析

カンラン石は試料番号10に量比の極小層準が、試料番号20に極大層準が認められる。斜方輝石と単斜輝石の両輝石はカンラン石とはほぼ逆の傾向を示す。試料番号10に極大層準が、試料番号20に極小層準が認められる。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号4～16ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位よりみて試料番号18から16にかけて急増、試料番号16から12にかけて漸増、それより上位では減少する。このバブル型火山ガラスは、その産出層準と形態から始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)に由来すると考えられる。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられており(町田・新井, 1992)、九州から東北地方までほぼ全国的に検出される広域テフラである。一般に、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い(早津, 1988)。従って、本地点におけるその降灰層準は試料番号16～17付近と考えられる。

試料番号2～4では、中間型火山ガラスおよび軽石型火山ガラスが他の試料よりも多く認められる。この火山ガラスは、その産出層準と形態から立川ローム層最

上部ガラス質火山灰(UG:山崎, 1978)に由来すると考えられる。UGは、浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は約1.2万年前とされている(町田・新井, 1992)。本分析結果の産状はやや拡散しているが、本地点におけるその降灰層準は試料番号2～3付近と考えられる。

2. 中台遺跡

(1) 火山ガラス比分析

試料番号3～15ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位よりみて試料番号17から15にかけて急増、試料番号15から13にかけて増加、それより上位では減少する。このバブル型火山ガラスは、その産出層準と形態からATに由来すると考えられる。本分析の産状から、本地点におけるその降灰層準は試料番号15～16付近と考えられる。

試料番号1～5では、中間型火山ガラスおよび軽石型火山ガラスが認められる。この火山ガラスは、その産出層準と形態からUGに由来すると考えられる。本分析結果の産状はやや拡散しているが、本地点におけるその降灰層準は試料番号2～3付近と考えられる。

V. 考察

1. 屋測遺跡

UGはこれまでの分析により、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序における“III層”(以下同様の意味で“ ”を用いる)上部に降灰層準がある場合が多い。今回の分析結果では、UGの降灰層準は試料番号2～3のI層中部付近と考えられることから、ほぼI層が立川ローム層の“III層”と考えられる。

また、試料番号10の両輝石の極大は、小林ほか(1971)の羽鳥の分析例をはじめとして当社による多くの分析例にも共通してみられる第1暗色帯(以下BB I)の“V層”上限付近の輝石の極大に対比される。したがって、II 1層上部～中部がおおよそ立川ローム層の“IV層”に、試料番号10のII 1層中部以下が立川ロームの“V層”以下に対比される。

ATの武蔵野台地における降灰層準は立川ローム層

表1 屋測遺跡

重鋇物および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鋇物	その他	重鋇物同定粒数	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	計数粒数
2	—	—	—	—	—	—	—	12	40	14	184	250
4	81	108	15	0	13	33	250	51	20	7	172	250
6	67	129	26	1	10	17	250	122	2	3	123	250
8	73	104	38	3	10	22	250	144	3	3	100	250
10	62	127	28	0	7	26	250	144	2	6	98	250
12	68	120	26	0	10	26	250	180	1	5	64	250
14	84	109	30	3	7	17	250	170	3	5	72	250
16	99	97	27	2	9	16	250	159	3	2	86	250
18	129	69	25	4	7	16	250	11	3	3	233	250
20	132	66	22	4	7	19	250	—	—	—	—	—
22	129	66	24	5	2	24	250	—	—	—	—	—
24	121	87	13	6	6	17	250	—	—	—	—	—
26	123	83	13	2	5	24	250	—	—	—	—	—

表2 中台遺跡

火山ガラス比分析結果

試料番号	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	計数粒数
1	12	55	14	169	250
3	38	23	17	172	250
5	68	14	8	160	250
7	101	5	4	140	250
9	115	4	3	128	250
11	164	1	4	81	250
13	193	0	4	53	250
15	154	2	4	90	250
17	10	4	1	235	250

の“VII層”の上限付近であることがこれまでの分析例から知られている。また、試料番号20のカンラン石の極大は、当社による分析例に共通してみられる武蔵野台地の第2暗色帯（以下BB II）の上限付近のカンラン石の極大に対比される。これらにより、II 1層中部からII 2層までが立川ロームの“V層”～“VI層”にIII 1層以下が“VII層”以下であると考えられる。以上のことにより、I層から検出された砂川期のナイフ型石器を伴うブロックは、AT降灰以降ではほぼUG降灰前後の時期と考えられる。

2. 中台遺跡

今回の分析結果では、UGの降灰層準は試料番号2～3のI層上部～中部付近と考えられることから、ほぼ1層上部が立川ローム層の“III層”上部と考えられる。また、ATの降灰層準は試料番号15～16のIII 1層上部付近であることから、I層～II 2層が立川ローム層の“III層”～“VI層”に、III 1層以下が“VII層”以下に対比される。以上のことにより、II 1層下部からII 2層で検出された大形剥片のブロックは、AT降灰以

降でUG降灰以前の時期と考えられる。

3. 屋測遺跡と中台遺跡の対比および暗色帯について

今回の分析結果から、屋測遺跡と中台遺跡のI層～II 2層はほぼ対比され、武蔵野台地の立川ローム層の“III層”～“VI層”にあたる。今回の分析結果ではそれ以上の詳細な対比はできないが、層位的にみて概ね各層ごとに対比される可能性がある。

また、ローム層中の暗色帯の成因については、かつてそれが表層土であったときに腐植が形成され集積したためであり(黒部, 1963)、暗色帯の腐植の給源はススキ・ササなどのイネ科草本であるともいわれている(加藤, 1962)。しかし、暗色帯の成因には、植生のほかに堆積母材の性状、堆積速度、気候、地形、堆積後の経過時間などの様々な要因が関連する。したがって、局地的な場合を除いて暗色帯は層序対比の指標とはならない。今回の屋測遺跡と中台遺跡は非常に近接しているが、暗色帯の土色の違いが認められている。それは、上述した要因が異なっていたことを示唆する。

また、一般的に暗色帯は武蔵野台地では2層認めら

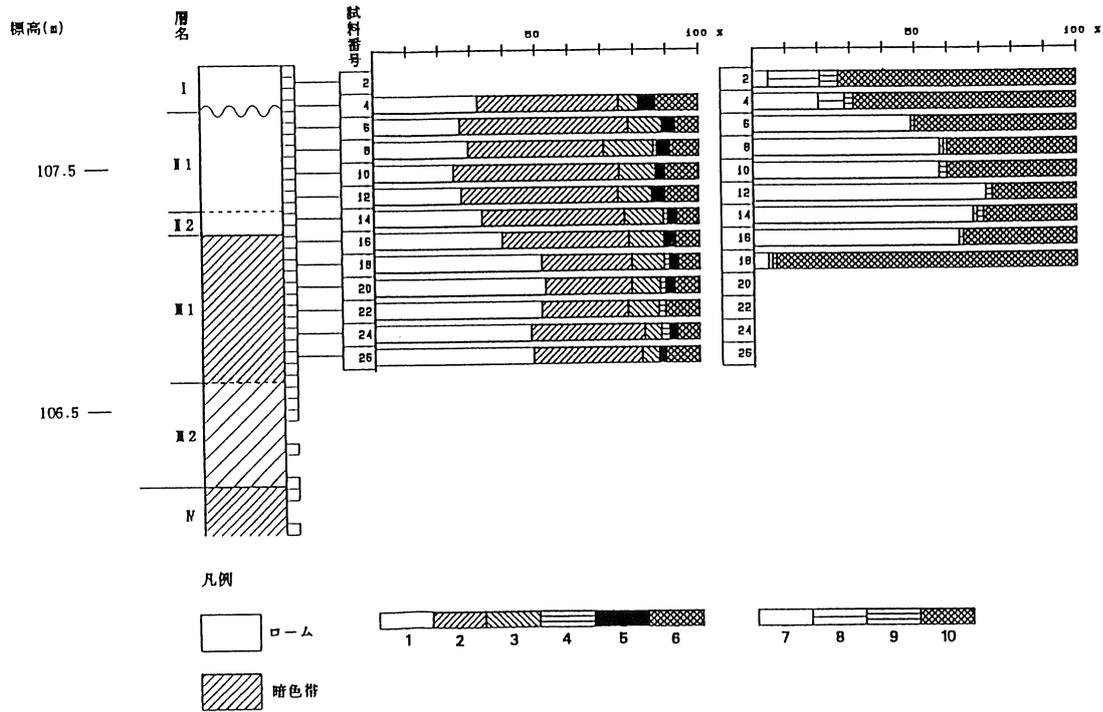


図3 屋測遺跡 重鉱物組成および火山ガラス比

1:カンラン石, 2:斜方輝石, 3:単斜輝石, 4:角閃石, 5:不透明鉱物, 6:その他,
7:バブル型火山ガラス, 8:中間型火山ガラス, 9:軽石型火山ガラス, 10:その他.

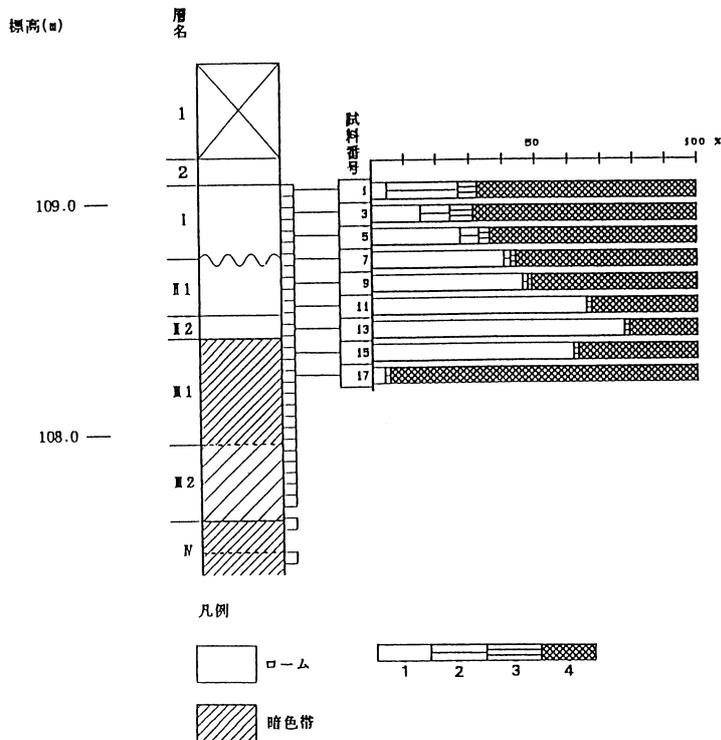


図4 中台遺跡 火山ガラス比

1:バブル型火山ガラス, 2:中間型火山ガラス, 3:軽石型火山ガラス, 4:その他.

れ、大宮台地ではI層認められる。当社によるこれまでの分析例により、武蔵野台地のBB IからBB IIが大宮台地ではほぼ暗色帯1層に対比され、さらに武蔵野台地のBB IIの下限は大宮台地の暗色帯下限により若干上位になる可能性があることが推定されている。今回の分析地点では、武蔵野台地のBB Iにあたる暗色帯が肉眼的には認められず、BB IIにあたる暗色帯の上限は認められた。しかし、BB IIに相当する暗色

帯の下限は認められておらず現状では武蔵野台地や大宮台地との対比はできていない。

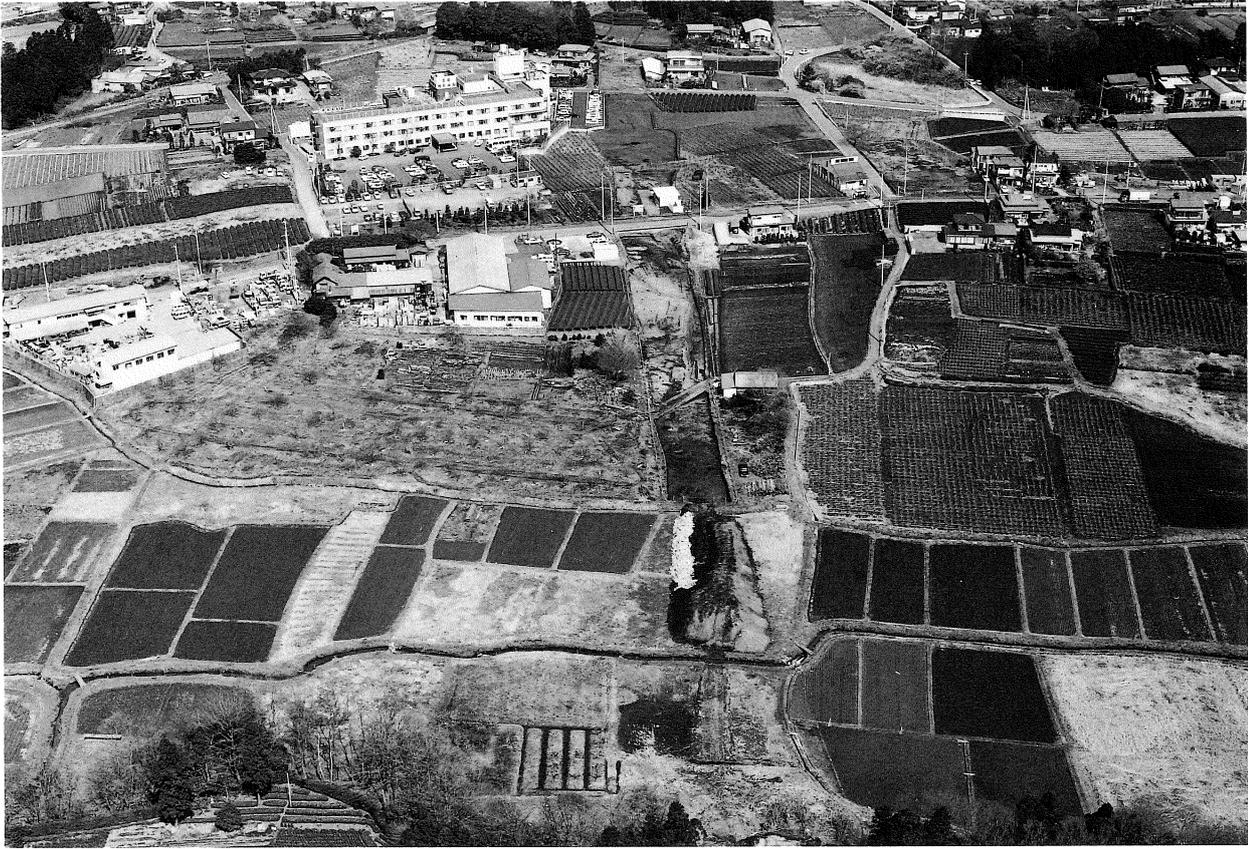
今回の分析では、両遺跡のローム層最上部からAT降灰層準までの層序対比がなされた。今後、武蔵野台地のBB IIの下位の“X層”中部でのカンラン石の極大を本地点周辺で確認することにより、武蔵野台地の立川ローム層下部までの対比が可能となろう。さらに、周辺での分析例を蓄積することが必要である。

<引用文献>

- 早津賢治 (1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー - ATにまつわる議論に関係して - 考古学研究, 34, p. 18-32
- 堀口万吉 (1986) II埼玉県の地形と地質。「新編埼玉県史別編3自然」, p. 7-74, 埼玉県.
- 貝塚爽平 (1979) 東京の自然史-増補第二版-. 239 p., 紀伊國屋書店.
- 加藤芳朗 (1962) 関東ローム層の細砂軽鉱物組成. 地球科学, 62, p. 11-19.
- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究. 第四紀研究, 10, p. 231-252.
- 久保純子 (1988) 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形-風成テフラを供給された名残川の谷地形-. 地理学評論, 61, p. 25-48.
- 黒部隆 (1963) 立川ローム層の腐植に関する生成学的研究 (第1・第2報). 日本土壤肥科学雑誌, 34, p. 182-184, 203-204.
- 町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, p. 339-347.
- 町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276 p., 東京大学出版会.
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p. 231-246.

(付記) 本報告書では、紙数の都合上、火山ガラスと重鉱物の写真図版を割愛した。なお当社より提出した報告書「県道飯能寄居線事業地内埋蔵文化財発掘調査にかかる屋瀬・中台遺跡採取土壌の自然科学分析報告」は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に保管されているので、写真図版はこの報告書原本を参照頂きたい。

写真图版



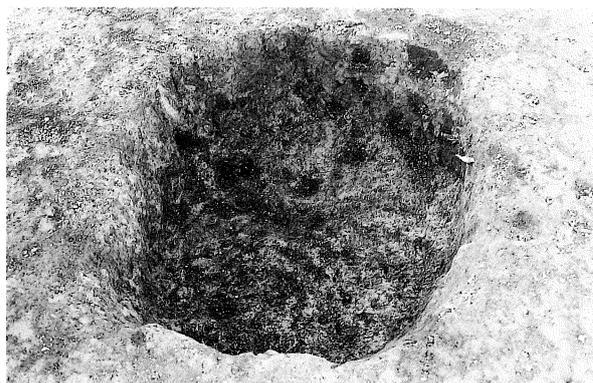
栗屋遺跡全景



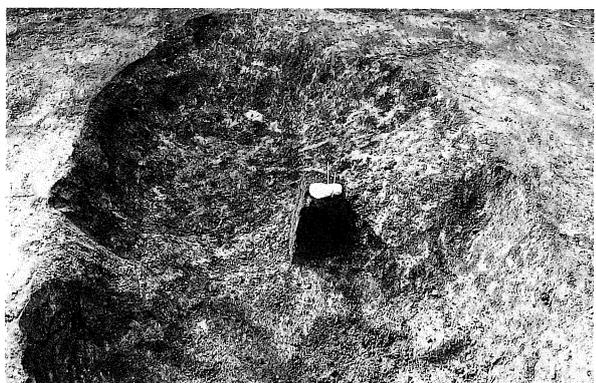
栗屋遺跡全景



第3号土壤



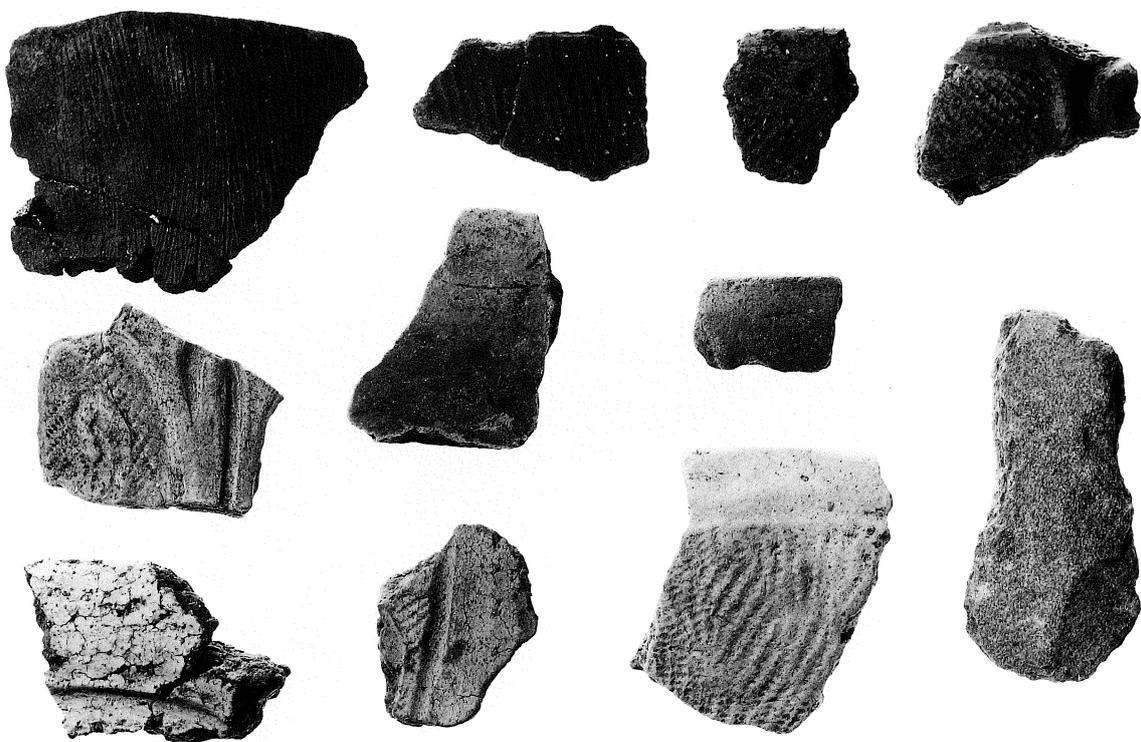
第6号土壤



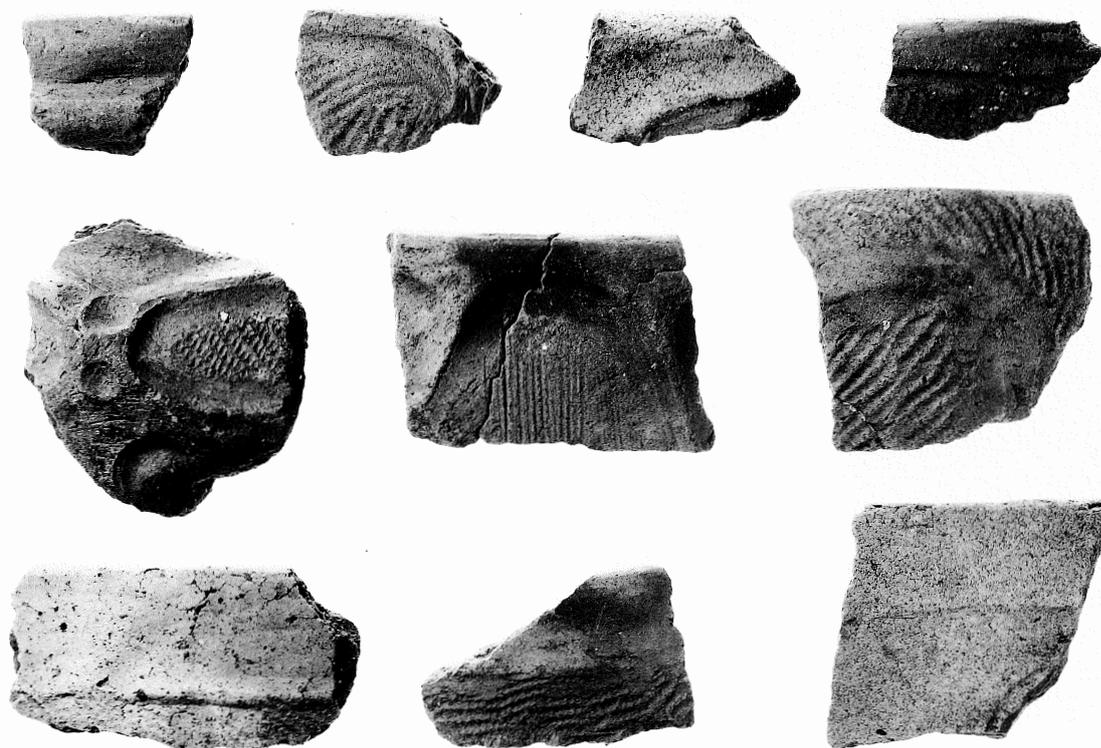
第9号土壤



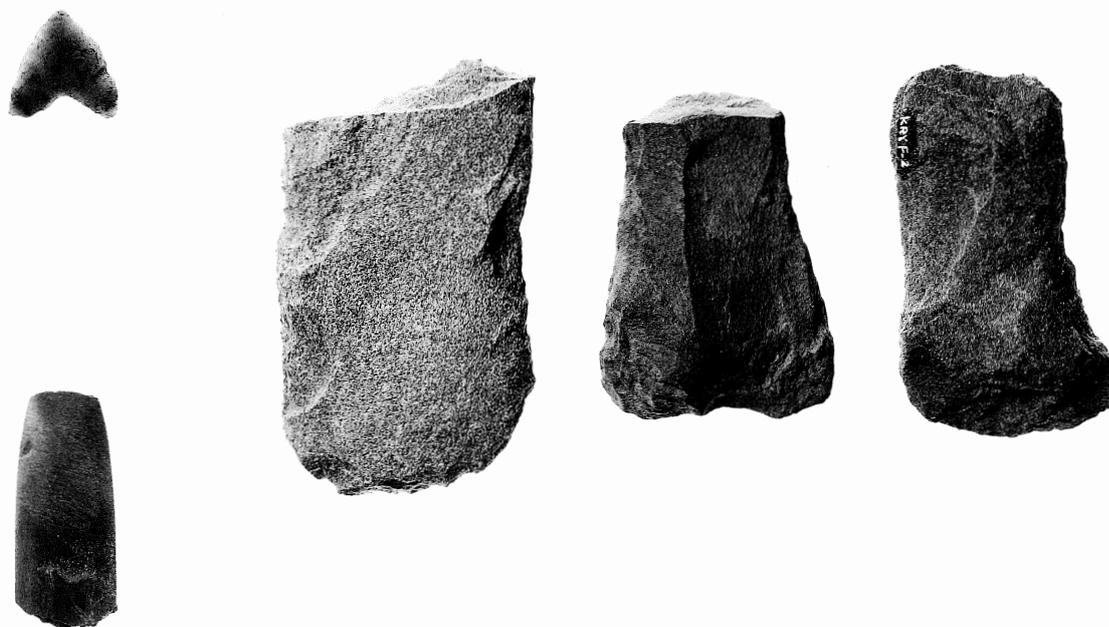
第10号土壤



土壤出土遺物 第7图



遺構外出土遺物 第8図



遺構外出土遺物 第10図



屋測遺跡全景



第1号土塊



第3号土塊



第4・5号土塊



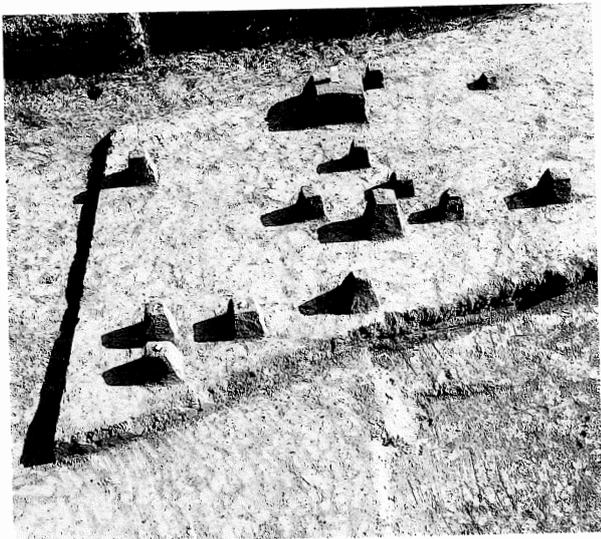
第11号土塊



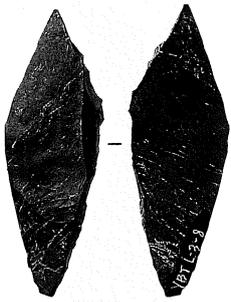
石器集中Ⅰ 北半（西から）



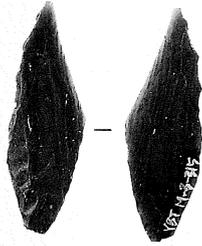
石器集中Ⅰ 南半（西から）



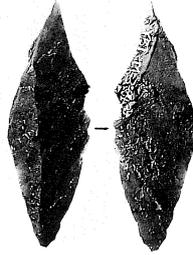
石器集中 I 石器出土狀況



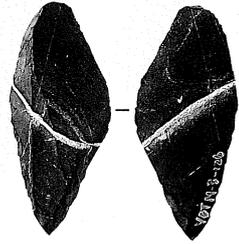
L 3 - 8



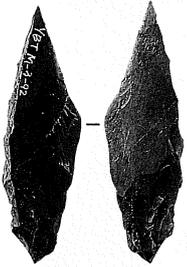
M 3 - 315



M 3 - 313



M 3 - 126



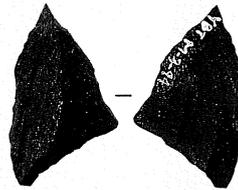
M 3 - 92



L 3 - 24



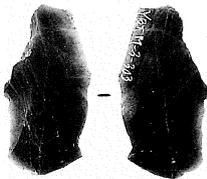
M 3 - 262



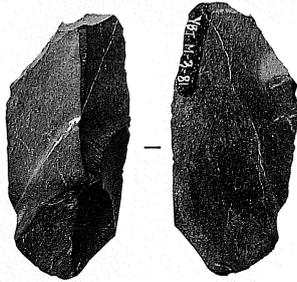
M 3 - 94



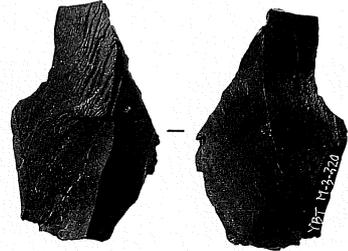
M 3 - 289



M 3 - 303



M 3 - 81



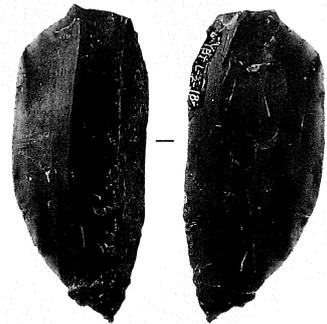
M 3 - 320



M 3 - 127



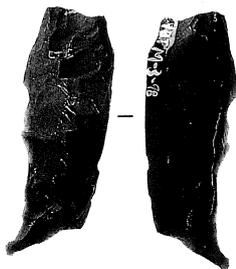
M 3 - 270
M 3 - 272



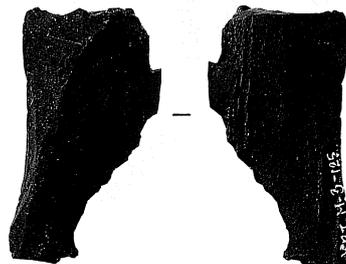
L 3 - 18



M 3 - 245

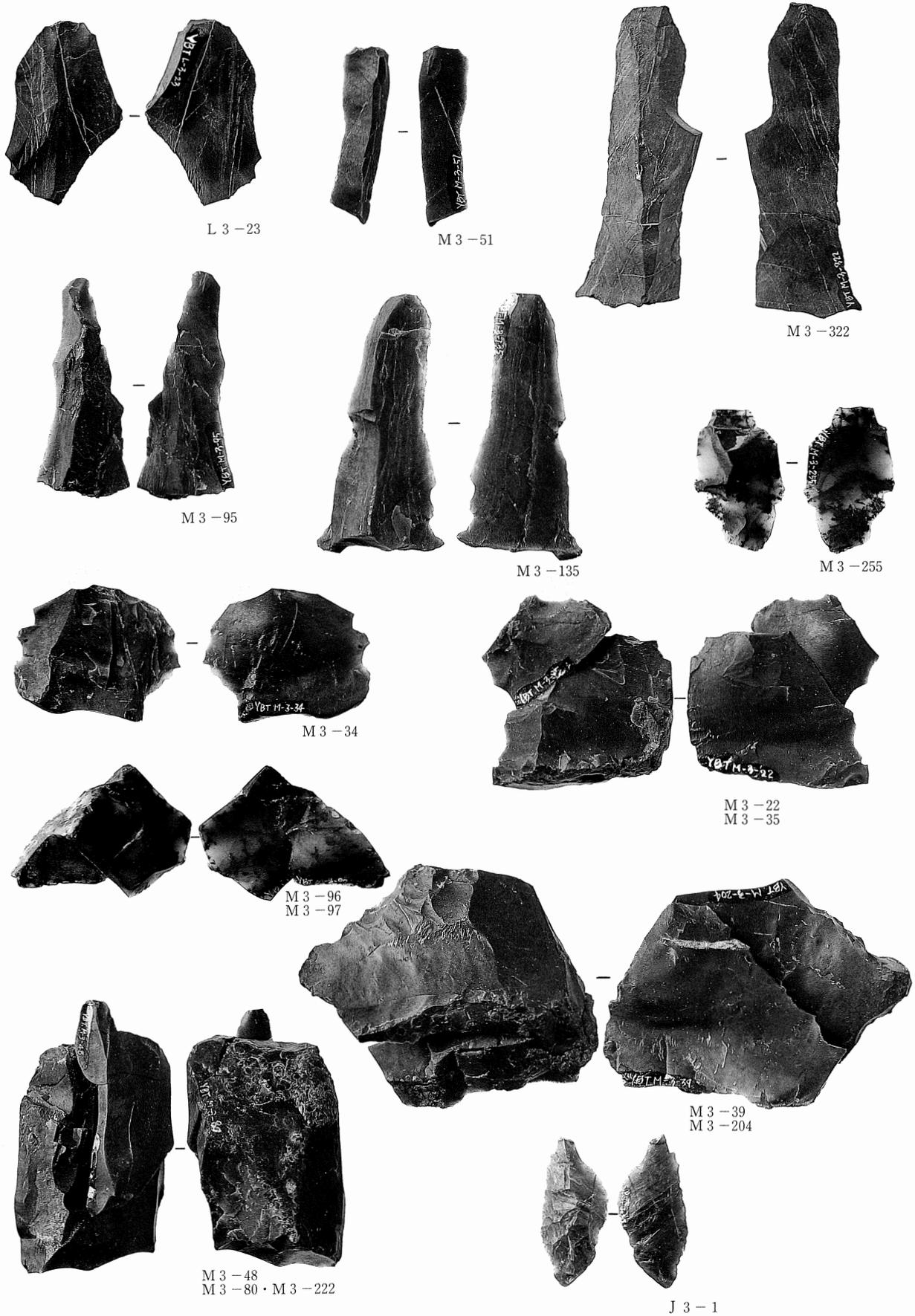


M 3 - 98



M 3 - 125

出土石器(1) 第15図・第16図・第19図



出土石器(2) 第16图~第17图·第20图~第22图·第25图



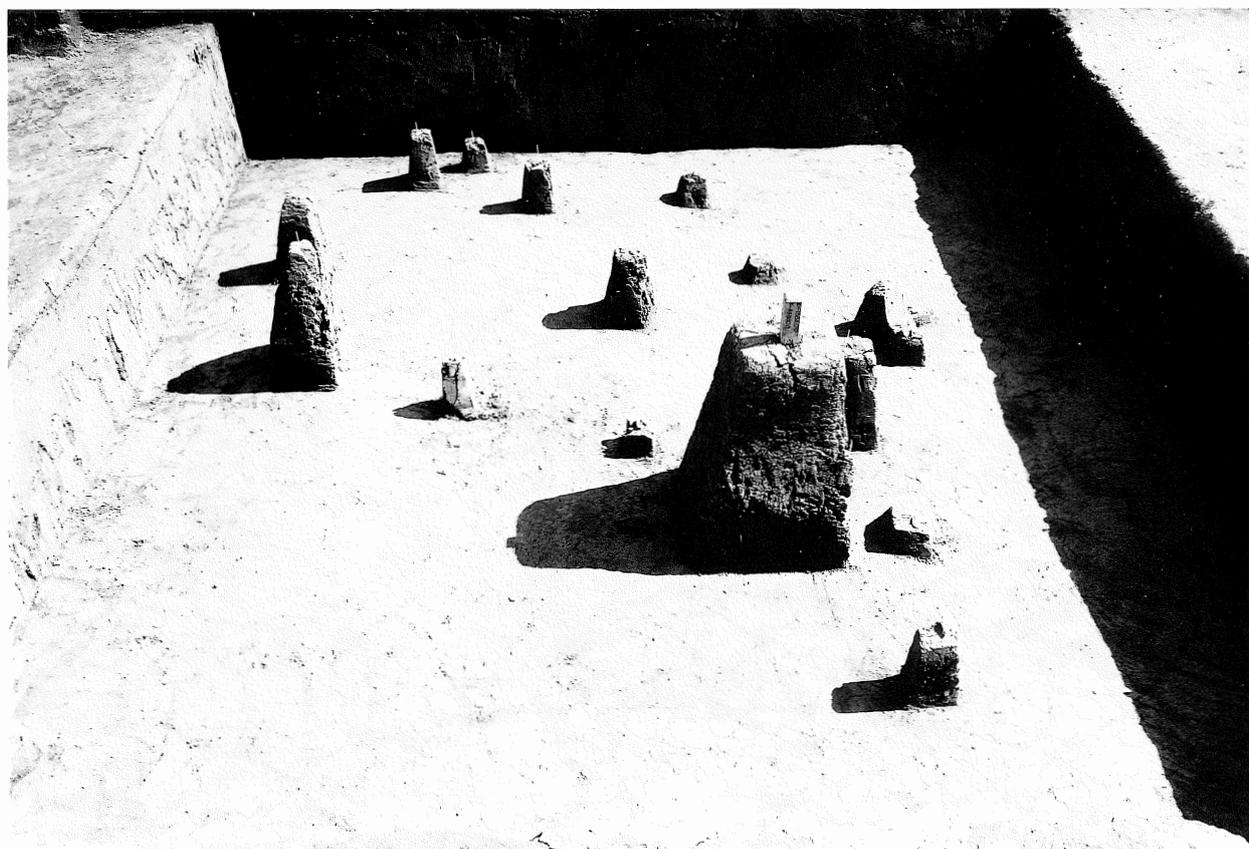
中台遺跡全景



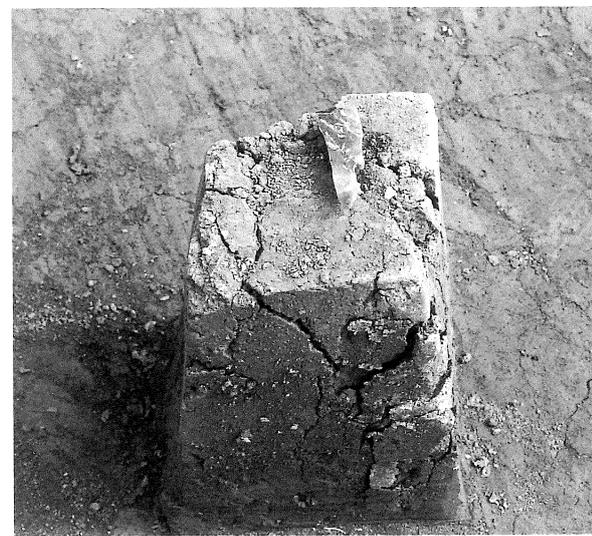
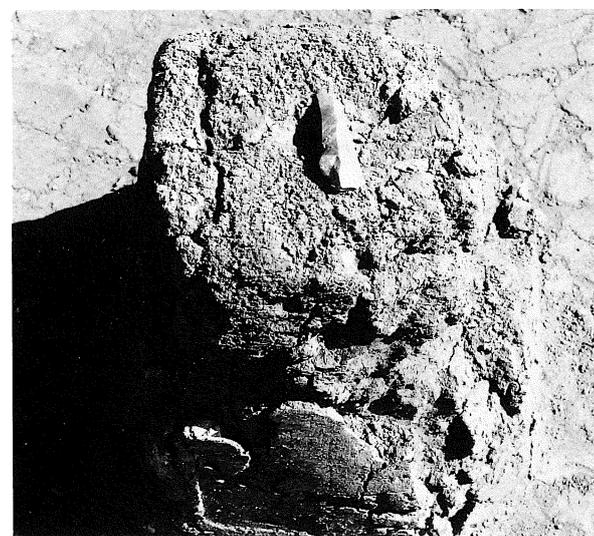
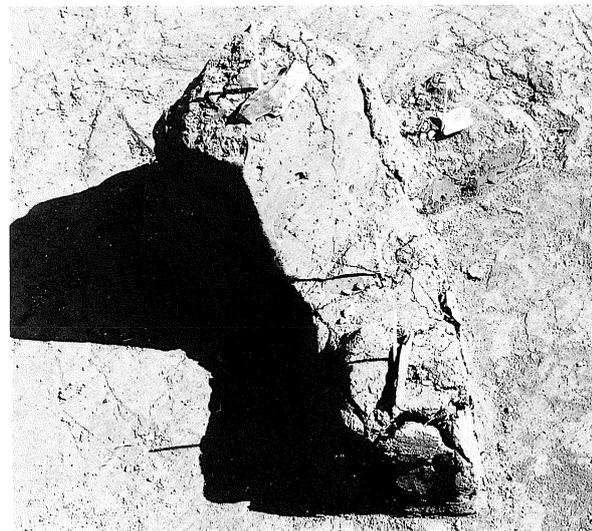
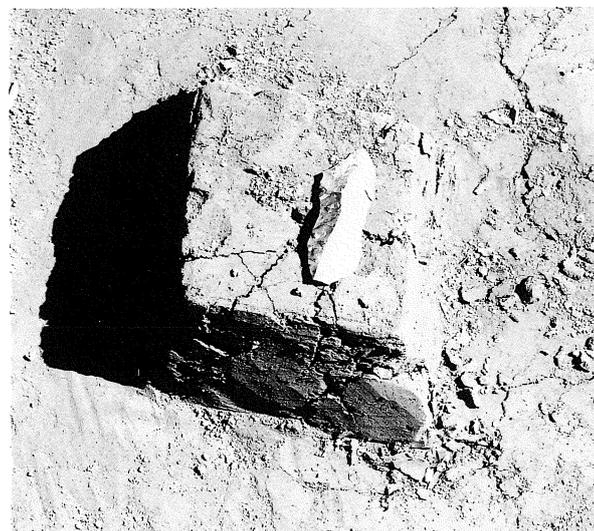
中台遺跡全景



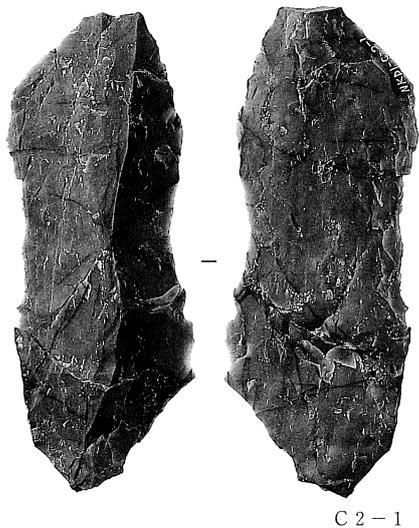
石器集中Ⅰ（南から）



石器集中Ⅰ（西から）



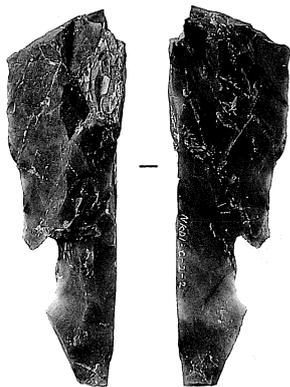
石器集中 I 石器出土状況



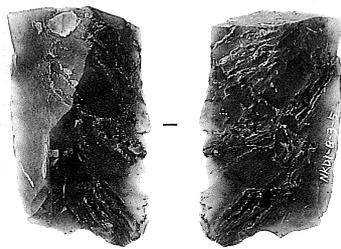
C 2-1



C 3-2



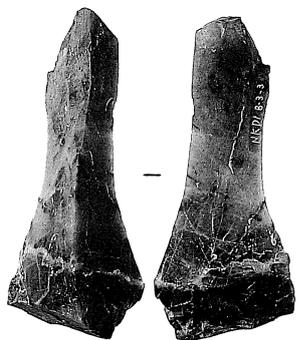
C 2-2



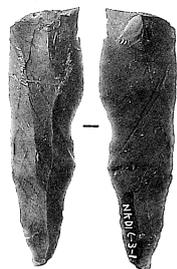
B 3-5



B 3-6



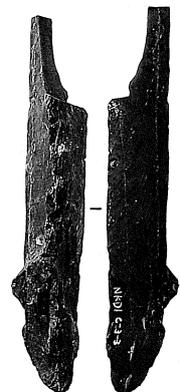
B 3-3



C 3-1



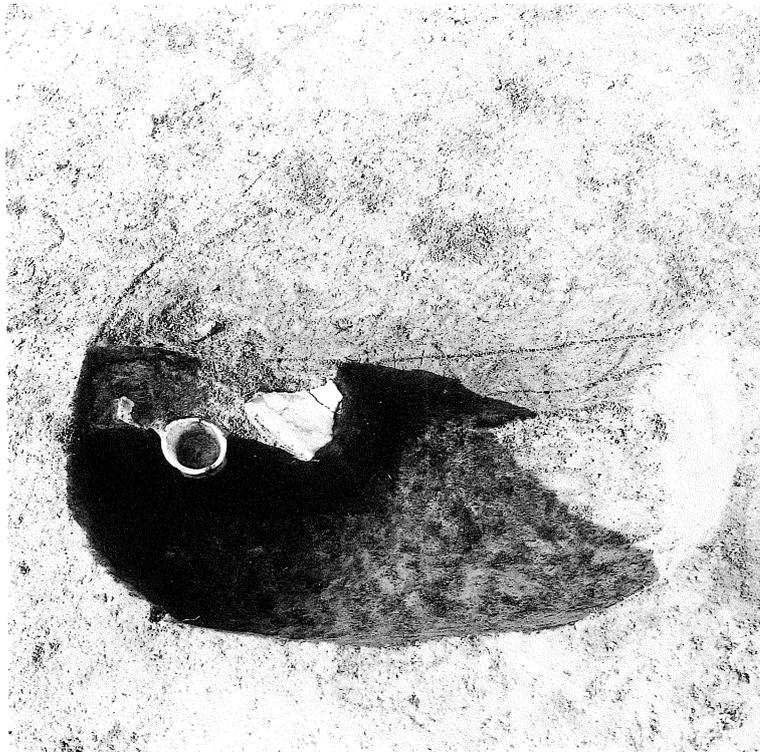
B 3-7



C 3-3



第1～5号土坑



第1号土坑遺物出土状況



第1号土坑出土土器 第36図

報告書抄録

ふりがな	くりや／やぶち／なかだい							
書名	栗屋／屋瀨／中台							
副書名	県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第171集							
編著者名	新屋雅明 西井幸雄							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884						TEL 0493-39-3955	
発行年月日	西暦1996（平成8）年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くりやいせき 栗屋遺跡	さいたまけんはんのうししもか 埼玉県飯能市下加 治134番地他	11209	009	35°51'45"	139°20'20"	19931001～ 19940331	5,800	道路建設
やぶちいせき 屋瀨遺跡	さいたまけんはんのうししもか 埼玉県飯能市下加 治300-2番地他	11209	084	35°51'32"	139°20'22"	19931001～ 19940331	2,700	道路建設
なかだいいせき 中台遺跡	さいたまけんはんのうしなみ 埼玉県飯能市双 柳1352-2番地他	11209	008	35°51'21"	139°20'23"	19931001～ 19940331	1,100	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
栗屋遺跡	集落跡	縄文時代		土壇10		縄文土器 石器		
屋瀨遺跡	集落跡	旧石器時代		石器集中1		ナイフ形石器 石核・剝片		
		縄文時代				土器		
		近世以降		土壇10				
中台遺跡	集落跡	旧石器時代		石器集中1		剝片		
		縄文時代		土壇5		土器		
		近世以降		土壇10				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第171集

飯能市

栗屋 / 屋瀨 / 中台

県道飯能寄居線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成8年2月15日 印刷

平成8年2月29日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話0493-39-3955

印刷／望月印刷株式会社